××はもはや、知識階級のグループの間の特權的な主張ではなくなつた。逮捕される勞働者の數は增加しつゝあつた。滿員にもかゝはらず監獄の空氣は凌ぎ易くなつた。第二年目の終りまでに、南露勞働者同盟事件の判決が下された。首謀者四人は四ヶ年間東部シベリア流刑を宣告された。この宣告の後、なほ私達は六ヶ月間モスコウの護送監獄に置かれた。私はその期間中を、猛烈な理論研究に利用した。そのとき、始めて私はレーニンのことを聞き、恰度その頃出たばかりの、レーニンのロシア資本主義發達に關する書物を、隅から隅まで研究した。それから、私はニコラエフの勞働運動に就てパンフレットを書き、こつそり監獄から持出した。パンフレットはその後ゼネバで出版された。夏になつて、私達はモスコウ監獄から送り出された。護送の途中、そのほかの監獄でもいろんな出來事があつた。服役地に到着したのは一九〇〇年の秋のことであつた。

第九章　最初の流刑

私達はレナ河を下つてゐた。囚人と護送の兵士を乘せた數隻の艀（はしけ）は、河の流れのまゝにのろ〳〵と搖られた。夜は寒く、朝になると、かぶつてゐた大きな外套に霜が重く降りてゐた。行く路々、前から指定されてあつた村々に一人、二人づゝ、囚人が上陸させられた。記憶してゐるところでは、たしかウスト・クートの村に私達が到着するまでに三週間ばかりかゝつた。ウスト・クートで、私

はニコラエフ當時からの私の親密な仲間の女囚と上陸させられた。アレキサンドラ・ルヴオウナは、南露勞働者同盟では重要な地位を占めてゐた。社會主義に對する彼女の献身と、個人的な野心を全然持つてゐなかつたことゝによつて、ルヴオウナは非難の打ちどころのない道德的權威を持つてゐた。私達のやつてゐた仕事は、私達ふたりを密接に結びつけてゐたので、私達は分離されることを避けるために、モスコウの護送監獄で結婚した。

ウスト・クートの村は百戸あまりの百姓家から成つてゐた。私達は村端れの一軒に落ちついた。まはりには森、下は河だつた。ずつと北方、レナ河の下流には、金鑛があつた。ウスト・クートは、泥醉者時代、淫行、强盜、殺人の時代を經驗してゐた。私達がゐた頃は、村は非常に平和だつたが、それでもまだ非常に泥醉者が多かつた。私達が住込んだ小屋の持主夫婦は常習的な飲んだくれだつた。ほかの世界から完全にかけはなれて、生活は陰氣で退屈だつた。夜になると、ごきぶり虫が家中を羽音で滿たし、卓やベット、私達の顏の上まで這上つて來た。絕えず、私達は一日ほど小屋から出て、華氏の零下三十五度の溫度のときに、小屋を開け放しにして置く必要があつた。

夏になると、私達の生活は、蚊のためにみぢめだつた。森に迷ひ込んだ牛は蚊に刺し殺されることさへあつた。農夫たちはタールを塗つた馬の毛の網を頭からすつぽりかぶつた。春と秋、村は泥に埋つた。なるほど、田舍は美しかつたけれども、その時代の田舍は私に冷酷だつた。私は田舍の生活に興味と時間を徒費することをきらつた。森と河の間に暮らしてゐたが、私は見向きもしなかつた——私は書物や個人關係に忙しかつた。ごきぶりを書物のページから拂ひのけながら、マルク

スを研究した。

レナ河は、流刑囚の大きな水上交通路だつた。刑期を終へたものは、河によつて南へ歸つた。しかし、各流刑囚の巣の間には通信が絶えず行はれ、××の波の高まるにつれて、頻繁になつた。流刑囚はお互ひに手紙を交換した。なかには、理論的な研究論文と云つて申分のないほどの長い手紙もあつた。イルクーツクの縣知事から、服役地の變更を許可してもらふことは、割合にやさしかつた。アレキサンドラ・ルヴオウナと私は、二百五十露里東方のイリム河岸の場所に移つた。そこには友人がゐた。しばらく、そこで私は或金持ちの商人の書記の仕事をやつた。この商人の有する毛皮倉庫や、店や、宿屋は、ベルギーとオランダを一つにしたよりもつと廣い地域に散在してゐた。有力な商業主だつた。彼の手下にある、何千人といふツングース人を『わしの小さなツングースども』と呼んでゐた。自分の名前も書けなくて、十の字を名前の記號にした。一年中しみつたれた生活をしておいて、ニジニ・ノヴゴロドの年市に一萬弗も使ひちらすのであつた。私はこの男の下で一ヶ月半働いた。すると、或日、私は鉛丹一封度を『一プード』(五十封度)と書付けに書き、このとてつもない書付けを遠方の店へ送つた。これですつかり雇主の信用をなくしてしまつて、私は解雇された。

そこで、私達はまたウスト・クートに歸つた。寒さは激しかつた。溫度は華氏の零下五十五度まで下がつた。馭者は馬の轡の氷柱を落し落し行かなければならなかつた。私は生後十ヶ月の女の兒を膝に抱いてゐた。私達は毛皮を煙突のやうにして女の兒の頭からかぶせ、その穴から呼吸できるやうにしてやつた。馬車の止まる度毎に、女の子の蔽ひを恐る恐る取つて、まだ生きてるかどうかたしかめるのだつた。けれども、その旅で、別に不幸なことも起らなかつた。私達は、ウスト・クートには永く滯在しなかつた。數ヶ月の後、知事は、も少し南方のヴエルホーレンスクといふ土地に移つていゝといふ許可をくれた。そこにも友人がゐた。

流刑囚の間の貴族階級は、流刑の長い年月の間に多少身をかためることに成功してゐた古い人民黨員の連中であつた。若いマルクシストたちは、彼等だけで特別な一派をなしてゐた。何んらかの運命のいたづらで大衆から離されたストライキ勞働者たち――無學者が多かつた――が北の方へ流れ始めたのは、私達のゐる時分からだつた。この連中にとつて、流刑は政治的な一般的な教養の、願つてもない學校だつた。知識上の不和が個人的問題に關する喧嘩によつて益々猛烈になつた。といふのも非常に澤山の人間が無理やりに監禁されてゐる場所には當然なことである。個人的な、殊にロマンテイツクな衝突が、ときには、ドラマの規模を持つた。ヴエルホーレンスクで、私達は代る代る、キエフから來た一人の學生を監視することになつた。私は、その學生の卓の上にきら〳〵する剃刀を發見したことがある。その後、彼が獵銃の散彈をつくつてゐたのを發見した。私達の監視は無益だつた。鐵砲の銃身を胸にあてゝ、彼は足で引金を引いた。私達は彼をだまつたまゝ丘に埋めた。その頃、私達はまだ演說するのがはづかしかつた。何にか知ら演說にはわざとらしいものがあるやうな氣がした。大きな流刑植民地全體にわたつて、自殺者の墓があつた。流刑者の或者は地方の住民、殊に都會の住民の中に同化されてしまつた。また、酒を飲み出すものもあつた。流刑で

も、監獄でも、救つてくれるものは、はげしい知識的な仕事だけだつた。かうした事情の下にあつて、知識的な仕事をいくらかでもやつたものはマルクシストだけであつたことを、ことわつておく。

その頃、チエルジンスキーやウリツキー、そのほか、將來に非常に重要な役割を演ずる運命をもつた若い革命家たちに逢つたのは、その大きなレナ河の岸であつた。私は、到着して來る群を熱心に待つてゐた。或暗い春の夜、レナ河の岸の篝火のまはりに坐つてゐたとき、チエルジンスキーはポーランド語で、自分の詩を讀んでゐた。彼の顔と聲は美しかつたが、詩は大したものぢやなかつた。その男の生涯は、詩の中でも一番波瀾の多い詩の一つとなるべき運命であつた。

ウスト・クートに到着して間もなく、私はイルクーツクの新聞『ヴオストチノーエ・オボゾレニエ』(東方評論)に論文を寄稿し始めた。それは古い人民黨流刑者たちが創始した合法的な地方新聞であつたが、時々、マルクシストの手に落ちた。私は村の通信員として始めて最初の記事の出るのをやきもきして待つた。編輯者が私の寄稿をすゝめて來、私はまもなく社會的な問題と同時に文學に就て書き始めた。或日、私はペン・ネームを考へようとしてゐるとき、イタリー語の字引を開いたら、一番先に眼についた單語は『アンチドーオ』だつた。そんなところから、私は數年間、『アンチド・オート』といふ署名を使つた、そして友人たちに、慰み半分に、私は合法的な新聞にマルクス主義的解毒劑(アンチドート)を注射してやるんだなどゝ說明した。しばらくすると、私の原稿料は、一行二コペックから四コペックに跳上つた。成功の證據だつた。私は農民に就て書いた。それからロシアの古

典的作家に就て、イブセン、ハウプトマン、ニイチエ、モウパッサン、アンドレエフやゴールキーに就て書いた。正確な觀念や正しい言葉の表現を見出さうとして、幾晩もつゞけさまに原稿を書きなぐりながら起きてゐた。私は著述家になりつゝあつた。

私が革命思想を避けようとしてゐた一八九六年から、それからその翌年既に革命的な運動をやつてゐながらもマルクス主義學說を避けようとしてゐた時代から、私は長足の進步をしてゐた。流刑の頃には、マルクシズムは、はつきり、私の哲學の根柢となつてゐた。流刑中、私は當時到達してゐた新しい見地から、いはゆる『永遠的な』人生問題——愛や死や友情や樂觀や悲觀などを考察して見ようと思つた。時代と社會的環境の異なるに從つて人間の愛憎、希望はちがつて來る。恰度樹木が、根でもつて地中から吸收した養分で葉や花や果實を養ふやうに、個人はその情操や觀念、それから、もつともつと『崇高な』ものに與ふべき養分を、社會の經濟的根幹に見出すのである。その頃私の書いた文學的論文は、實のところ、唯一つのテーマ——即ち、個人と社會との關係——から出發した。ちよつと以前、これらの論文は一卷となつて出版された。さうした論文を集めて見て、私は、今日だつたらもつとちがつた風に書いたゞらうが、その內容は變へるべき必要はなかつたゞらうといふことを認めた。

その當時、官許の、ないしは所謂『合法的な』ロシア・マルクシズムは危機の苦しみをなめてゐた。新しい社會的要求なるものが、如何に鐵面皮に、彼等自身に必要な知識的衣裳を、全く別なことのためにつくられた理論の布地から、創り出さうとしてゐるかを、實經驗から私は見拔いた。九

十年代までは、ロシアのインテリゲンツイアの大部分は、資本主義の發達を排斥し、農民の土地共有制を理想化した人民黨理論に沈滯してゐた。しかも、その間に資本主義はインテリゲンツイアに向つて、あらゆる種類の物質的恩惠と政治勢力の約束を提供しつゝあつた。マルクシズムの鋭利なナイフは、ブルジョア・インテリゲンツイアが人民黨といふ臍の緒を切落して、いやな過去から身を切離す道具であつた。前世紀の末期の急激な、とん〳〵拍子のマルクシズムの傳播の理由はこれであつた。

けれども、これを、マルクシズムが仕遂げるや否や、マルクシズムはその同じインテリゲンツイアを惱まし始めた。マルクシズムの辯證法は資本主義の發達過程の進展を證明するには便宜だつたが、その辯證法が資本家制度全體の××的排擊に到達するのを發見して、これを障害物と宣告し、古臭ひと云ひ觸らした。世紀の變り目、恰度私が監獄や流刑地にあつた頃、ロシアのインテリゲンツイアはマルクシズムの批判の大流行期を經驗しつゝあつた。彼等は資本主義の歷史的存在理由を承認し、××的方法による資本主義排擊を投捨てた。古代的な同情心を持つた古い人民黨インテリゲンツイアはかうした廻りくどい方法で、しだいしだいに自由主義的なブルジョア・インテリゲンツイアに變形しつゝあつた。

かくて、マルクシズムのヨーロッパ的批判は、品質の如何はとにかくとしてロシアに手輕な聽手を見出した。エドワード・ベルンシユタインが、社會主義から自由主義への一番好人氣の手引の一人となつたことを言ふだけで十分である。規範哲學が、益々自信を以て凱歌をあげながら、唯物辯

證法を押しのけつゝあつた。ブルジョアの輿論は、その形成期にあつては、單に專制的官僚の壓制ばかりでなく大衆の野蠻な革命主義に對して自己を守るために、搖ぎのない規範を必要とした。カントはヘーゲルを覆へしたが、やがて彼の地位もあまり永つゞきはしなかつた。ロシアの自由主義は極く新しく最初から火山性の地味に生存した。命令的な範疇は、あまり抽象的で信賴できない保證だといふことが分つた。革命的大衆を擊退するにはもつと强い手段が必要だつた。先驗的な理想主義者は正教會のキリスト教信者になつた。經濟學教授のブルガコフは、土地問題に關するマルクシズム修正に始まつて理想主義へ行き、果ては坊主になり終つた。しかし、この最後の段階に到達したのは相當、後のことである。

現世紀の初頭には、ロシアは社會思想の一大實驗室であつた。フリーメーソン制度に關する私の研究は、歷史過程に於て思想が第二次的な地位しか持たぬといふ悟りで、私を身固めさせてくれた。『思想は天から降つて來ない。』――私は年寄つたラブリオラの言葉をくりかへした。

今は純正科學の研究は問題ではなくて、政治的進路の選擇が問題であつた。あらゆる方向に向つて進軍してゐたマルクシズムの修正は、他の澤山の青年マルクシストの場合と同じく、私を助けてくれた。――私達に決心を固めさせ、私達の武器を磨く手助けをしてぐれた。私達はマルクシズムを必要とした。それはあまり害にもならなかつた人民黨主義を逃れるためばかりではなく、資本主義の領土で資本主義と堂々たる戰ひを實際に開始する爲に必要だつた。修正派に對する鬪爭は、理論の分野ばかりでなく政治的に私達をしつかりさせてくれた。私達はプロレタリア的革命家となり

つゝあつた。

この同じ頃、私達は自分達の左翼からの批判に澤山出遭はした。地方の流刑植民地の一つに——たしかヴイリユイスクだつたと思ふ——ミハイスキーといふ流刑囚がゐた。彼の名は間もなく一般に知られた。ミハイスキーが社會民主々義的日和見主義の批判者として切出した。ドイツ社會民主々義の暴露に傾注した謄寫版刷りの彼の最始の論文は、流刑囚の間に非常な評判となつた。彼の第二の論文は、マルクスの經濟學體系を批判して、社會主義なるものは職業的インテリゲンツイアによる勞働者の搾取の上に建てられた社會秩序であると云ふ、あきれかへる結論に終つた。第三の論文は、アナーキスト的アンヂカリズムの精神を汲んで、政治闘爭排擊を主張した。數ヶ月間、ミハイスキーの研究はレナ流刑囚の興味の首位を占めた。彼の研究は、アナーキズム——口先の否定だけは非常に景氣がよいが、その實際的結論は生氣がなく臆病な理論——に對する私の反感に接木した。

モスコウの護送監獄で私は始めて生きたアナーキストにあつたことがある。彼は村の小學校教師でルーヂンと云つた。控へ目な、口かずの少ない、むしろ冷酷な男だつた。監獄では、彼はいつも刑事犯人と一緒にゐることを好んで、强盜や殺人談に一心不亂に聽き入つた。理論の討論は避けた。しかし、一度私が自治的な共產體によつて鐵道はどういふ風に管理するかを言はせようとすると、彼は答へた。——

『いつたい、アナーキズムの下で、私が鐵道で旅行したいなんて思ふ筈があるもんか?』

それだけの答で澤山だつた。ルーヂンは勞働者たちに取入らうとしてゐた。私達は、敵意を含んだ噂闘をつゞけた。

私達は一緒にシベリアの旅をした。非常に水の出てゐるとき、ルーヂンはレナ河をボートで渡らうと決心した。彼は多少不まじめな氣持で、私に一緒に行かうと挑んで來た。私は承知した。流木と獸の死骸が水嵩を增した河の面を流れてゐた。渦も澤山卷いてゐた。ひや〳〵した瞬間もあつたが無事に渡り終つた。ルーヂンは一種のお世辭を云つた。——『あつぱれな同志』、とか何んとか云つたやうだつた。それから私達は多少親しくなつた。けれども、その後間もなく、彼は更に北方の土地へ移された。二三ヶ月して彼は地方の××××××をナイフで刺した。その××はあまり性質の惡くない男で傷も淺かつた。審問でルーヂンは、個人的にはその××へ遺恨はないが、この男を通じて××××××したかつたのだと述べた。彼は苦役を宣言された。

遠く離れた、雪に埋もれたシベリアの流刑植民地での激しい議論、——ロシア農民の分化とか、英國の勞働組合、絶對命令(カテゴリカル・インペラチーヴ)と階級利害の關係、マルクシズムとダーウイニズムとの關係と云つたやうな議論が沸騰してゐるとき、——政府の方面では特種な闘爭が行はれてゐた。一九〇一年の二月に、神聖宗教會議がレオ・トルストイを破門した。

布告はすべての新聞紙へ發表された。トルストイは六ヶ條の罪を被せられた。

1　本人は神聖なる三位一體に加へられた人格的な、生ける神を否定してゐる。

2　本人は死より蘇りたまへる神人キリストを否定してゐる。

3　本人は神母の處女受胎と降誕前後に於ける處女性を否定してゐる。

4　本人は死後の生活と罪障の應報を認めない。

5　本人は聖靈の恩澤を否定してゐる。

6　本人はユカリストのサクラメントを嘲笑してゐる。

ごま鹽ひげの大主教たち、それらの者を煽て上げるボベドノスチエフ、そのほか私達革命家を以て罪人とまで言はなくとも半狂ひの空想家――ところが、彼等自身の眼に映じた彼等なるものは人間の歴史的經驗に立つたまじめな思想の代表者であつた――と見なす國家の柱石、この連中は、偉大な現實主義的藝術家に向つて、處女受胎の信仰と聖餅に變質した聖靈の信仰に同意せよと要求したのであつた。私達はトルストイの異端の箇條をくりかへし讀んで、讀みかへす毎に新にびつくりして、自分に向つて言つた。――いや〳〵、人間の經驗の上に立つものは私達であり、未來を代表するものも私達であり、これに反して、この上層にある人間どもは單に××であるばかりでなく、同時に××である。私達はこの×××を改良し得ることを絶對に確信する、と。

古い××××は、その基礎工事全體に龜裂を生じつゝあつた。依然として學生が鬪爭の張本人であり、じれつたくなつた彼等はテロリズムの手段を取り始めた。カルポヴイッチ*とバルマショフ*が彈丸を發射した後、流刑人はみんな、喇叭の警報を聽いたときのやうに愕かされた。テロリスト的手段の使用に就て議論が始まつた。個人的な逡巡があつて後、流刑囚のうちマルクシスト一派はテロリズム反對のレコードをつくつた。强度の火藥の化學は大衆行動に取つて代ることはできない、

と私達は云つた。壯烈な爭鬪で、個人を滅ぼすことはできるかも知れないが、それは勞働階級の××を喚起することはないであらう。私達の任務は××××××××することではなくて、ツアーリズムの××××××である。社會民主黨の社會革命黨との境界線はこゝにある。私の理論的見解は監獄で形成されたが、私の政治的自己決定は流刑中に養成された。

*カルポヴイッチは文部大臣のボゴリエポボフを一九〇一年に射つた。

*バルマショフは內部大臣のシピヤギンを一九〇二年に射つた。

かうして二ヶ年が經過し、セント・ペテルブルグやモスコウやワルソーの橋の下を、多量の水が流れ去つた。地下に始まつた運動は、今や都市の街路を濶歩してゐた。地方によつては農民が騷ぎ出しつゝあつた。社會民主黨の團體がシベリア鐵道に沿うてシベリアにまで生れた。これらの團體は私と接觸を持ち、私は宣言やリーフレットを書いてやつた。三ヶ年の中絶の後、私は實際鬪爭の陣營に復歸しつゝあつた。

流刑者たちは、もはや、この監禁の土地に止まつてゐたくなかつた。脫走の傳染病が蔓延した。私達は驛傳制度をこしらへる必要があつた。殆ど村といふ村に、青年當時舊時代の革命家の影響を受けた農夫がゐた。この連中が『政治犯』をこつそりボートや馬車や橇で送り出し、次から次へと引次いだ。シベリアの警察は私達と同じやうに無力だつた。廣大な國土は私達の味方であると同時に敵でもあつた。逃亡者を摑へることは困難だつたが、警察の見込みは、逃亡者が河にはまつて死ぬか原始林の中で凍え死ぬかにかけられた。

××運動は廣く、遠くひろがつたが、しかしまだ、統一を缺いてゐた。各縣、各都市が別個の鬪爭をやつてゐた。ツアーリズムは一致行動といふ貴重な利益を持つてゐた。集中された政黨を創る必要が、多くの××家の心を占めて來た。私はこれに關する論文を書き、この寫しを流刑植民地全體へ配布した。ロシアや國外にある私達、社會民主黨仲間はこの問題にあまり考察を與へてないやうに私達には思はれた。しかし、仲間は考へるよりも行動してゐた。一九〇二年の夏、私はイルクーツク經由で、すばらしくきれいな紙に印刷された國外の最新刊を綴り込んだ書物をたくさん受取つた。私はこの新刊によつて、國外で發行されてゐるマルクス主義の新聞、イスクラがあることを知つた。鐵のやうな規律を以て結合された職業的××家の集中的團體の創設を、イスクラは目的としてゐた。また、レニンの書いた書物も屆いた。ゼネバで出版された『何にを爲すべきか?』といふ題の書物である。これもまた、終始一貫、同じ問題を論じてあつた。私の肉筆の小論や新聞記事やシベリア同盟のために書いた宣言は、私達に當面した新しい尨大な任務の前に、急に、貧弱な田舍臭いものに見えた。私は活動の新しい分野を探さねばならなかつた。流刑を脫走せねばならなかつた。

その當時、私には、すでに、娘がふたりあつた。小さい方は生後四ヶ月だつた。シベリアの生活狀態は樂でなかつた。若し私が脫走すれば、アレキサンドラ・ルヴオウナの肩に二倍の重荷がかゝることであつた。しかし、この反對意見に對して彼女は二語ではねつけた。――

『是非とも、あなたは。』

ルヴオウナにあつては、××の義務の前に、凡るものが影を消した、殊に個人的の心配などは。私達が大きな新任務を自覺したとき、私の脫走を切出したのもルヴオウナだつた。私の疑懼など、彼女は拂ひのけてしまつた。

私が脫走してから數日後、ルヴオウナは警察に私の不在をごまかした。國外にあつた私はどうにかかうにかして、ルヴオウナと通信をつゞけた。やがてルヴオウナは二回目の流刑を受けた。そのあと私達は、しかもひよつくり、めぐり合つた。生活はふたりを引離したが、何にものも、私達の友愛と智的血緣を截切ることはできなかつた。

第十章　第一回の脫走

拔き差しのならぬ道路で脅しつけながら、秋は近づいてゐた。私の脫走を急ぐため、私達は一石二鳥の決心をした。或農夫が、ヴエルホーレンスから、私をマルクスの婦人飜譯家、E・Gと一緒に送り出してくれることを承諾してくれた。夜、畑で農夫は私達を、普通の積荷であるかの如くに見せて菰や乾草にかくして車に積んだ。同時に、警察の疑惑を避けるため、私の家には數日間、病人と假定した人形を寢かせておいた。馭者はシベリア流儀に、一時間に二十露里も走つた。道伴れの呻き聲と一緒に、私は背にどしんどしんと來る衝擊をかぞへたてた。旅行中、馬は二度取換へられ

た。鐵道に行きつく前に、道伴れと私は別々の道を行つた。お互ひに一方が招く災禍と危險に卷添へを喰はないためである。私は、無事に列車に乘込んだ。そこでイルクーツクから來た友人が、糊のいつたシャツやネクタイやその他、紳士生活の附屬品を一ぱい入れた旅行鞄をあてがつてくれた。私の手にはグニエデイッチのロシア六哥歩格（ヘクサメーター）の『イリヤッド』が一册握られてあり、ポケットにはトロッキーの名前でこしらへた旅券が入つてゐた。この名前が將來全生涯の私の名前になるとも想はないで、出たらめに書き込んだのであつた。私は、シベリア鐵道を西に向つて進んだ。停車場の警察は氣にとめなかつた。

停車場、停車場には、背の高いシベリア女が、ロースト・チキンや、軟かい豚や、牛乳や、大きなパンの塊りを賣つてゐた。どの停車場もシベリアの産物の展覽會だつた。旅行中、滿員の客車はお茶を呑み、安いシベリア菓子パンを食べた。私はヘクサメーターを讀み、國外生活を夢みた。脫走は、ロマクテツクな魅力など全くないことが分つた。それはひつきりなしにお茶を呑むことに變つてしまつた。

私はサマラで下車した。そこは『イスクラ』の國内總本部――外國亡命本部と區別される――の中心であつた。その首班にはクレルといふ人が立つてゐた。この名前は、現在、國家計畫委員會の議長クルチチャノウスキー技師の變名であつた。彼も彼の細君も、レニンの友達であり、レニンと一緒に一八九四―五年のセント・ペテルスブルグで社會民主黨の活動をやり、シベリアに流刑されてゐた。一九〇五年の革命の敗北後、クレルは何千人の革命家と一緒に黨をやめて、技師として産

業界に重要な地位を獲得した。祕密運動をつゞけてゐた革命家たちは、昔の自由主義者ですら與へてゐた援助をしてくれないと云つてクレルを恨んだ。十年ないしは十二ヶ年の中絶の後、クルチチャノフスキーは黨が權力を握つて後、黨に復歸した。これが、今日、スターリンの政治の背骨となつてゐるインテリゲンツイアの大半の進路であつた。

サマラで、私は、――云はゞ公認されたかたちで、――イスクラ團に加はり、私のシベリアでのジャーナリストとして成功に對する褒賞として、クレルがつけてくれた『ペロ』（ペン）の名前を取つた。この團體は黨を幾回となく建て直した。一八九八年にミンスクで開かれた第一回黨大會は集中的な黨を樹立し損ねた。大檢擧は、まだ全國的にしつかり根を張らない初期の組織をつぶしてしまつた。その後、××運動はたえず、地方的な性質を維持しつつ、各中心地に生長して行つた。同時に、××運動の知識水準は低下の兆候を見せた。社會民主黨は、大衆獲得を目ざして、その政治的スローガンを表面から引込めた。かくして、社會民主黨政策のいはゆる『經濟主義』派なるものが發展した。この派は産業的好景氣とストライキの優勢に力を得た。世紀の終り頃から、恐慌が發展して全國にわたつて對立を激成し、政治運動に強い刺戟を與へた。イスクラは、地方的な『經濟主義者』に對して戰鬪的な運動を開始し、集中的な××的な政黨を主張した。いはゆる『職業的』××家のうちから用心深く人間を集めてゐた機關に、イデオロギーの安定を與へ、理論と實際的方法の統一で結束させるために、イスクラの總本部が國外に確立された。當時まだ、イスクラの一味は、大概、インテゲンツイア出身だつた。彼等は地方の社會民主黨委員會の統制と、イスクラの思

想と方法の勝利を保證するやうな黨大會とを闘ひ取らうと努めた。これは、實のところ、その革命團體の、發展するかと思へば停滯し、前進するかと思へば退却しつゝも、次第に勞働大衆に緊密に結びつき、遠大な任務を背負うて十五年後にブルジョアジーを××して權力を握るに至つた革命團體の、極く大ざつぱな輪廓にすぎない。

サマラの機關の要求によつて、私はハルコフ、ポルタワ、キエフを訪れ、既にイスクラに加盟したものや、まだ獲得されてない革命家に澤山會つた。私は、あまり成績もあげずにサマラに歸つた。南方との聯携はまだ弱かつた。ハルコフでは、私の受取つてゐた宛名は僞せだと分つた。ポルタワでは私は一種の地方的愛國主義にぶつゝかつた。地方へ唯一回の旅行だけでは何にも得られないことは明瞭だつた。執拗な活動が必要だつたのだ。その間に、サマラ書記局と活潑な通信を保つてゐたレニーンが私に外國行を急きたてた。クレルは私に旅費を提供し、カネツツ・ポドルスクの附近のアウストリヤ國境を横斷しろといふ入れ智惠をしてくれた。

悲劇的なといふよりは、むしろ愉快な冒險の一鎖が、サマラの停車場を振出しに始まつた。停車場の警察に二度出遭すことを避けるために、私は最後の間際になつて列車に乘込むことに決めた。ソロヴイヨフといふ學生が私の坐席を取つてくれ、列車に旅行鞄を持込んでくれた。この學生は、現在石油シンヂケートの幹部の一人である。私は、停車場からずつと離れた野原で時計を見ながら行きつ戻りつしてゐた。と、急に第二のベルを聞いた。私は列車に乘遲れたと思つて、あらん限りの力で停車場へ突進した。約束通りに客車の中で私を待つてゐたが、汽車が動き出した以上、飛降

りなければならなかつた。ソロヴイヨフは停車場の警官や驛員にとりまかれてゐた。出發した列車をめがけて大急ぎで息を切らしてかける男の姿は人目を惹いた。警察はソロヴイヨフを處分するといきまいたが、こちらからの袖の下で、皮肉な笑ひ話にすませてしまつた。

私は何んの故障もなく國境に到つた。最後の驛で警官が旅券を要求した。私が旅券をすつかり贋造したものだと警官に發見されたとき、私は心から愕いた。大學豫科に通つてゐる生徒が國境をこつそり出してくれる仕事を引受けてゐた。この生徒は今はソヴイエット共和國の科學研究所を指導してゐる大化學者である。その子供は政治的見解では社會革命黨に肩を持つてゐた。私がイスクラ團に屬してゐるのを聽くと、彼は云つた。——

『貴方はご存じないですか、イスクラが、最近號でテロリズムに對して破廉恥な論爭をやつてゐるのを?』

私が理論的な議論をやらうとすると、その青年は非常に怒つた顏付でつけ加へた。——

『僕は貴方の國境橫斷の案內はやめた。』

この言葉は、思ひがけなかつたゞけに、愕いた。だが、それは無理もなかつた。十五年後には私達は武器を取つて社會革命黨と戰はなければならなかつたのだから。しかし、そのときは、歷史の展望などに私はかまつておれなかつた。私はイスクラの記事のために私を咎めるのは卑怯だと主張し、しまひには、案內して貰ふまでは何處へも行かないと云ひ出した。その子は私が可哀さうにな
つた。

『さう、ぢあ、力を藉してあげよう。だが、もうこれっ切りだつて、云つて下さい。』

この子は、私を翌日歸つて來る筈の行商人の留守宅に留まらせた。私は、うす〳〵記憶してゐる。たしか、私はその錠を下ろした家へ窓からもぐり込んだことを。夜中に私は灯のひらめきに、ふと眼をさました。山高帽をかぶつた見知らぬ小男が、蠟燭とステッキを手にして私に覗き込んでゐた。天井からは大きな人影が私に這ひかゝつてゐた。

『君は誰だ?』——と、私は呶鳴つた。

『これあ、おもしろい!』と、見知らぬ男は答へた。——『わしのベッドに臥てゐながら、誰かもないもんだ!』

これが、主人であることは、言ふまでもない。翌日まで歸つて來ないだらうと思つてたと說明しようとしたつて、何の甲斐もなかつた。

『私がいつかへらうと大きにお世話だ。』と主人は云つた。尤もな話である。形勢はやゝこしくなつて來た。

『分つた、——と主人は說明した。——これもアレキサンダーのいたづらだ。しかし、まあ、話は明日のことだ。』

問題の原因はこゝにゐないアレキサンダーだといふ主人の名案に、私は待つてましたと調子を合せた。その夜、私はこの行商人と過した。行商人は鄭重にお茶までお馳走してくれた。

翌朝、その大學豫科生は、私の主人に萬事を說明する大騷動のあと、私をブロディ村の密輸入者

に引渡した。私はその日、或納屋で過ごした。その持主のウクライナ人の農夫はおほまかにメロンを食べさせた。その夜、吹降りの中を、農夫は國境を越えさせてくれた。時々つまづきながら、私達は闇の中を歩かねばならなかつた。

『さあ、肩車をなさい。』と案内人は云つた。——『これから先は河ですぜ。』

私はいやだつた。

『貴方はずぶ濡れになつたつて、向岸へ渡れつこありませんぜ。』と、彼は頑張る。

そこで私は肩車に乘つて旅行をつゞけなければならなかつたが、それでも靴に水が這入らずにはすまなかつた。

十五分ばかり經つと、私達は、ブロディ村のオーストリア管區のユダヤ人の小屋で體を乾かしてゐた。案内人が澤山金を絞り取るために、わざと私を深いところへ連れて行つたんだと、私は聽かされた。ところが、ウクライナ人の方では、歸りがけに私に馴れ馴れしげに、ユダヤ人に警戒しろ、ユダヤ人は相當な手數料の三倍を貪るんだからと云つた。そんなわけで、私の財布は、どし〳〵消えて行つた。停車場に行くまでにはまだ八キロメートルばかりあつた。本道路に出るまでの、國境沿ひの雨でだぶ〳〵になつた路の一、二キロは歩行が困難なばかりでなく、同時に危險でもあつた。老年のユダヤ人を馭者にして、私は二輪馬車に乘つてゐた。

『いつかは、わしもこの商賣で生命を失ひますよ。』

『なぜ?』

『だつて、兵隊が毎日のやうに呼出して、返事をしないと射ちますでな。あそこに灯りが見えるでせう。幸なことに、今晩はいゝ夜でしてな。』

『ほんとに、いゝ晩だ！』

一寸先も見えない秋の闇夜、ひつきりなしの雨が顔を打つ。泥水は馬の蹄の下でだぶついた。私達は丘を登つてゐた。車輪がぐりつゞけた。車輪がはまつて、輕い車は段々傾き、急にひつくりかへつた。十月の泥濘（ぬかるみ）は冷たく深かつた。私はべつたり落つこちて、半ば泥にはまつた。おまけに間の悪いことには眼鏡をなくしてしまつた。だが、一番恐しい事は、私達が倒れた直ぐあと、右手にあたつてしかも直ぐ近くに救ひを求める絶望の叫び――神祕的な祈り――おそろしい悲鳴が起つたことである。その暗い、雨の夜に、その神祕的な聲――非常に強い、しかも人間ばなれした聲が何處から出たのやら、到底判斷できるものではない。

『もし〳〵、あいつが私達を滅すのですよ。』――と、その老人は絶望の聲を出した。――『あいつが私達を滅すのですよ！』

『誰だね？』――私は息を殺して訊いた。

『畜生、牡鷄でさあ、わしのお主婦（かみ）が、土曜日の料理として法師様に持つて行けと云つて呉れた牡鷄ですよ。』

つんざくやうな悲鳴は、規則正しく間をおいて、つゞいた。

『奴が私達を滅しますぜ、哨所までは二百歩しかありません。兵隊が、すぐ馳けつけて來ますぞ。』

『奴を締めてしまへ。』と私は、腹立しくさゝやいた。

『何にを？　牡鷄ですかい？　どこにゐるか分つたもんですか？　きつと何んかの下敷になつてるに相違ありませんよ！』

私達二人は雨の降注ぐ中を、暗闇に腹這ひになつて、泥を手探りした。私達は牡鷄をそして私達の運命を呪つた。たうとう、老人は私の毛布の下から、その悲慘な被害者を救ひ出し、そのほつとした鷄は、直ぐと鳴きやめた。停車場で私は列車の來るまで三時間ほど身體を乾かし、汚れを拭つた。

金を兩替して見ると、私はアクセルロードのとこまで出頭せねばならないのだが、その目的地のチューリッヒまで行けるだけないかも知れないことを知つた。私はウインナまでの切符を買つて、そこまで行つてその先の都合をつけようと決めた。

ウインナで一番愕いたのは、學校で習つたドイツ語にも拘らず、さつぱり言葉が通じないことだつた。でも、たうとう、私は或赤い帽子をかぶつた老人に、自分は『勞働新聞（アルベイター・ツアイツング）』の事務所へ行きたいのだ、といふことを納得させることができた。私は、ロシア革命の利益が私のチューリッヒ出頭を要求してゐるといふことを、オウストリヤ社會民主々義の指導者ヴクトル・アドラー以外に打明けないことに決めてゐた。私たちは一時間ほど歩いた。すると、二年前にその新聞は移轉してゐたことが分つた。もう三十分間歩いた。受付けが、訪問時間は過ぎてゐると告げた。私は案内人に拂ふ金がなかつた。腹はへつてゐる、それに一番大切なことには、チューリッヒまで行かなけれ

ばならなかつた。あまり愛想よくない紳士が階段を降りて來た。私はアドラーのことを訊ねた。——

『今日は何曜日だか知つてるかね？』相手は私をきめつけた。

私は知らなかつた。馬車の中で、行商人の家で、ウクライナ人の納屋で、眞夜中の牡鷄騒ぎで、私は日數を忘れてしまつた。

『今日は日曜日だ』と、その老紳士は言ひ捨てゝ、私の横をすり抜けようとした。

『かまはない！〳〵私はアドラーに逢ひたい。』

すると、私の訊問者は、嵐の中で一大隊の兵隊に號令するやうな聲で答へた。——

『いゝかね、アドラー博士は日曜日には會へないのだ。』

『しかし、私は重大な用件があるのです。』と私は頑張つた。

『たとひ、君の用件がもう十倍も重大であらうとだよ——分るかい？』

それはフリツツ・アウステルリツツその人であり、ユーゴーにでも言はせれば、雷鳴のやうな話聲を持つた男であり、事務所の雷おやぢであつた。——

『たとひ君がニュースを持つて來たつてだね、——分るかね？——君んとこのツアーの××××××が君の國に勃發したとか、——分るかね？　たとひそんなニュースでも、君に博士の日曜日の安息をかき亂す權利はないんだ。』

彼の雷り聲は私に通じ出した。同時に奴はたわけたことを吐かすと私は考へた。日曜日の安息が××の必要以上にあがめられることは分らない。私はへこたれてはならないと決心した。チユーリ

ツヒに行かねばならない。イスクラの編輯者は私を待つてゐる。おまけにシベリヤから逃げて來たのである。——それもたしかに問題だ。たうとう、私は階段の眞下に立ちふさがつて、そのいかつい紳士の通路を遮ることによつて、望みを達した。アウステルリツツは宛名をくれた。同じ案内人に連れられて、私はアドラーの家に行つた。

ひどく背の屈んだ、殆どせむしに近い小男が、疲れた顏にむくんだ眼をして、會ひに出て來た。當時、ウインナには國會の選擧があつた。アドラーはその前日に五六ヶ所で演說やつて、夜通し記事や推薦の辭など書いたのであつた。私は、これらの事情を、十五分後にアドラーの息子の嫁から聞いた。

『あなたの日曜日の安息を亂すのをお許し下さい、博士。』

『それで、それで。』アドラーは外觀上はいかめしかつたが、その聲音には、私を愕かさなくて勵ますものがあつた。その人の瞬きの一つ一つから、智惠が放射してゐるやうな氣がした。

『私はロシア人です。』

『それは分つてゐる、さつきから、推測できるくらゐ見てゐるのだから。』

博士が私をすばしこい眼で觀察してゐる間に、私は事務所の入口の押問答を、話して聽かした。

『さうかね？　さう云つたかね？　一たい誰だらう？　背の高い男ね？　呶鳴る？　あゝ、そんなら、アウステルリツツだ。呶鳴る人だつて？　さう、さう、それはアウステルリツツだ。さうむきになることもないよ。ロシア革命の報道を持つて來るときには、眞夜中でもいゝから、わしのとこ

のベルを鳴らしたまへ。カーヤ、カーヤ、』――彼はだしぬけに呼んだ。彼の息子のロシア人の嫁が出て來た。

『さあ、もつと、ゆつくりくつろぐことにしよう。』――かう云つて彼は奥に這入つた。

旅行の途は保證された。

第十一章　初めての亡命者

一九〇二年の秋、私はパリーを經てロンドンに到着した。たしか七月の朝の引明けだつた。あらゆる手眞似で雇つた車によつて、私は紙片に書いた宛名のところへ運ばれて行つた。目的地はレーニンの家だつた。扉を三度ノックするやうにと、チューリッヒを立つ前に教へられてゐた。扉はナデーヂヤ・コンスタチノーヴナが開けてくれた。私のノックの音に眼をさましたものらしかつた。まだ夜の引明けで禮儀になれた人ならば、そんな變挺な時間に未知の人の扉を叩くことをせずに一時間か二時間停車場でおとなしく待つてゐたゞらう。ところが、私は、やはり、ヴェルホンレンスク以來の旅行で、私を驅立てた力のためにせつかちだつた。同じ野蠻なやり方でチューリッヒのアクセルロードを騷がせた。尤もそれは夜明けぢやなくて眞夜中だつたが、レーニンはまだ寢てをり、彼の顏のおだやかな表情には、至極尤もな驚きの色がほの見えた。私達の初對面はそんな工合だつ

た。ウラヂミール・イリッチもナデーヂヤ・コンスタンチノーヴナ*も、クレルの手紙で私のことを知つてをり、私を待ちまうけてゐた。

*レニンの本來の全姓名はウラヂミール・イリッチ・ウリヤノフであり、ニコライ・レーニンは彼の黨籍名であり、ペン・ネームである。革命以來、ウラヂミール・イリッチ・レーニン、又はもつと親密にたゞイリッチと呼ぶ習慣になつてしまつた。細君の處女名はナデエヂヤ・コンスタンチノーヴナ・クルプスカヤである。――英譯者

『ペロ(ペン)が來た！』――と、いふ言葉で私は迎へられた。直ちに私はロシアの印象の控へ目な品書(しなかき)をぶちまけた。――南部との聯絡はよくない。ハルコフのイスクラの匿名の宛名はまちがつてゐる。『南方勞働者』の編輯者たちは合同に反對してゐる。オウストリア國境の橫斷は大學豫科生の手に委ねられてゐるが、その學生はイスクラ派の人には便宜を拒絕してゐる。かうした事實は元來、あまり人に希望を與へる種のものではなかつたが、それに補ひをつけ、間に合はせて行くだけの確信はあつた。

その朝だつたか、翌朝だつたか、ウラヂミル・イリイッチと私はロンドンのまはりを隨分歩いた。ロンドン橋からレーニンは、ウエストミンスターやその他の名高い建物を指して示した。彼の言葉を一語々々私は覺えてはゐないが、『これが彼等の有名なウエストミンスターだ。』とはいつた。そして彼等のとは、勿論、英國人全般を指したのではなくして、その支配階級を意味したことは謂ふ

までもない。この合意は、少しもわざとらしくなく、全くその人の眞底から自然に出てくるものであつて、たゞ彼の聲の調子で表現されるものではあるが、レーニンが英國博物館の寶物なり、新發見品なり、又は書物の山について物語る時でも、或ひはヨーロッパの種々な新聞について話す時でも、更にドイツの砲術やフランスの航空術について談ずる場合でも、それは常に必ずそこに存在するところのものであつた。彼等はこれを知る、彼等はそれを持つ、彼等はかゝる事を仕遂げた、或ひは彼等はかうしたものを造つた——だが、彼等は何んたる敵であるか！　彼の眼には常に、支配階級の形の見えぬ影——彼のみには白日の如く明かなる影——が、全人類文化の上に覆ひかぶさつてゐることが分つてゐるのであつた。

ロンドンの建物は、當時、少しも私の興味を惹かなかつた。ヴエルホレンスクから直接に觀たことのない國外へと移された私としては、ウインナ、パリ、ロンドンを一眼に觀たやうな次第なので、ウエストミンスター宮の如き細かい景は、私には寧ろ餘計なものだつた。レーニンが私を長い散歩に連出したのは、之れがだめではなかつたのである。彼の目的は私を知らんが爲だつた。彼の私に對する試驗は、なか〳〵以つて徹底したものであつた。

私は彼に、シベリアでの討議、特には中央組織の問題について詳細に告げた。私の論文の事、二三週間私が滯在してゐたことのあるイルクーツクの古るい人民黨派との大討論、マハイスキーの論文の事等々についても物語つた。レーニンは他人の話を聽くのが巧みだつた。

『そこで、理論の問題では君等はどうだつたね？』

私は、グループとして吾々が彼の著書、『ロシアに於ける資本主義の發達』をモスコウの監獄にゐる間に研究したことを告げた。吾々は、原本を使用して、ベルンユタインとカウツキーとの論爭を研究したのだことも告げた。ベルンユタインを是とするものは一人もゐなかつた。哲學に於ては吾々は、マッハ及びアつた。ヴエナリウスの知識論をマルクシズムと結び合せたところの、ボグダーノフの書物によつて、非常に感化された。その當時レーニンも亦、ボグダーノフの說は正しいものと思つてゐた。少しく躊躇氣味でレーニンは云つた——『僕は哲學者ではないからな。だが、プレハーノフは、ボグダーノフの哲學は一種の皮を被つたアイデイヤリズムだと云つて非難してゐる。』それから二三年後にレーニンは、マッハ及びアヴエナリウスを論じた大きな本を書いたが、彼の批判はプレハーノフの說と基礎的に一致するものだつた。

談話のうちに私は、シベリアの流刑者間では、ロシアの資本主義に關するレーニンの著書中の統計的研究の廣汎なことに驚いてゐるものが多い、といふ事實を彼に告げた。

『何に、あれはね。』——彼は少しく面喰つた樣子で答へた——『一時にやり上げたものではなかつたのだ。』

彼が主なる經濟學的著述に非常なる努力を拂つてゐる點について、若い同志たちが多分に感謝してゐることを知つた時に、彼は大いに嬉しさうに見えた。それから、彼の將來の仕事については寧ろ單に一般的に議論されたに過ぎなかつた。私は暫く海外に留まること、そして種々研究を積み外

國の書物を澤山讀むこと等が話し合はされた。それから先は又折を見て相談することになつた。兎に角、暫くして後、私は祕かにロシアへ歸つて革命運動に參加することに定めた。

ナデーデヤ・コンスタンチノーヴナは五六丁離れた家へ私を連れて行つてくれた。そこには、ヴエーラ・ザスーリツチ、マルトーフ及び『イスクラ』の印刷部長をしてゐたブルーメンフエルドたちが住んでゐた。彼等は私に一つ部屋をつくつてくれた。イギリス流は、ロシアと異つて、部屋は縱に設けられる。一番下の部屋は家主が占領し、その上へ段々と下宿人が重なつて住むのである。その他に一つ共同の室があつて、其處で吾々は茶を一緒に飲み、煙草を喫ひながら、限りない談話に耽るのだつた。この部屋は、主としてザスーリツチのお蔭で、又時々はマルトーフの手も加はつて、實にだらしの無いこと夥しかつた。プレハーノフが最初にこの部屋に這入つた時に、『獸物の巢』だと評した。

これは、私の短かいロンドン滯在の話の始りである。私は先づ『イスクラ』の既刊の部分から研究を始め、同じ所から出版された『ザールヤ』の批評もやつて見た。これ等は、深奥なる學理と革命的熱情とを結び合せた美事な定期刊行物だつた。私は熱烈に『イスクラ』を愛するに至つた。そして私の今までの無智に恥ぢると共に、それに打勝つべく力のあらん限りを盡した。程なく私は『イスクラ』に書くやうになつた。最初はたゞ短いものであつたが、追々と政治論文を載せるやうになり、終には社說も書くに至つた。

その當時私は又、ホワイトチヤペルで講演したこともあつた。そこでは、亡命ロシア人の長老たるチヤイコウスキー及びこれも年寄りの一人である無政府主義者チエルケゾーフと私は太刀打をした。これ等の長老たちがマルクシズムを打破せんとする無限の努力に、私はその時實際に驚いた。私はその歸途、空中を歩くやうな氣がしてゐた。私がホワイトチヤペルに接したこと、その他ロンドンに於ける一般外界との私の接觸に於て私の仲介者となつてゐた者は、『イスクラ』の編輯部に密接の關係のあつた古い亡命ロシア人マルクス主義者のアレキセエフであつた。彼は英人生活の不可思議界へと、私を導き入れた。そして種々なる方面の知識を私に與へてくれたのである。レーニンに就ては、アレキセエフは非常な敬意を以て私に一度告げたことがある——『革命の爲には、プレハーノフよりレーニンの方が重要だ。』と。私は無論このことをレーニンには傳へなかつたが、マルトーフには話した。マルトーフは何んとも云はなかつた。

或日曜日に私は、レーニン及びクループスカヤに伴はれて、教會で催される社會民主黨の會合に出席して見た。そこでは讃美歌の間へ挾んで演說が行はれるのであつた。主な辯士は、オーストラリアから歸つたばかりだと云ふ作曲家であつた。彼は社會××の話をした。それが濟むと皆が立上つて、『神よ、最早××も××も御無用!』と歌ふのだつた。私は殆ど自分の眼と耳とを信ずることが出來なかつた。そこから外へ出た時にレーニンは云つた『イギリスのプロレタリアートの間には革命的或ひは社會主義的分子は決して尠くはないのだが、彼等は保守主義や、宗教や、僻見やで混亂させられてゐて、どうしても表面に浮び上つて、一致團結するまでに至らないのだ』と。

社會民主黨の說教を聽いてから吾々は、二間下宿の小さな臺所で中食した。私の友人はいつもの

通り、私が一人で家まで歸れるかどうかと揶揄ふのだつた。私には町筋がなか〳〵分らないのだつた。この私の缺陷を私自らクレチン病（山嶽地に見られる流行性白痴病）だといつてゐた。後には追々と私にも道は分るやうになつて來たが、然しそれまでには隨分苦しんだ。

私の餘り上手でない英語は、オデツサの監獄で獲得したものだつたが、ロンドン滯在中一向それは上達しなかつたのである。私は餘りにもロシアの事に追はれてゐた。英國のマルキシズムは面白くなかつた。社會民主々義の知識的中心は當時ドイツに在つた。そして吾々は非常な興味を以て、『正統派』マルクシストと『修正派』の者たちとの論爭を見物してゐたのである。

ロンドンでは、又後にはゼネバでも、私はレーニンよりはマルトーフ及びザスリツチと屢々面接したのであつた。ロンドンでは、吾々は同一の家に住んでゐたし、ゼネバでは同一の食堂で飯を食つた關係から、マルトーフ及びザスーリツチとは日に數回顏を合せた。然るにレーニンは家庭生活の人であつたが故に、公然と會合する場合の外は餘り會ふことはなかつたのである。マルトーフにとつては非常に重要性を持つてゐたボヘミヤ式生活習慣は、レーニンには全然缺けてゐた。時間なるものは、如何にそれが比較的小さなものであつても、最も貴い寄與であることを、彼は知つてゐた。彼の時間は、多く英國博物館内で費された。其處では彼は理論的研究を重ねてゐたばかりでなく、彼の新聞論文も多くそこで書かれたのである。彼の援助によつて、私も亦其處へ出入が出來るやうになつた。私は餓ゑたる者の如くに、多くの書物を漁つた。だが、程なく私は大陸に向つて旅立たなければならなくなつた。

ホワイトチャペルに於ける私の『試驗』的講演の後、ブラッセル、リエージュ、パリへと私は出張講演を命ぜられた。私の講演は、所謂『ロシアの主觀學派』の批判を駁して、唯物史觀を擁護するにあつた。レーニンは私の課題に對して非常な興味を有つた。私は自分の講演の筋書を彼に示したところが、彼はそれを修正して『ザルーヤ』紙に發表するやうに私に奬めた。だが、私はプレハーノフやその他の歴々と肩を竝べて、純理論の方面で表面に現れる勇氣を持たなかつた。

パリにゐる間に、私は電報でロンドンへ喚戻された。彼等は私を再びロシアへ潛入させようと計畫してゐたのである。ロシアからの報道によると、全般的檢擧が行はれた結果、我黨の人員不足となつたのである。だが、私がロンドンに着く頃には、彼等の計畫は變つてゐた。當時私を非常に親切に取扱つてくれたドイチエが後に私に告げたことであるが、彼れは斷乎として私の爲に、『青年』（彼はいつもから私を呼んでゐた）は是非とも教育を完成する爲に今暫く海外に留らなければならないと主張した、そしてレーニンも亦彼の說に贊同したのである。『イスクラ』のロシア内の組織で活動することは大いに結構であつたが、それにしても私は今暫く海外に留りうることを喜んだのである。

私は再びパリに戻つた。其處では、ロンドンと相違して、ロシアの學生團がかなり大きかつた。革命的黨派は、この學生團を獲得しようとして、猛烈に競爭してゐたのである。エヌ・アイ・セドーヴアの當時の回顧錄からの一片は、左の如くいつてゐる。

『一九〇二年の秋は、パリのロシア人の間に講演が屢々された。私の屬してゐる「イスクラ」團か

らは最初にマルトーフ、次ぎにレーニンが現れた。「經濟學派」及び社會革命黨に對して、戰爭が始められてゐたのである。吾々の間では、シベリアから脱出して來た一人の若い同志のことが、話題に上つてゐた。嘗ては「人民の意志」派に屬してゐたが、今は「イスクラ」派のイー・エム・アレキサンドロヴアの家へ、この青年は尋ねて來た。吾々若い者たちはエカテリナ・ミハイロヴナ（アレキサンドロヴナ）を皆愛してゐた、そして彼女の話を聽くのを樂しみにしてゐた。若い「イスクラ」の記者がパリに現れた時に、エカテリーナ・ミハイロヴナは近所に部屋を探すべく私に命じた。恰度一つの空室が、私の住んでゐる家に在つた。間代は僅かに月十二フランであつたが、室は小さくて、暗くて、監房のやうだつた。私が室の説明をすると、エカテリナ・ミハイロヴナは中途でそれを押止めて、『もう判つたよ、其處へあの男を入れておやりなさい』と云つた。

若い同志（彼の名は知らせてなかつた）がその部屋に落ちついてから、エカテリナ・ミハイロヴナは私に問うた——『あの男は講義の用意をしてゐますかね？』と。

『さあ、どうですかしら？』——私は答へた——『昨晩私が二階へ登つて行くと、部屋の内で口笛を吹いてゐましたよ。』

『口笛など吹いてゐないで、せつせと講義の用意をしろと云つておやんなさい』——彼女は『彼』が成功するであらう事に非常に氣を勞してゐたことが明かだつた。だが、その心配はなかつたのだ。講演は大成功であつて、『イスクラ』のこの若い學徒は、豫想以上であつたが故に、亡命團は大喜びであつた。

ロンドンよりもパリの方が遙かに私には興味があつた。これは、エヌ・アイ・セドーヴアの感化ではあつた。私は田園に生れて田園に育つた者だが、眞に自然に接近したのはパリに於てゞあつた。又そこでは私は、眞の美術とも近づきになつたのである。私は、自然もさうであるが、繪畫を翫味するに至るまでには、非常に困難した。セドーヴアの記述の後の方にかう書いてある——『彼は、パリの一般的印象については、「オデッサに似てゐるが、オデッサよりはましだ」と云つた。この馬鹿氣た結論は、エル・デーが全く政治問題に沒頭してしまつてゐるが故に、他の凡ては、それが彼の上に無理やりに押付けられた時に始めて、彼の意識に入るに過ぎない事實によつて説明される。彼は、かゝる何ものかに對しては、一つの不可避的の邪魔ものとして應對してゐた。彼のパリ觀に對して私は同意することが出來なかつた。そして私は少しく彼を揶揄つてやつた。』

正にその通りであつた。私は、世界の中心の空氣の内へ、一つの强情な反抗的態度を持して這入つて來たのである。最初私は、パリを『否定』し、寧ろそれを無視せんと努めた。正確に論ずれば、それは野蠻人が自己保存に努める鬪爭の一つの場合であつた。だがパリに接觸して、それを十分に理解する爲には、澤山の思考的エネルギーを消費しなければならないことに、私は感づいた。然るに私には、革命の世界が在るので、これはなかなか〳〵他の競爭的興味の存在を許すが如き、生やさしいものではなかつた。私は澁々ながら、そして徐々に、美術へと近づいて行つた。私は、ルーヴルや、ルクセンブルグや展覽會に出向いたが、それらは私には餘りにも豐滿であり、自己滿足的であつたし、プユービー・ド・シャヴアンヌは餘りにも禁慾的であり、色あせてゐたし、カリエールの

肖像畫はその夕暮時のやうな朦朧氣分が、私の氣に喰はなかつた。彫刻に於ても、建築に於ても、同樣なことが云へた。事實に於て、私がそれより前には革命に反抗し、又暫くはマルキシズムに、そして又數年間レーニンの方法に反抗したことのあるやうに、美術にも反抗したのである。一九〇五年の革命は、ヨーロッパ及びその文化と私との接觸の過程を打切らしめた。私が美術について見たり、讀んだり、又少しは書いたりしたのは、第二回目の私の亡命の時だつた。だが、私は單なる素人道樂以上に進んだことは無いのである。

パリで私はジョレスの演說を聽いた。それは恰度ワルデック・ルソーが首相の席を占めて、ミルランが遞信大臣であつた時である。私はゲード派の街上示威運動に參加して、他の人たちと一緒に、ミルランの惡口を熱心に呶鳴つてゐた。ジョレスはその時は一向に私に印象を與へなかつた。彼が敵であることを私は餘りにも强く感じてゐた譯である。彼の雄大なる態度を私が理解するに至つたのは、それから數年後である。尤も、ジョレス主義に對する私の敵意は一向に衰へるものではなかつた。

學生仲間のマルクス派に乞はれて、レーニンは、ロシアの大學から追はれて來てゐた教授等によつてパリに於て組織されてゐた高等學校で、農村問題に關する三回の講演をすることになつた。自由主義の教授たちは、レーニンに對して、論爭を出來うる限り遠慮するやうにと要求した。レーニンはそれには何等の言質を與へずして、講義の最初に於て、マルキシズムは革命的理論であるから、本質的にそれは理論鬪爭の形を採ると公言した。私の記憶するところでは、ウラヂミル・イリイッ

チは、講義を始めるまでは、頗る興奮してゐた樣子だつたが、壇に登ると同時に全く冷靜に歸した——尠なくとも表面さう觀られた。彼を聽きに來た教授のガムバローフは、後でドイチエに彼の印象を告げて、『完全なる教授』だと評した。彼としてはこれによつて最高の讃辭をレーニンに捧げた譯である。

一度吾々はレーニンをオペラに伴れて行かうと相談を定めた。その全準備がセドーヴアに委任された。レーニンは、彼の講演に持つて行く小さな鞄を提げて、オペラ喜劇館へも行くのだつた。吾々は一團となつて三等席に坐つた。レーニンの兩隣は私とセドーヴアだつた。マルートフも來てゐたと記憶する。このオペラ見物については、全く非音樂的な記憶が私に着きまとうてゐる。レーニンはパリへ來て靴を一足買つたが、それは少しく彼の足に合はなかつたらしかつた。恰度、その時私にも靴の新調が必要となつてゐた。レーニンは彼の新しい靴を私に呉れた。最初それが私の足に申し分なく合ふ如くであつたので、私は大いに喜んでゐた。オペラに行く道には差支なかつたが、見物してゐる間に、少しく足が痛み出して來た。歸途には、とても痛くて堪へられなかつた。ところがレーニンは、途々殘酷にも私に揶揄ひ通すのであつた。彼は、同じ苦痛を同じこの靴から數時間受けた經驗を以てして、私をいさめるのであつたから殘忍極まる。

パリを去つて私は、ブラッセル、リエージ、スキス及び或るドイツの町々にあるロシア學生の群に講演旅行をして歩いた。ハイデルベルヒでは私は、老のクノー・フキッシャーを聽いたが、彼のカント學は私に感興を催さしめなかつた。ノルマチ規範的哲學は私とは全然關係のないものであつ

た。すぐ側に軟かい甘い青草が生えてゐるのに、乾燥した藁を選んで食ふ動物はありはしない。ハイデルベルヒは、ロシア學徒の間には、哲學的理想主義の中心であるとされてゐた。彼等一派の一人にアヴクセンチエウがゐた。彼は將來ケレンスキー政府の內務大臣となつた。私は其處で、辨證法的唯物論の擁護に餘りに急にして、一本ならず槍をへし折つたのであつた。

第十二章　黨大會と分裂

レーニンが三十歲で海外へ出た時には、彼は既に熟達してゐた。ロシアでも、又學生團や、社會民主黨員の間でも、或ひは亡命者仲間のうちでも、彼は常に第一位を占めた。彼と接觸し、又は彼と共に働いた人たちが、明らかに示したところによつても、自からの力を彼は認めないわけにはゆかなかつたであらう。彼がロシアを去つた時には、彼は既に理論的に十分に武裝されて、革命的經驗に於ても豐富であつた。海外では、彼の共働者が待つてゐた。『勞働者解放團』、特にその中心人物たるプレハーノフが彼を待つてゐた。プレハーノフは、歐羅巴を通じての聰明なるマルクス主義解說者であると共に、長い間の敎師であり、理論家であり、政治家であり、記者であり、而して雄辯家であつた。プレハーノフと肩を竝べて二人の知名の著者がゐた、卽ちザスーリッチとアクセリロッドであつた。ヴエーラ・ザスーリッチを有名ならしめたものは、單に、彼女の勇敢なる過去の

みではなくして、非常に鋭敏なる頭腦と、廣汎なる敎育、主として歷史的知識と、稀に見られる思考力とを彼女は具備してゐたからである。當時吾々の『グループ』がエンゲルスと連絡を保つに至つたのは、ザスーリッチを通じてゞあつた。

寧ろラテン系の社會主義に接近してゐたプレハーノフ及びザスーリッチとは別に、アクセリロッドはドイツ社會民主々義の思想と經驗とを代表する『グループ』の中心人物であつた。然しながら當時プレハーノフは既に降り坂だつた。彼の勢力は、レーニンに勢力を與へたところのもの——革命の到來——それ自らの故に衰へ始めたのである。プレハーノフの活動の凡ては、準備の理論時代のものであつた。彼はマルクス主義の宣傳家であり論客ではあつたが、プロレタリアートの革命的政治家ではなかつた。革命が近づけば近づくほど、プレハーノフの地盤は、怪しくなつて行つたことは明かである。彼自らそれを認めない譯にはゆかなかつた。それが故にこそ彼は、後輩に對して段々と短氣になつて行つたのである。

『イスクラ』の政治的首領はレーニンであつた。マルトーフは文筆上の勢力だつた。彼は、口で語るが如くに易く而して絕えず書いてゐた。レーニンと最も親しく共働してゐたマルトーフは、當時既に自ら不安を感じ始めてゐた。彼等は依然『おまへ、おれ』で親しく呼合つてはゐたが、或程度の冷やかさが、彼等間に這入り込んで來てゐた。マルトーフは寧ろ現在の事情、現在の文筆的仕事、現在の政治問題、現在の新聞記事や談話の上に住む傾向であつた。レーニンはそれに反して、勿論現實の上に確乎として足を踏まへながらも、將來を見透すことに絕えず努力を惜しまなかつた。マ

ルトーフは數限りない、そして屢々首肯するに足る豫想、假說、提議を持ち出して止まないのであつたが、レーニンはそれ等が必要である時までは提議しないのであつた。マルトーフの考へ方の廻りくどい巧妙さは、屢々、レーニンをして警戒の必要を感ぜしめるものであつた。政治的分派傾向は未だ形成されるには到らなかつた、否、未だそれは感じられてもゐなかつた。『イスクラ』の群が二派に分れて、『軟派』と『硬派』とが出來たのは、その後、黨の第二大會に於てゞあつた。『硬派』とか軟派とかいふ名は、最初は流行的に取扱はれた。其處には何等判然たる境界線は認められてゐなかつたが、結局、見解の相違と、目的遂行の上に於ける決意の如何の上に於て分れたのである。

上述大會に於ける分裂以前に於て既に、レーユンは『硬派』で、マルトーフは『軟派』である傾向は認められてゐた。彼等自からも亦それを知つてゐた。レーニンは、彼が尊敬して來たところのマルトーフを、稍々疑ふが如き批判的眼光を以て一瞥するのであつた。マルトーフはレーニンの一瞥を感ずると、彼の薄い肩を神經的に動かして、レーニンを見下すのであつた。彼等兩人が會談する場合には、尠くとも私が居合せた時では、友愛的の冗談のやりとりが缺けてゐた。マルトーフと話する時、レーニンは對手の顏を見なかつた。マルトーフの眼は亦、彼のいつも曇つてゐる鼻眼鏡の後に、空虛な光を見せてゐた。レーニンがマルトーフに關して私に物語つた時には、彼の聲に一種の强調があつた。『誰れがさう云つた？　ジュリアス？』――このジュリアス（マルトーフ）の發音に特殊の强調があつた。その含意は、『善い人間だ、それに就ては問題がない、たゞ餘りに軟か

い。』と警告するものの如くであつた。それと同時にマルトーフに於ても亦、ヴエーラ・イヴアノウナア・ザスーリツチの感化の下に、政治的よりは寧ろ心理的關係に於て、益々レーニンから遠ざかり行く傾向が窺はれた。

レーニンは、ロシアとの連絡を全部自分の手に集中した。編輯部の書記は、彼の妻たるナデジダ・コンスタンチノヴナ・クループスカヤであつた。彼女は凡ゆる組織運動の中心に立つてゐた。彼女は同志が來れば、先づ第一にその者と面接し、彼等が去る時には彼等に指令を授け、連絡の役目を引受け、祕密のアドレスを保存し、手紙を書き、暗號通信の一切を自から片づけてゐた。彼女の室内ではいつも、あぶり出しの暗號書面を焦がす香が絶えなかつた。彼女は時々、彼女の落ちついた、而かも執拗な特殊的態度で小言をいつてゐた。それは、同志が手紙を十分に書かないこと、彼等の暗號の書方が粗末で讀むに非常に困難なこと、よく暗號を彼等が間違へてゐること等についてゞあつた。

レーニンは、政治的組織の日常鬪爭に於て、黨員の老人組、特には、黨綱領の作成に於て、激しい鬪爭を重ねなければならなかつたプレハーノフの如きから、出來うる限り獨立することに努めてゐた。プレハーノフの綱領草案に對する修正意見として作られたレーニンの草案は、ゲオルグ・ヴアレンチノヴイツチ（プレハーノフ）が論爭する場合に、殊更ら目立つ皮肉な優越的態度を以て取扱はれて、甚しく受けが惡るかつたのである。だが、レーニンはかゝる取扱ひによつて凹まされるやうな者ではなかつた。鬪爭は頗るドラマチツクになつた。ザスーリツチとマルトーフとが仲に這

入つて、前者はプレハーノフ、後者はレーニンの肩を有つた。然し仲介者兩人は相互に非常に仲が好いのであつた。ヴェーラ・イヴァノーヴァ自身の話によると、彼女は一度レーニンに云つたことがある。――『ジョージ（プレハーノフ）は獵犬だ。暫くの間は獲物をくはへて振廻はすが、すぐとそれを下に置く。ところが君はブルドックだ。喰付いたら死ぬまで放しはしない。』彼女が後にこの話を私に語つた時には、彼女は更らに附加へて言つた。『かう云つたら、レーニンは面白さうな顏をした。「死ぬまで放さない。」を彼は自ら繰返して、嬉しさうな顏をした。』と、彼女はさう語りながら、無邪氣にレーニンの發音の眞似をして私に見せた。（レーニンは『R』の音を明瞭に發音出來ないのであつた）。

以上の不一致は、私がロシアから來る前の事であつた。私はそんな事を豫想だもしてゐなかつた。又私が來たことによつて、『イスクラ』の編輯部に問題が增へたことも知らなかつた。私が來て四ケ月後に、レーニンはプレハーノフに手紙を書いた。――

『一九〇三年三月二日　巴里にて。

私は編輯部員全部に提議するが、諸君と同資格の下に「ペロ」を編輯部に入れて欲しい。これは單に諸君の多數によつてゞなく、全員一致を以てやつて欲しい。吾々は編輯部員七名をどうしても必要とする。六名では偶數であつて、採決に不都合である。のみならず、吾々の力を增加せねばならぬ。「ペロ」は過去數ケ月既に毎號に書いてゐたし、「イスクラ」のために一般に力を盡してゐる。彼の講演も亦非常に成功である。時事問題を取扱ふ上に彼は非常に有用であると云ふよりは寧ろ絕

對に必要である。彼が稀な才能を持ち、決心と活動力とを持つてゐることに疑ひないばかりでなく、より以上遙かに進步するであらうことも明らかである。更に飜譯と通俗文學との方面に於ても、隨分彼の成しうるものが在る。起りうる反對としては、（一）彼の若年、（二）近かいうちに彼がロシアに歸還するであらう事情、（三）彼のペンが寧ろ文藝欄式であつて、餘りに滑らかに過ぎること等。

『（一）に關しては、「ペロ」は何等獨立の任務を課せられずに、たゞ編輯部員として置かれゝばよからう。其處で彼は經驗を積みうる。彼は明かに黨人たる「本能」を持つてゐる。而して、知識と經驗とは時間の問題である。編輯部に彼を入れることは、彼を統制すると共に彼を勵ます上に必要であらう。

『（二）に關しては、若しも「ペロ」が吾々の仕事に密接に關係することになれば、結局、さう早くはロシアへ行かれまい。彼がロシアへ行くにしても、吾々の編輯部との組織的連絡は、その統制の下に彼を働らかせることになつて、マイナスではなく、大きなプラスとなる譯である。

『（三）に關しては、文體の缺陷は大した問題ではあるまい。彼はそれから脫化するであらう。現在彼は、訂正を無言で甘受してゐる（尤もいや〳〵らしいが）。編輯部に這入れば、討論、投票及び「指令」が決定的にして義務的の力を彼に及ぼすであらう。

『要するに、私の提案は、（一）「ペロ」を編入すべく編輯部全員の可決を得ること、（二）彼が編入された上で、編輯部員間の諸關係を決定して、投票の法則及び確定的な綱領の草案作成に取りかゝる事である。これは、大會の爲ばかりでなく、吾々自身にも絕對に必要なことである。

『二伸――「ペロ」の編人を遲延せしめることは、非常に工合が悪いと共に、氣まづいことになりはしないかと私は心配する。なぜならば私の觀るところでは、無論公然ではないが、彼は多分に不快に感じてゐるらしい。それは、宙ぶらりんにされてゐる事、そして未だに一「青年」として取扱はれてゐることである。このまゝに若しも彼が一月後にでもロシアへ行くならば、彼は必定、吾々に於て彼を編輯部に入れる意志なきものと認定して、吾々から遠ざかり去るであらう。それは甚だ不都合なことである。』

私はこの手紙を極く最近に發見したのであるが、それを玆に殆ど全部轉載した理由は、それがその當時の編輯部の事情を最もよく明かにするものであり、又レーニンが私に對する態度をも明示するところのものだからである。既に述べた通り、私が編輯部に入るや否やについて、樂屋で爭ひのあつたことは、私は全々知らなかつたのである。私が『多分に不快に感じてゐる』といふレーニンの觀察は誤まつてゐた。その當時の私の氣分は決してさうではなかつた。實際に、私にはさうした考へは全然起らなかつたのである。私の編輯部に對する態度は、生徒が先生に對する如きものであつた。私は僅かに廿二歳であつた。編輯部員中最も若いのがマルトーフで、彼は私より七歳上であつた。レーニンは私より十年上であつた。私は、この稀な人々の集團にかくまで近づき得たことを喜ぶ以外に、何にも考へてゐなかつたのである。私は彼等の一人々々から學ぶべき多くを持つてゐたし、又それを努めてやつてゐたのである。

レーニンが何故に私が不快に感じてゐるなどゝ云ひ出したか？　私の考へでは、それは單なる戰

術であつたと察せられる。手紙の全體からして彼は、彼が欲するところのものを立證し、確認せしめ、そしてそれを獲得するに努めてゐたことが明らかである。レーニンは、私の不快云々と『イスクラ』からの分離とを以て、他の編輯部員を嚇してゐたのだ。尤も、彼は單にこれを一つの附隨的證據として用ひてゐたに過ぎない。私の『青年』云々に關しても同樣である。これは、老年のドイツチエが屢々私の上に用ひた呼稱だつたが、他の人々は決してそれを用ひはしなかつた。ドイツチエは私に對して、何等政治的感化力を持つたものではなくして、單純な友愛觀念を以て結ばれてゐたに過ぎない。レーニンは單に私を以て政治的に成人した者として取扱ふことの必要を他の同志たちに印象づけるべく、かゝる論法に出たものと思はれる。

レーニンの書信から十日後に、マルトーフはアクセリロッドに手紙を送つた――

『一九〇三年三月十日、ロンドンにて。

『ヴラヂミル・イリイッチは、君も知る「ペロ」を編輯部へ完全の資格を與へて入れろと提唱して來た。彼の文筆は疑ひもなく天才的である。思想に於ても彼は全く「吾々のもの」である。彼は亦「イスクラ」のために盡し、そして彼の稀れな雄辯を以て大いに宣傳力を發揮してゐる。彼は驚くべき雄辯である。この點については、ウラヂミル・イリイッチも私も全く感心してゐる。彼は又知識もあるし、それを發達させようと努力してゐる。私は、ウラヂミル・イリイッチの提案に全く一致する。』

この書中に於てマルトーフは、單にレーニンの聲を反響きせてゐるに過ぎない。だが、彼は私の

不快云々を繰返してゐない。私は同じ家に彼と隣り合つて住んでゐた。彼はそれ故に、私が編輯部に入込みたいと思つて氣を苛立てゝゐたなどゝ信ずるには、餘りによく私を知つてゐたわけである。

何故にレーニンはかくまでも私が編輯部に入ることを欲したか？　彼は其處で確定的多數を握りたかつたのである。幾多の重要な問題の上に、編輯部は同數の二派に分れてゐた。老人組（プレハーノフ、ザスーリッチ、アクセリロッド）と青年組（レーニン、マルトーフ、ポトレソーフ）であつた。レーニンは、重大な問題に於ては、私が必ず彼に組するであらうことを知つてゐた。或時、プレハーノフとの論爭の場合に、レーニンは私に耳打ちして、何氣なしに言つた――『マルトーフに喋らせておかう。君ではヤッつけ過ぎる。マルトーフならうまく纏めるよ。』私が驚いた顏をすると、レーニンはすぐと云ひたした。『無論僕はやり込めてしまひたいのだがね、この場合、プレハーノフだから、事を圓滿にしておいた方が好からうぜ。』

私を編輯部に入れるレーニンの提唱は、プレハーノフの反對で破れた。それのみならず、プレハーノフはレーニンが多數を握らんとする計畫を見拔いたらしく、その後私に對する態度きへが非常に險惡になつて來た。編輯部を再組織する問題は、大會まで延ばされることになつた。編輯部はしかし、大會を待たずして、發言權だけを與へて私を編輯會議に列席せしめることにした。プレハーノフはこれにさへも斷乎として反對した。だが、ヴエーラ・イヴアノーヴナはプレハーノフに云つた――『君が何んと云はうと、私は彼を入れる』と。そしてその通り、次の會議の時、彼女は私を引張つて行つたのである。私は樂屋の事を一切知らなかつたが故に、ゲオルグ・ヴアレンチノヴイ

ッチが態とらしい冷やかな態度――かうした事については彼は實に名人なのである――を以て私の握手を迎へたのに私は面喰つたのである。私に對するプレハーノフの嫌惡は永らく續いた。否、寧ろそれは終に消滅することがなかつた。一九〇四年四月に、マルトーフがアイセリロッドに送つた手紙のうちに、『彼（プレハーノフ）の某（私）に對する個人的反感――彼にとつて恥ずべきことであり、且つ馬鹿々々しい嫌惡』が云々されてゐる。

レーニンの書面中に現はれてゐる當時の私の文體に對する批評には興味がある。私の文章が虛飾的に陷る傾向、竝に私が訂正を快としなかつた傾向、ともにそれは正しい批難である。私が論文を書きはじめてから僅かにその時は二年ほどであつたし、そして文章の樣式の問題は私にとつて一つの重要な獨立的問題であつた。私は僅かに言語の意味を翫味しはじめたばかりだつた。齒が生える頃の赤兒が頻りと齒ぐきを氣にするやうに、文學的乳齒期に於ける私が、やたらに文章の形式や、修辭やらに拘泥したことは當然だつた。時のみが私のスタイルを淨化し得たであらう。又文體に對する鬪爭は、偶然的でもなければ外面的のものでもなくして、私の知識的過程の反映であつたのだから、編輯員に對する敬意の如何に拘らず、私は本能的に私の文筆者としての未熟の個性をば、質を異にするところの他の成熟した人々の個性の侵入から護らうと努めたことは、自然である。

その間に、大會の豫定日は迫りつゝあつた。編輯部は結局、生活費の安い、そしてロシアとの連絡に一層便利なスキスのゼネバに移されることになつた。レーニンは心ならずも之れに贊成した。セドーヴアは書いてゐる――『ゼネバでは私等は小さな二つの天井裏の部屋に入れられた、エル・デ

ー（トロツキー）は大會準備に夢中になつてゐた。私は黨の仕事のためロシアへ歸る仕度に忙がしかつた。』大會代表の先發隊が到着した。そして會合は絶え間なく催された。この準備行動に於ける指導は斷然レーニンのものであつた。尤も、その事實は必ずしも表面に現はれてはゐなかつた。或代表は疑念や迷想を抱きつゝやつて來た。準備は多分に時間を要した。綱領提案に對する討議に多くの時間が費された。組織計畫の重要なる點の一つは、中央機關紙『イスクラ』とロシア内に在る中央委員會との間に設定さるべき關係であつた。私が海外に來たときには、編輯部は中央委員會に從屬すべきものであるとの信念を有つてゐた。それは『イスクラ』派の多數の態度でもあつた。

『それは駄目だ。』――レーニンは反對した――『力の關係が違ふ。どうして彼等がロシアから吾々を指導することが出來る？　駄目だ。吾々こそが確乎たる中心であり、思想に於ても强力であり、而してそれが故に、此處から吾々が指導しなければならないのだ。』

『それでは、編輯部が完全な獨裁を行ふことになるわけですね？』――私は反問した。

『それがどうして悪い？』――レーニンは逆襲した――『現狀の下に於ては、それより他に、途はない。』

レーニンの組織計畫は、多少の疑念を私の心の裡に抱かしめたが、この問題の爲に大會が破裂するであらうとは、夢にも私は思つてゐなかつた。

私は、流刑中密接の關係にあつたシベリヤ組合の代表とされた。スパイを避ける爲に、私はツーラの代表であつたドクトル・ウリアノーフ（レーニンの弟）と共に、ゼネバでなく、その次のニオ

ンといふ小さな停車場から出發したが、其處には急行列車は僅かに三十秒停車するに過ぎなかつた。眞にロシアの田舍漢らしく私等兩人は、間違つた側のプラットホームで汽車を待つてゐた。汽車が向ひ側の線路へ來るのを見るや、私等はかまはず線路を横切つて走つた。ところが私等が正しいプラットホームに達しない前に汽車は動き始めた。驛長は線路を横切る私等を認めて笛を鳴らした。そこで汽は再び止まつて、私等は乘車することが出來た。汽車へ乘ると、車掌が云ふには、こんな馬鹿な人間は未だ嘗て彼は見たことがないと云ふのであつた。そして不法に汽車を止めさせた罪によつて五十フランの罰金に處すると云ふのであつた。私等はそれに逆襲して、フランス語が讀めないから仕方がないと云つた。これは正確には事實でなかつた、然し私等の役には立つた。尚ほ三分間ほどその肥大な車掌は呶鳴り續けてゐたが、終にそのまゝで事はすんだ。事をそのまゝで濟ませたことは彼として賢明だつた。なぜなら私等は、どちらにしても五十フランを持合せてゐなかつたからである。それから後、切符を檢査に來た時再び車掌は、列車中の者に大聲で私等の愚を罵り告げて痛快がつてゐた。だが、勿論、この哀れた男は、私等が黨を作るべく旅行してゐるのだといふ事を知らなかつたのだから止むを得ない。

黨大會は、ブリユッセルのメイソン・デ・ピューブルに在る勞働者の消費組合本部で開かれた。吾々の爲に與へられた室は倉庫で、外部からは隱れてゐて都合が好かつたが、羊毛の梱が積込んであつた爲、怖ろしく多の蚤がゐた。吾々は冗談に蚤のことを、ブルヂョア社會を攻擊する爲に動員された『アンセル軍』だと稱してゐた。（英譯者註＝アンセルはベルジューム社會黨の一首領であ

つて、特に消費組合運動に努力した。）會合は肉體的に實際苦痛であつた。加ふるに、代表の到着した最初の日から、スパイの尾行で吾々はひどく惱まされたのである。

私は、全々未知の一ブルガリア人、サモコヴリエフなる者の名義の旅券を使用してゐた。來てから二週間目の或晩、私はザスーリッチと同伴で『金雞』といふ食堂で飯を食つて出て來た。すると、オデッサの一代表Zが、私等の前を側目もふらずに通り過ぎながら小聲で云つた——『後ろに犬がゐるぞ。別れろ、ヤツは男の方を尾ける。』Zはスパイに關しては專門的知識があつて、恰も天文家が星を觀るやうな眼力を持つてゐた。彼は『金雞』の近くに宿をとつてゐて、室の窓を彼の天文臺に使用してゐたのである。

私はザスリーチに左樣ならといつて、眞直に歩き始めた。私のポッケット内には、ブルガリア人の旅券と五フランの金が入つてゐた。鴨の嘴のやうな鼻をして瘠せたフレミッシュ人らしい犬は、果して私に尾行して來た。時間は既に眞夜中であつた。そして街路には、殆ど人ッ子一人見當らなかつた。私は不意に振返つて後戻りした。

『君！　この通は何んといふ町かね？』

フレミッシュは恐怖を感じたらしく、彼も後づさりして壁に倚つた。

『私は知りません。』——彼は正にピストルを突きつけられると思つたらしかつた。私はそのまゝ又大通を眞直に歩き始めた。時計は一時を打つた。最初の横町に來るや、私はそれを曲つて急に走り出した。スパイも走つてついて來た。私達不思議な人間が二人、眞夜中に、ブラッセルの街上で競

走を始めたのである。私は今でも自分の靴の音が耳に聽える。私は、この町の一角を一廻りして、又もとの大通に出た。後ろには、依然、スパイが從いて來てゐた。兩人とも疲勞して來たと共に、確かに腹を立てゝも來てゐた。それから私達は走らずに歩き始めた。客待車の溜を通過したが、車を雇ふことは無用であつた。なぜならば、私が乘れば、すぐとスパイも他の一臺に乘るであらうから。そこで、私は歩き續けた。長い大通りは終に盡きた。私等は市外に出て來てゐたのである。私は夜店酒場の前に、たつた一臺の馬車が置かれてゐるのを見つけるや、素早くそれに乘込んだ。

『急いでくれ、大急ぎ！』

『どちらへお出です？』

尾行は車に寄添うて來て、一心に耳を傾けてゐた。私は私の下宿の近くの公園の名を云つた。

『百スー頂戴致します。』

『いゝから車を出せよ！』

馭者は一鞭を加へた。スパイは酒場の中へ驅込んで、一人の巡査を引つぱつて出て來たが、遠く消へゆく彼の敵に指さすまでだつた。

三十分後に、私は自分の部屋に這入つてゐた。蠟燭に火を點ずるや否や私は、私のブルガリヤ人名宛の手紙がテーブルの上に置かれてあるのを發見した。私に此處宛に手紙を出してくる者は無い筈だつた。それは、翌朝十時に、旅券持參警察へ出頭しろといふ『サモコヴリエフ殿』への召喚狀であつた。して見ると、他に更に一人のスパイが私を尾行して前日中に居所をツキとめてゐたに相

違なかつた。そしてその夜の驅けつこは、双方にとつて何等用をなさないものであつたのだ。同様な召喚狀が他の代表にも同夜のうちに發送せられてゐた。警察へ出頭した者は、二十四時間内にペルジュームを退去せよとの命令に接した。私は警察へ出頭せずに、そのまゝ、大會が移動されることになつたロンドンへ旅立つてしまつた。

ベルリン駐在のロシア密偵局主任、ハーテングなる男の警務局への報告によると、『ブラッセル警察は多數の外國人の入來に驚いた。そして十名ほどを×××××××××××として數へた』とあつた。事實は、ブラッセル警察はハーテング彼自からによつて驚かされたのであつた。彼の本名はヘッケルマンで、一度は佛國の裁判所に於て爆彈事件煽動者として懲役に處せられたのであつたが、その後ロシア政府の祕密探偵局の一主要人物となり、又他の僞名でフランスから勳章を受けたこともある。このハーテングは、他の一人の使嗾（エクジェント・プロボケーター）間諜から吾々の大會の材料を得たのであつたが、それは當時ベルリンに在つて、大會の準備に好活動したドクトル・ジトミルスキーであつた。これ等の事實は數年後に於て表面に顯はれたことであつた。ツアー專制はかくの如く絲を全部手に引いてゐたやうに見られるが、それであつて尙ほ、自からを救ふことが出來なかつたのである。

大會が進捗するにつれて、『イスクラ』派の主要人物間に於ける意見の衝突が、中心問題となつて來た。『硬派』と『軟派』との間の分裂は明らかとなつた。最初は、相異點は規約の第一條にあつた。何人が黨員と認められるべきであるかの問題であつた。レーニンは黨をして×××たらしめ

んと欲した。マルトーフは、×××の指命の下に働らく者は凡て黨員たらしめんと欲した。この差はその當時、直接にはさほど重要ではなかつた。何故ならば、孰れの說にしても、決議權は××××内のものにのみ限つたからである。それにも拘らず、二つの別れ行く傾向は明らかであつた。レーニンは、黨内に於ける關係を明瞭にして疑ふ餘地なきものに作り上げることを欲した。マルトーフは、形式を曖昧にしておきたかつた。黨員の分裂は、大會のその後の一切、特に、黨の指導中心の構成分子を決定したものであつた。

樂屋では、代表者個人の獲得戰が行はれてゐた。レーニンは、私を彼の味方につける機會を失はなかつた。一度、レーニンと私と、それから他に一人クラシコーフといふ代表と三人で、長い散步をしたことがあつた。その間レーニンとクラシコーフとは、マルトーフは『軟派』であるが故に、私と彼とは結局に於て一致し得ないといふことを私に確認せしめんと努めた。『イスクラ』の他の編輯員に對するクラシコーフの批判は、甚しく非禮儀的であつて、レーニンも顰蹙してゐたが、私は震へるほど憤激した。『イスクラ』の編輯員に對する私の當時の態度は、未だに、青年のセンチメンタリチーに支配されたものであつた。

この會話は、私を引きつけないで、寧ろ遠ざけたのである。意見の相違點は未だ抽象的であつたし、誰も未だ探り合ひの態であつた。そこで吾々は、事情の解決を圖る爲めに、『イスクラ』の間違ひのない同志だけの會合を開くことに決した。然るに、その議長の選出さへが困難であつた。ドイツチエが事をまとめる意味で云つた——『僕はペンジャミンを議長に推薦する』と。かくて私は、

ボリシエヴイキとメンシエヴイキとの間の分裂が形をなし始めたところの、『イスクラ』派の會合の議長席につかしめられたのである。何人の神經も極度に緊張してゐた。

レーニンは、扉を手荒く音を立てて開閉して、會議室から出て行つた。黨内鬪爭に於て、彼が自制を失つたのを私が見たのは、これが唯一の場合であつた。情勢は益々險惡化した。意見の衝突は大會の席上で表面化した。レーニンは今一度私を『硬派』に引入れる努力を盡した。彼は一人の婦人代表Zと、彼の弟のドミートリとを私に遣はした。私等の會見は或公園で數時間に亙つた。使者はどうしても私を放さなかつた。そして『事情の如何に拘らず、君を伴れてくるやうにとの命令だ。』といつた。結局に於て、私は斷乎として行かなかつたのである。

分裂は、大會出席者の凡てが豫期するところなくして到來した。この鬪爭に於て最も活躍的であつたレーニン自らそれを豫見することがなかつた。又決して彼はそれを欲してもゐなかつたのである。兩派とも、事の成りゆきに全く面喰つたのである。大會後、レーニンは數週間神經衰弱に惱んだのであつた。『ロンドンからエル・デーは殆ど毎日のやうに手紙をよこした。』――セドーヴアは彼女の日記に書いてある――『彼の手紙は、日々の形勢の險惡化を告げると共に、終に分裂の到來したことを報じた。そして『イスクラ』は最早や死滅したと絶望的に叫んでゐた。――『イスクラ』の分裂は吾々を混亂させた。エル・デーが大會から歸るや否や、薄紙に細かく大會の報告を書いたものをラルース佛語字典の表裝に隱して、私はそれを持つてペテルスブルグに向つて出發した。』

如何にして私が大會に臨んで『軟派』に組みしたか？『イスクラ』の編輯者中、私が最も親しく

してゐたのはマルトーフ、ザスーリッチ及びアクセリロッドであつた。彼等が私の上に感化を及ぼしたことは疑ふべくもない。大會前に於ても、編輯部員間に種々な意見の相違は窺はれたが、それ等は決して判然たるものではなかつた。私は、最初極くつまらぬ事で私に對して極度の反感を抱いてゐたプレハーノフから、最も遠ざかつてゐた。レーニンの私に對する態度は非常に親切であつた。然るに當時の私の眼を以てすれば、貴い『イスクラ』の折角一致してゐる編輯部を破壞せんとするところの者は、レーニン彼自らであつた。編輯部内に於ける分裂は、私にして見れば、全く罪惡的であつた。

××の中央集權主義は、峻嚴にして假借するところなき原則である。個人關係、舊同志關係に對してそれは屢々絶對的無遠慮の外觀を呈することがある。レーニンの好きな言葉のうちに、『非妥協的』とか、『無慈悲に』とかいふのがある事は、決して偶然ではないのである。かゝる或個人の傍若無人の態度を正當化しうるものは個人的野望から絶對に解放されたところの、一定の目的に對する××的に最も熱烈なる誠意以外にはない。一九〇三年に於ける問題の凡ては、編輯部からアクセリロッドとザスーリッチを除かうとするレーニンの希望以外の何にものでもなかつた。私の彼等兩名に對する態度は、尊敬に加ふるに個人的愛着の念も加はつてゐた。レーニンとても、彼等の過去の功績に對して十分の尊敬を惜まなかつた。だが、彼等は既に將來の妨害となりつゝあつた事をも、レーニンは見てゐた。その點からしてレーニンは、彼等が指導の地位から除かれねばならぬと決定してゐたのである。私は、それに一致出來なかつた。私は、黨の組織が漸くにして成らんとするそ

の瞬間に於て、舊い同志を無慈悲に棄てるといふ如き行爲を容れることは出來なかつた。第二大會に於てレーニンから私が去つた原因は、かゝる行動に對する私の憤怒であつた。彼の行爲は、私には、許すべからざる横暴としか思へなかつたのである。それにも拘らず、政治的には、組織の立場からして、それは正しくもあり必要でもあつたのだ。初期の準備時代に足を止めた舊い同志たちとの分離は、早晩、止むを得ないことであつた。レーニンは、これを何人よりも早く見拔いてゐたのである。レーニンは、プレハーノフをザスーリッチ及びアクセリロッドから遠ざけることによつて、彼を救はんと試みたのであるが、その後の事情が立證した通り、これさへも失敗であつた。

レーニンから私が離れたのは、『道義的』或ひは個人的理由と稱すべきものゝ爲であつた。だが、これは表面のことであつた。底に於ては、分離はやはり政治的性質のものであつて、組織的方法如何の上に表現されてゐた。私は、自ら中央集權派であると信じてゐた。然るに、事實に於て、舊制度に對抗して、幾百萬の民衆を統率する××的政黨の中央集權なるものは、如何に斷然たる中央集權でなくてはならぬかを、私はまだ知らなかつたのである。私の若年時代は反動の沈欝な空氣の裡に費されたのであるが、この空氣は五ヶ年間餘計にオデッサに漂うてゐた。レーニンの青年時代は『人民の意志』時代に溯る。又私より數年後れて來た同志たちは、新たな政治的勃興に色づけられた環境に育てられた。一九〇三年のロンドン大會の折には、革命は未だ、私にとつては、多く理論的抽象であつたに過ぎなかつた。レーニンの中央集權主義は、明かなる××××の論理的結論であるとは、當時私は獨立的に觀ることは出來なかつたのである。而かも、一つの問題を獨立的に觀察

して、それから必要な結論を抽出せんとする慾望は、常に私の最も熱烈なる知的欲求であつたのだ。

主義上の意見の相異は未だ曖昧なものであつたが、兎に角それは別として、大會に於ける衝突は、年寄り同志連の間にあつて、レーニンの立場と彼の重要性とが、未だ認められてゐなかつた關係から激化されたものである。大會中並に大會直後に於て、アクセリロッドその他の同志の憤慨は、彼等の驚愕を以て並行されてゐたのである。『どうしてレーニンは、あゝした勇氣を持つてゐるのだらう?』——かう彼等は云つた。

『つひ近頃彼は、單なる生徒として亡命して來て、そして生徒として今日まで行動して來たのではないか?』——年寄り連はいふのであつた——『一たい彼は、何處から、あゝした優越的自信を與へられたのか? あのづう〳〵しさは一たい何んだ?』

レーニンは正に勇氣を持つてゐた。彼の必要とする凡ては、年寄り連は最早や、正に來らんとする××に際して、プロレタリア××の、××××を直接指導する力なき事實を知るだけのことであつた。年寄り連は彼等の判斷に於て誤まつてゐた——尤も誤まつたものは彼等ばかりではなかつたが。レーニンは、單に有力なる黨の活動分子であつたといふだけではなくして、彼の全身の力を一定の目的に集注することの出來る、而して他の何人にも優つて彼自らが强力であり、先輩と誓く肩を並べた後に於て、その事實を自ら立證したところの、指導者であつたのだ。『イスクラ』の旗を守つた一團の間に通有であつた、漠然たる雰圍氣の裡にあつて、レーニンのみは決定的に『明日』

を見透し、その爲の闘爭の現實性と殘忍性とを見落しなく把握してゐたのである。

大會では、一時的ではあつたが、レーニンはプレハーノフを味方にすることが出來た。然るにそれと同時に、彼はマルトーフを失つた。この損失は永久的であつた。プレハーノフは明かに、大會席上に於て、何にものかを嗅ぎつけたらしかつた。レーニンについて、アクセリロッドとの談話中に彼は『ロベスピエールもあゝした人間だつたらう。』と云つたさうである。プレハーノフ自身は、大會に於て餘り大きな仕事はしなかつた。彼が全力を盡したのは只一回であつた。それは、大會の綱領委員會であつた。綱領に對する科學的に正確な計畫案を心に抱いて、自信と知識と優越感とを持つて、皮肉的な眼を快活に光らせて、既に白くなりかゝつた髭をピク〳〵動かせながら、稍々劇的ではあるが活き活きした態度を以て、議長として立つたプレハーノフは、學識と機智との仕掛花火のやうに輝かしく、彼の人格を以て大きな會合を明るくしてゐた。

メンシエヴイキ（英譯者註＝ロシア社會民主黨第二大會の分裂の結果として、二つの派が生れたが一つは多數を味する『ボルシエヴイキ』となり、他は小數派を意味する『メンシエヴイキ』となつた。）の首領としてのマルトーフは、革命運動の最も悲劇的人物の一人として數へられねばなるまい。天才的記者であり、巧妙なる政治家であり、聰明なる思索家としての彼は、彼が指導者となつた知識的運動そのものよりも、遙かに高所に在るべき人物であつた。だが、彼の思想は勇氣を伴つてゐなかつた。彼の觀察力は意志の力を持たなかつた。單なる執拗は、それ等の代用とはならなかつた。マルトーフの最初の知覺はいつも革命的であつた。だが、すぐそれに續く彼の思想は、意志の

支持を持たぬが故に、消去るのである。私と彼との友愛關係は、來たらんとする××によつて齎らされた最初の大きな事變と共に、消えてしまつたのだ。

第二回大回について何んと云はれようとも、兎に角それは、數年間私をレーニンから切離した事實だけでも、私の一生に於ける一つの境界標であつた。今、過去を顧るときに、私は何にも悲しむべきものを持たない。私が再びレーニンに立戻つたのは、他の多くの同志よりは遲かつた。だが私はそれまでに、革命の經驗やら、反革命の經驗やら、帝國主義戰爭の經驗やらの凡てを通過し、考慮して、私自からの途を辿つて來たのである。その結果として私は、師の生前には單に彼の態度を眞似、言葉を眞似るに過ぎず、それも時には間違つて——又彼の死後には、力なき迷兒に墮し、敵の手に無意識的に操縱される道具に過ぎぬ所謂彼の『使徒』等とは違つて、より眞面目に、より正しく彼に復歸したのである。

第十三章　ロシアへ歸る

第二回大會の小數派との私の關係は短かいものであつた。幾日かたゝぬうちに、小數派内に二つの傾向が明かとなつて來た。私は、出來うる限り急速に多數派と結合することを主張したものゝ一人であつた。それは、私が分裂を以て單なる一時的出來事と考へてゐたからである。然し他の者に

とつては、第二回大會に於ける分裂は、日和見主義への轉向の第一歩であつたのだ。政策と組織との問題でメンシエヴイキの主なる人たちと議論することで、私は一九〇四年を費してしまつた。論議は二つの點に集中されてゐた。一つは自由主義に對する態度であり、他はボリシエヴイキに對するものであつた。私は、自由主義者が大衆に依存せんとする試みに對して徹底的に反對して立つた。その半面として私は、社會民主黨内の二つの分派が再び結合せんことを、益々强力に主張せざるを得なかつた。

九月には、私は公然と小數派との關係を絶つた。その年の四月には、既に私は小數派の活動的分子では無くなつてゐた。その間私は、數ヶ月、ロシア亡命者團から脱け出て、當時ドイツに於ける最も美術的都市といはれてゐたミユーニヒに滯在した。私はバヴアリア社會民主黨を能く知るに至つたと共に、ミユーニヒの美術館も知り、又シムプリシスシムス派の漫畫派をも知つたのである。

黨大會當時に於ても、南露全體はストライキの大波にゆられてゐたのである。農民の動搖は益々激しくなつてきた。大學内に於ても騷動は絶えなかつた。暫時、日露戰爭によつて彼等は鳴りを鎭めたやうだつたが、ツアーリズムの軍事的崩壞は、革命の偉大なる槓杆となつた。新聞は益々大膽となり、テロリストの活躍は旺んとなり、自由主義者等も目醒めた如く騷ぎ出した。そして革命の基礎的問題が表面化して來た。私の眼には、抽象的問題が實際に於て社會的生命を持つに至つたと見られた。メンシエヴイキ、特にザスーリツチの如きは、自由主義者に大なる希望を屬してゐた。

大會前の或日、カフエー『ランドール』で開かれた編輯會議で、ザスーリツチはかゝる場合に於

ける彼女の特色であるところの、遠慮勝ちながら執拗な態度で、吾々は餘りに自由主義者を攻擊すぎると苦情をいふたことがある。これは彼女が苦痛とした點であつた。

『彼等は實際眞劍なのだ。』――彼女の目標はレーニンであつたのだが、その方向から眼をそらせて彼女はいふのであつた。――『ストルーヴエは云つてゐる、ロシアの自由主義者は社會主義を非認してはならない。若しさうすればドイツ自由主義者の運命に陷つてしまふ。だから、フランスの急進社會主義者の立場こそが、ロシア自由主義者の採るべき道だ』と。

『それだからこそ、益々以つて吾々は彼等をヤツつけなければならない。』――レーニンは鮮やかな微笑を顔に浮べて、恰もザスーリツチを揶揄うやうにいふのであつた。

『それは立派な態度ね！』――彼女は絶望的に叫んだ。――『握手を求めてくる者を毆り飛ばすなんて！』

この問題では、私は全くレーニンと一致してゐた。一九〇四年に、自由主義者等の擡頭が間もなく行詰りに達するや、『次にはどうする』と云ふ問題を私は提起した。それに對する私自身の答へは、行詰つた途は、××××によつて開かれるであらう、そしてそれは直ちに、自由主義に反對する大衆の鬪爭の先頭に立つ、、、、、、、、、を以て續かれるであらう、といふのであつた。これは私とメンシエヴイキとの間の分離を益々大ならしめた。

一九〇五年一月廿三日の朝、夜中眠られなかつ汽車の旅で疲れて、私は地方廻りの講演からゼネバに歸つて來た。新聞賣子が前日の新聞を私に賣りつけた。それは、未來詞を用ひて、冬宮への勞

働者の行進を語つてゐた。私は、結局それが流產に終つたものと判斷した。それから一時間後に、私は『イスクラ』の事務所に來た。マルトーフは神經をはづませてゐた。

『ダメだつたのかしら?』

『何にがダメだつたと云ふんだ?』――彼は私に喰つてかゝるやうに云つた――『僕等は昨夜一晚中眠らずにカフエーで新聞電報を讀み續けてゐたのだ。君は何んにも知らないのか? これを讀んで見給へ――』

彼は、新聞紙を私に手渡した。私はそれを擴げて、電報の最初の十行ほどを讀んだ。それは、血の日曜日*を報ずるものだつた。鈍い、焦げつくやうな感覺が私を支配するのであつた。

*英譯者註=一九〇五年一月廿二日、ペテルスブルグの勞働者大衆がガボン僧正に導かれ、僧院の旗印やツアーの×××を先頭に立てゝ、ツアーに彼等の慘狀を訴へる歎願書を呈せんとして冬宮に向つて行進した。冬宮前の廣場まで女子供を混へた大衆は進んだ。そこで彼等は、、、、、、、、と共に、、、、、、、、、、、、、させられた。この日はロシアでは『血の日曜日』として記念されるに至つた。

私は最早や海外に留まることは出來なくなつた。私のボリシエヴイキとの關係は大會に於て絕たれた。私は亦メンシエヴイキとも手を切つた。そこで私は獨立しなければならなかつた。或學生を通じて私は旅券を得た、そして一九〇四年の秋再び海外へ來た私の妻（英譯者註=トロツキーの二度目の妻、ナタリヤ・イヴアノーヴナ・セドーヴア）と共に、汽車でミユーニツヒに行つた。パアルヴスは彼の家に私等を泊めてくれた。彼は、一月廿二日に關する私の論文を讀んで非常に感激した。『事件はこの解剖を十分に立證してゐる。今日では、××××が最重要な鬪爭手段であることに疑ひを抱くものはあるまい。一月廿二日は、よしそれが坊主の衣によつて假裝されてゐたにしても、最初の××××××××であつたことに何等の疑ひはない。たゞ、ロシアに於ける革命は民主的勞働者の政府を樹立するであらう、と附加へる必要がある。』かうした立場からパアルヴスは、私のパンフレツトに序文を書いたのであつた。

パアルヴスは、世紀の代り目に當つての、最も重要なマルクス主義者の一人であつたことに問題はない。彼はマルクス的方法論を巧みに應用し、又世界の情勢に絕えず銳い眼を注いでゐたところの見界の廣い人物であつた。加ふるに彼の大膽なる思想と勇健なる筆法とが、彼を一流の著述家たらしめた。彼の初期の硏究は社會革命の問題に私を接近せしめたものであつた。そして私にとつては、プロレタリアトによる×××問題を、天文學的『終局』の目的からして、現在の實際問題と化したところのものであつた。

それにも拘らず、パアルヴスには常に何にか、狂的にして安心の出來ない點があつた。他の凡ての彼の望みに加へて、この革命家は、富に對する驚くべき慾望を以て充たされてゐた。これをさへも彼は、尠なくともその頃は、彼の社會革命の思想と結び合せてゐたのである。『黨機關は化石して來た。』――彼は非難するのであつた――『ベーベルにさへも道理が分らなくなつて來てゐる。吾々革命的マルクシストが今必要とするところのものは三ケ國の歐洲語で發行される大新聞である。

だが、これには隨分金がいる。どうしても吾々はウンと金を持たなくては――』彼のブルドックのやうな重たげな頭の内では、かくの如くして、革命と富との思想が混合してゐたのである。彼は、ミューニッヒで自ら出版業を創めんと試みたのであるが、それは失敗に終つた。そこで彼はロシアに行つて、一九〇五年の革命に參加した。彼の創造的頭腦の働きにも拘らず、指導者としては彼は全く失敗であつた。一九〇五年の革命が失敗に歸するや、彼は墮落しはじめた。ドイツから彼はウキンナに移り住み、それから又コンスタンチノープルに移つた。其處で、彼は世界戰爭に遭遇したのであつたが、軍事關係の事業を通じて、大きな富を作つた。それと同時に彼は、公然とドイツ軍國主義の進歩的使命の擁護者として現はれ、革命家とは斷然手を切つて、獨逸社會民主々義右翼の知識的指導者と化した。戰爭以來、私が彼と絶對に、政治的にも私交的にも、關係を斷つたことはいふまでもない。

ミューニッヒから私とセドーヴアとはウキンナに向つた。亡命者の波は既にロシアへと押返してゐた。ヴイクトル・アドラーはロシア問題で多忙を極めてゐた。彼は、亡命者のために、旅券や金などを作つてやることに忙殺されてゐた。彼の家で、床屋が私を變裝してくれた。私の顏は既に海外に在るロシア警察に見慣れたものとなつてゐたからである。

『アクセリロッドから電報を受取つたところだ。』――アドラーは私に說明するのであつた――『ガポンは外國に來たさうだ。そして自ら社會民主黨員だと云つてゐるさうだ。馬鹿だな！　若し彼があのまゝ消へてうせたなら、美しい傳說が出來上つたのに、亡命者となつては滑稽だ。』――彼の眼

には皮肉を包む光があつた。――『あゝいふ人間は、黨員としてゞなく、歷史的殉敎者として止まるべきなんだ。』

私がウキンナに居る間に、セルギウス大公の暗殺が傳へられて來た。事件は折重なつて來た。社會民主黨新聞はその眼を東に向け初めた。私の妻はキエフの住家や關係筋と手筈を定めるため、私より一足先に出發した。退職伍長アルブゾーフと云ふ名の旅券で、私は、二月にキエフに到着して、數週間、家から家へと移り變つた。最初私は或若かい辯護士の家にゐたが彼は自分自身の影法師さへも惧れた。次に私は工藝研究所の敎師の家に泊つた。それから、自由思想を抱いてゐた或未亡人の家にも居つたが、一度は眼科病院に逃込んだこともあつた。私の立場を承知してゐる係りの醫者の命令で看護婦は丁寧に私を取扱ふのであつた。私の眼には、毒にも藥にもならない滴藥が落された。さうした關係から私は、二重に注意しなければならなくなつた。そして私の眼のことを非常に心配する看護婦に見つからぬやうに、隱れて宣傳文を書かなければならなかつた。診察時間には、私の醫者は信用の出來ない助手を何んとか他の用事を命じて、自分とそれから信用する女助手と二人ぎりで私の病室へ來て、戸を閉し、窓のカーテンを下して、恰も暗室で眼を診察する如くに裝うて、それから吾々三人は、小さな聲ながら面白げに笑ふのであつた。

『君は煙草を持つてゐる？』――醫者は私に問ふのであつた。

『持つてゐます。』

『澤山？』

『エ、澤山。』

三人は又笑つた。そしてそれで診察は終つた。それから私は宣傳文の書上げに急ぐのであつた。かうした生活に私は頗る興味を感じた。然し只氣の毒に堪へなかつたことは、やさしい年寄の看護婦が何にも知らずに、一心に私の足に湯タンポを代へては入れてくれることだつた。

有名な祕密出版部は當時、キエフにあつた。そして各方面に於ける逮捕や搜索にも拘らず、祕密探偵長ノヴイツキーのすぐ鼻の先で、吾々はそれを數年間無事に維持し得たのである。一九〇五年の春私の書いた宣傳文が幾多印刷に附せられたのは、やはり、この印刷所に於てゞあつた。私の、より長文の書きものは、キエフで知合ひとなつたクラツシンといふ若かい技師に托した。彼はポリシエヴイキ中央委員の一人で、或大きな祕密出版をコーカサスの何處かで經營してゐたのである。キエフで私は、彼のために幾度かリーフレットを書いた。それ等は、當時の祕密的狀態の下にあつては、驚くべき程度の立派な印刷物となつて現はれた。

黨は、革命そのものと均しく、當時は未だ若年であつた。そしてその黨員自身及び彼等の行動一般に於ても、無經驗の狀態が顯著であつた。クラツシンも亦この缺陷から免かれてはゐなかつた。だが彼には何んとなくしつかりとした『行政的』態度があつた。彼は經驗のある技師であつて、相當金になる職を占め、そして彼の使用主からは重要視されてゐたのである。又彼は、當時の若い革命家の何人よりも、多方面の知已を有してゐた。勞働者の間にも、技師連の間にも、モスコウの自由主義思想の工業家の間にも、文學者連の間にも、到る處にクラツシンは知已を持つてゐた。彼は

それ等の多くの知已を巧みに操縱した。だから、他の者にあつては到底望まれない多くの機會を、彼はつくり得たのである。一九〇五年には、黨の一般の仕事に加へて、クラツシンは最も危險な仕事、例へば××の購入、×××の用意、×××の組織等を引受けてゐたのである。彼の廣い眼界にも拘らず、彼は本質上、政治に於ても亦一般生活に於ても、卽時實行家であつた。それは彼の强味であつたと共に、彼のアキレス腱、卽ち弱點でもあつた。長い年月を要する勢力の集中、政治的訓練、理論的分析や經驗等の凡てに對しては、彼は關係するところ尠なかつたのである。そして一九〇五年の革命が失敗と決つた時に、電氣學や一般に工業が、クラツシンの注意を第一に惹くものとなつた。この方面に於ても亦彼は、成功者たる素質を十分に顯はした。技術方面に於ける大きな成功に於ても亦、彼が嘗て革命的鬪爭に於て見出した個人的滿足に均しい滿足を感じたであらう事は疑ひなかつた。彼は、ポリシエヴイキ革命の成就を、寧ろ反感的驚愕を以て迎へた。なぜならば彼はそれを一つの冒險と認めて、その失敗を斷定してゐたからであつた。暫らくの間彼は、國內の崩壞を防止しうる吾々の能力を信ずるを欲しなかつた。然しながら後に至つて彼は、眼前に展開された仕事の廣大なる領域によつて征服された。

私自身について言へば、一九〇五年に於けるクラツシンとの連絡は實に天與の機會であつた。私等はペテルスブルグで會ふ約束をした。そして彼は私に祕密のアドレスをくれた。その最も重要なものはコンスタンチノヴスキー砲兵學校であつて、後年私と運命を共にするに至つた軍醫長アレキサンドア・アレキサスドロヴイチ・リトケンスの家族と其處で會ふ手筈であつた。一九〇五年の不

安な日夜、再三私が身を隱したのは、ザバルカンスキー街のこの學校内のリトケンの家であつた。校門の歩哨の眼の前の彼の家へは、校舍内では見られたことのない類の人間が屢々出入するのであつた。だが、學校の下役たちは軍醫長に非常に親しく、疑はしい點があつても警察へ密告するやうなことは無かつたから、萬事は無難であつた。軍醫長の長男アレキサンドルは、當時僅かに十八歳であつたが既に黨に屬し、それから數ヶ月後、オルローフ縣の農民一揆を指導した。彼は後に神經過勞に陷つて病み、終にそれに斃れたのである。軍醫の次男エウグラフは當時中學生であつたが、後年活躍して、ソヴイエット政府となつてからは、その教育部に重要な地位を占めたが、一九二一年にクリミヤで反革命團のために殺害された。

ペテルスブルグでは、私は一地主ヴイケンチエフなる旅券で、公然と生活した。同志間では、私はペートル・ペトローヴイッチとして知られてゐた。私は正式には二つの分派の孰れにも屬してゐなかつた。私は當時ボリシエヴイキ調停者の立場にあつたクラッシンと共同して働いた。二派の中間に介在した私は、これによつて、益々彼と密接となつた。それと同時に、當時、非常に××的な政策の上に立つてゐた、ペテルスブルグ地方のメンシエヴイキ團とも、私は連絡を保つてゐたのである。私の意見に從つて、この一團は第一次國會(ドーマ)のボーイコットを主張した。これは海外のメンシエヴイキ中心の意見と逆行するものであつた。然しながらこの一團は政府の穿にかゝつた。『金縁眼鏡のニコライ』と同志の間に呼ばれてゐたドブロスコックといふのが使嗾(エンエン・プロボケーター)間諜であつたことが後に知れた。私を知つてゐる彼は、私がペテルスブルグに來てゐることを探知した。私の妻は森

の中で開かれたメーデーの會合で逮捕された。そこで私は、暫く隱れる必要に迫まられて、その夏フヰンランドへ逃げた。短かい平和時代が私の上に來たので、私は文筆の仕事に精力を集注した。私は新聞を澤山に讀み、黨が徐々に形成せられて行くのを觀察し、研究資料を蒐集したりしてゐた。その間に私は、ロシアの社會の内部勢力關係に就ての私の思想と、ロシア革命の豫想とを建てたのである。

當時私は、ロシアはブルヂョア・デモクラシーの革命に當面してゐると書いた。××の根本問題は土地である。政權は、農民を、、、、、、、、、に對抗せしめて指導するところの階級若しくは黨によつて握られるであらう。自由主義者も亦民主々義的インテリゲンツイアもそれを行ふ力はない。彼等の歴史的時代は去つた。勞働者を通じての社會民主々義のみが、農民をその指導下に置きうる。ロシア社會民主黨が西歐諸國に於けるより以前に政權を獲得しうるであらう。豫想の根據は玆にある。社會民主々義の當面の問題は、民主々義××の完成である。だが、一度政權を獲得した以上は、プロレタリアの黨は民主々義的政綱内に止まることは出來まい。それは社會主義政策の採用に至るであらう。而してその方向にどれだけ進みうるかは、單にロシア國内に於ける勢力關係のみならず、全國際的情勢如何によつて支配される問題である。それ故に、主たる××的方向は、農民指導權獲得のために自由主義と爭ふと同時に、社會民主黨は、ブルヂョア革命の過程中に於て尙ほ、政權の獲得に向つて進むことを必要とする。

革命の一般的見透しの問題は、極めて密接に××問題と結びついてゐた。黨の中心的政治スロー

ガンは、國民議會の要求であつた。だが、××××の進行と共に、誰が如何にしてこの國民議會を召集するかの問題が湧いて來た。プロレタリアートによつて指導される民衆一般の××が豫想せられると共に、臨時革命政府の樹立が、論理的に可能となつた。××に於けるプロレタリアートの指導的役割が、必然に、臨時政府に於ける決定的地位をそれに與へねばならなかつた。

この問題は、黨の上層部内、並にクラッシンと私との間に於ける議論の中心となつた。私は自分の論文中に、×××××に對する××の完全なる勝利は、農民の支持の下にプロレタリアートが×××××か、若しくは、かゝる××××への直接的過程を意味するであらうと書いた。この斷定はクラッシンを驚かせた。彼は、私が論じた如き臨時革命政府のスローガン、並にその活動の綱領を容認した。だが彼は、その政府内に於ける社會民主黨の多數問題に關しては、前以て規定することの不可を主張した。然しこの形に於て私の綱領は草案され、そしてペテルスブルグで印刷された。クラッシンは、五月に海外で開かれる豫定であつた黨大會に出席して、この私等の綱領を主張する手筈であつたが、大會は終に開催されるに至らなかつた。そこでクラッシンは、ボリシエヴイキ大會に於ける、臨時政府の問題に關する討論に加はつて、レーニンの決議案に對する修正案として私等の綱領を提出した。この事件は、政治的に甚だ興味のある出來事であるから、そのボリシエヴイキ大會の報告書の一部分を茲に轉載する。『同志レーニンの決議案に關しては、』――クラッシンは述べた――『××××の問題、並に×××と×××との間の連絡を明確に示さない點に於て缺陷があると私は認める。言ふまでもなく、×××は×××××によつて、それ自らの機關として、

設立されるものである。……私は更に、×××××は、×××××と×××××との後に於て、始めて現るべきものであるとする點に誤謬を認める。否、それは×××××そのものゝうちに出現するものであつて、その組織的活動を通じて、かゝる××の成功を保證し、その遂行に最も力を盡すものでなくてはならない。×××が完全に××した曉に及んで、始めて、×××が×××××に參與するものと見做すことは幼稚である。栗が燒かれて、それが、他人の手で火中から取上げられた時には、それが吾々の口に入るとは豫想されない。』これは殆ど全部、私が自ら綱領中に書いたことゝ同一である。

レーニンは、彼の序論的の報告書中に、この問題を全々理論的形式を以て設定してゐたが、クラッシンの意見を頗る同情的に取扱つた。彼は次の如く云つた――

『全體として、私は同志クラッシンの意見に贊成するものである。文筆の人間として私は、自然、問題の文書的形成に注意を集中したことは止むを得ない。鬪爭的の重要性は同志クラッシンによつて適確に指示されてゐる。私は同君の說と完全に一致する。何人も、鬪爭の目的を獲得することを豫想しないで、鬪爭に加はる筈はない。』

決議草案はそれによつて修正された。こゝで次のことを述べておくのは無駄ではないだらう。最近數年間の論爭に於て、臨時政府問題に關する第三大會の決議が、『トロツキーズム』に反對するものとして幾百回となく引用せられてゐる。スターリン學校の『赤色教授』連は、レーニニズムの一範例として、彼等が私に反對して引用するところの思想が、私自身の書いたところの文章であつた

ことを夢にも知らないのである。

フヰンランドの私の假寓の環境は、山あり、松林あり、湖水あり、晴れた秋の空あり、平和ありで到底革命を思はしめる類のものではなかつた。九月の末私は更に奥地に退いて、或湖畔の保養所『ラフハ』に這入つた。このフヰンランド語は平和といふ意味である。この大きな保養所は秋には無人となるのであつた。或るスエーデンの著述家が一人の英國の女優と殘つてゐたが、彼等は宿泊料を拂はずに去つた。そこで保養所の主人は彼等を追うて、ヘルシングフォルスへ旅立つた。彼の妻は重病だつた。そして僅かに、シャンペンの力で心臓の動きを維持してゐた工合だつた。私は彼女の顔を見たことはなかつたが、彼女は主人が留守中に死んでしまつたのである。死骸は恰度私の室の眞上の二階に安置されてあつた。給仕人は主人を迎へにヘルシンクフォルスへ行つた。たゞ一人のボーイと私とだけが後へ殘つた。大雪が降つて來て、森は眞白な衣に包まれた。保養所は全く死せるが如くであつた。

ボーイは何處か地下室にある臺所にゐた。私の頭の上には死んだ女が眠つてゐるだけだつた。私は全く孤獨で、『ラウハ』は正に平和であつた。何んの音も聽えず、誰一人ゐるとも思へなかつた。私は書いては歩き、歩いては書いた。夕方になつて、郵便配達人がペテルスブルグ新聞を一束投込んで行つた。私はそれを開いて讀んで行つた。それは恰も、開けた窓から吹雪がふき込むやうな工合であつた。××××は刻々重大化して、町から町へと擴がつてゐた。寂としたホテルの内に、新聞紙のがさつく音のみが耳に際立つて響いた。××は正に酣はなのであつた。

私はボーイに勘定させて、馬を雇つて、『平和』を振棄て、吹雪に當面した。その同じ夜の中に、私はセント・ペテルスブルグの工藝研究所の大きな講堂に立つて、演説をしてゐたのである。

第十四章　一九〇五年

十月ストライキは計畫通りには展開しなかつた。それはモスコウの印刷工によつて開始せられたのであつたが、程なく徐々に下火となつてしまつた。血の日曜（一月廿二日）の記念日には、決定的闘爭がなされるべく諸政黨によつて計畫されてあつた。そのために私は、フヰンランドの隱れ家で格別急がずに準備をしてゐた次第である。然るに一つの偶發的ストライキが鐵道方面に飛火して、急速に擴大して行つた。その年の十月十日に始まつて、既に政治的スローガンを掲げたストライキが、モスコウから全國に擴大しつゝあつた。この種の總同盟罷業は、未だ嘗て觀られたことがなかつたのである。多くの場所では××との衝突が起つてゐた。だが、全體としては、十月の事變は政治的ストライキに止まつて、××××とはならなかつたのである。××××は兎に角驚愕した。そして退却を行つた。十月十七日（新暦は十月三十日）には憲法發布の宣告があつた。傷ついたツアーリズムが、未だ政治機關を確保してゐたことは事實である。ウキッテの言葉に從へば、政府の政策は『卑怯と、盲動と、僞瞞と、暗愚との混合物』であつた。それにも拘らず、××はその第一次

的成功を收めたのであつた。この勝利は勿論不完全ではあつたが、しかし多くを將來に約束するものであつた。

『一九〇五年のロシア革命の最も主要なる部分は』――とウキッテが後日に至つて書いた――『「吾等に土地を與へよ」といふ農民のスローガンであつたことは謂ふまでもない。』この點ではウキッテの言は正しい。だが、彼は尙ほいふ――『私は勞働者のソヴイエットには重きを置かなかつた。事實それは何等の重要性を持たなかつた。』この彼の言は、××××への最後的警告であつたところの當時の事件の意義をば、この最も天才的なる官僚主義者も亦理解してゐなかつたことを立證してゐる。然しウキッテは、勞働者ソヴイエットの重要性に關する彼の意見の修正を餘儀なくされる前に死んだのだ。

私は、十月ストライキがその頂上にあつた頃、ペテルスブルグに到着した。ストライキの大波は益々擴大するばかりであつた。然しそれは中心的組織を缺くが故に、何等實質的效果を齎らさずして消去る危險があつた。フキンランドから歸るに當つて私は、一つのプランを心に抱いてゐた。それは、各一千人の勞働者に對する一名の割に選出された代表の政黨外組織（ノンパーティー・オルガニゼーション）であつた。私が歸着した當日、イオルダンスキー（後日、イタリー駐在ソヴイエット大使となつた）といふ記者から聽いたところでは、メンシエヴイキが既に五百人に一名の代表を基礎とする××××を標榜して居つたといふことであつた。これは正しい方法であつた。然るに當時ペテルスブルグにあつた、ボリシエヴイキの中央委員會は、黨との競爭を惧れて、この選擧による黨外組織に斷乎として反對した

のであつた。それに反してボリシエヴイキ勞働者は、全くかうした恐怖を抱いてはゐなかつたのである。ボリシエヴイキ指導者のソヴイエットに對するこの宗派的態度は、十一月にレーニンが到着するまで續いた。

レーニンなしのレーニン主義者の指導なるものについては、隨分面白い話が書ける。レーニンは彼の最も親しい使徒の上にも、斬然と頭角を高く現はしてゐたのであつて、それがために彼の周圍の者は、獨立的に理論的或ひは戰術的問題を解決する必要を感じなかつたのである。何等か危機に際して彼等がレーニンから分離されてゐる時には、如何に彼等が無能であるかに自ら氣づくのであつた。かくの如きが、一九〇五年の秋、竝に一九一七年の春の狀態であつた。双方の場合とも、又他の歴史的にさほど重要でなかつた場合に於ても、黨の一般大衆は、獨立的に思考すべく强要された半可通指導者たちよりは却つて正確に、如何なる行動を採るべきかを感知し得てゐた。第一次革命に於てボリシエヴイキ派が指導權を獲得することの出來なかつた原因の一つは、レーニンの歸着が遲かつた事であつた。

エヌ・アイ・セドーヴアが森の中のメイデーの集會で、騎馬憲兵隊に逮捕されたことについては既に述べた。彼女は六ヶ月監獄に留置されて、それからチヴエルで警察の監視下で生活することを許された。十月の勅令があつてから、彼女はペテルスブルグに戻つて來た。ヴイケンチエーフ夫妻の名義で、私等は或家に間借りをした。その家主は株屋であつたことが後に分つた。不景氣で、株屋は間借人を置かなければならない始末だつた。毎朝私達は澤山の新聞をとつてゐた。家主は新聞

を借りに來て、それを讀みながら齒をギリ〳〵鳴らしてゐた。彼の商賣は日毎に惡化してゆくのであつた。或日、彼は一枚の新聞を手にしながら、私達の室に飛込んで來て叫んだ。彼が指さして示す紙面には、私自身が書いた宣傳文、『ペテルスブルグの玄關番諸君、おはやう！』といふのが現はれてゐた。

『これを見給へ、奴等は玄關番にまで、もう、手をつけて居やがる！　若し僕が奴等牢破りどもの一人でも見つけ出したならば、すぐと打殺してやるんだがな——』と云つて彼は狂人の如くにピストルをポッケットから拔出し、それを頭上高く振りまはした。彼は同情して貰ひたかつたのである。これは私の留守中のことであつたが、私の妻は新聞社の私の事務所に來て、その話をした。私達は他へ移つた方が安全だと思つた。然し多忙で、とてもその餘暇がないところから、私達は、運を天に任せてゐた。その內に私は逮捕せられてしまつた。幸にして、家主も亦警察も、ヴイケンチエーフなる者の正體を發見しなかつた。私の逮捕にも拘らず、私達の居室は搜索を受けなかつたのである。

ソヴイエットでは私はヤノウスキーといふ名で知られてゐた。これは私が生れた村の名である。新聞には私はトロッキーとして書いてゐた。私は三つの新聞に働いた。パアルヴスと私は、小さな『ロシア新聞』を大衆の鬪爭的機關紙に變質した。僅か數日のうちに、その發行部數は三萬から十萬に增へた。一ヶ月後には、それは五十萬に達せんとした。然るに吾々の技術的方面が新聞の發達に伴はなかつた。この困難から、吾々は政府の彈壓によつて寧ろ救ひ出された形であつた。

十一月十三日から吾々は、メンシエヴイキと合同で、大きな政治新聞『ナチヤロー』(端初)を發刊した。この新聞の賣行きは非常であつた。レーニンなしでは、ボリシエヴイキの機關紙『ノーヴアヤ・ジズニ』(新生活)は寧ろ生氣がなかつた。それと反對に『ナチヤロー』は大成功であつた。私の思ふところではこの新聞は、過去半世紀間に現れた如何なる新聞よりも、その歷史的祖先であるところの、一八四八年にマルクスによつて發行された『ノイエ・ライニッシエ・ツアイツング』に酷似したものであつた。『ノーヴアヤ・ジズニ』の記者の一人であつたカーメネフが後日私に語つたところであるが、彼が汽車中から見た停車場の光景では、革命的新聞のみが賣れるのであつた。人の長い列がペテルスブルグ列車から新聞が積出されるのを待つてゐた。

『ナチヤロー、ナチヤロー』と呼ぶ聲が群衆の裡から聽えるのであつた。それから時折り『ノーヴアヤ・ジズニ』と聽えるかと思ふと、又『ナチヤロー、ナチヤロー』といふ聲が勝を制するのであつた。『その時私は寧ろ腹を立てゝ獨語した。』——とカーメネフは白狀した——『ナチヤローは俺達を出し拔いたな』と。

『ロシヤ新聞』と『ナチヤロー』以外に、なほ『イズヴエスチヤ』(新報)の社說を私は書いてゐた。これはソヴイエットの正式機關紙であつたが、それ以外になほ私は幾多の宣言やアッピール、決議文を書かされた。ソヴイエット存在の五十二日間は、絕間ない會合や新聞の發行その他限りない仕事で充滿してゐた。如何にして吾々がこの渦中に生活して來たかは、今日なほ私自身にさへ判然とは分らない。過去なるものは、吾々が回顧する場合、活動の要素を失つて第三者的に觀られるが故

に、屢々不可解となるものである。然るに、吾々はその當時にあつては活動的であつたが故に、渦中に卷込まれてゐたのではなくして、寧ろその渦を造つてゐたのである。凡てのことが大至急に行はれつゝあつた。然るにも拘らず、仕事は相當に成功であつたと云へる。吾々の名義發行人デー・エム・ヘルツエンスタイン博士は、老年の民主々義者であつたが、時折、『ナチヤロー』の編輯事務所へ新調のフロックコートを着てやつて來て、室の中央に立つて周圍の混亂を溫和な眼で見廻すのであつた。それから一年後、彼としては何等關係のなかつた新聞の××的內容に對して、裁判所で辨明しなければならなかつた。老人はその時吾々を非難せずして、却つて涙ながらに、如何に吾々は、當時最も賣れた新聞を編輯するに當つて、小使が近所から古新聞紙へ包んで買つて來た日ませの肉パンを片手に持つて嚙りながら、他の片手で働き續けたかを物語つたのである。老人は、成功しなかつた革命と、亡命家の群と、日ませの肉パンとを庇護した理由で、一年の禁錮刑を受けたのである。

ウキッテの回顧錄によると、一九〇五年には、『國民の大多數は狂氣したやうだつた。』保守主義者に××が集合的狂氣と見える理由は、それが社會的矛盾の『常時』の變調をその最高點にまで昇騰せしめるからである。巧みな漫畫に於て自らを認めることを嫌ふ人間と同じやうなものである。だが民衆の大多數が『狂氣する』ときには、現代的發展の凡てが集注され、緊張され、加速度化され、その矛盾が眞銳化し、それを堪へうべからざるものとし、その結果、その心理を齎らすのである。かうなると、狂氣した多數が狂氣しない小數に狹窄衣を着せるに至る。そのお蔭で歷史は進む

のである。

××の混亂は、決して、地震や洪水のそれの如きものではなくして、即時に新たな秩序形體を採り始めるものである。人も思想も、自然に新たな道に流れ始める。××が全く狂氣の沙汰と觀られるのは、それによつて掃き出される者の眼にのみである。吾々には全く異なつて觀られた。吾々は多忙中にも、何物に對しても相當の時間と秩序とを發見した。或同志たちは、全く私人的生活の餘裕をさへ持つてゐた——戀をしたり、新しい友人をつくつたり、實際に革命演劇を見に行つたりする時間を。例へばパルヴスであるが、彼は一つの新らしい諷刺劇に非常に自ら興味を感じた揚句、五十枚その切符を買込んで、彼の友人同志に振舞ふとした（尤も、それは彼が、著書の印稅を受取つた時のことではあつたが。）そして彼が逮捕された時には、警察では、彼のポッケットの內に五十枚の芝居の切符を發見したのであつた。永らくの間、これは一つの革命の謎として、警察官吏どもの頭を惱ましたことであつたが、パルヴスは、何んでも大袈裟なことが好きであつた事實を、彼等は知らなかつたのである。

ソヴイエットは國民大衆を奮起せしめた。勞働者は一體となつてそれを支持した。農村地帶では動搖が續いた。ポーツマウスの媾和締結後、東から歸還する軍隊の內にも騷動は絕えなかつた。しかし近衞兵とコザックとは動かなかつた。××を成功に導く凡ゆる必要な要素は既に存在してはゐたのであるが、それ等は遂に熟す機會を持たなかつたのである。

十月十八日、憲法宣言發布の翌日、幾萬の大衆がペテルスブルグ大學前の廣場に密集して、彼等

の闘爭とその最初の勝利とに興奮してゐた。私は校舍の二階から彼等に呼びかけた。かゝる不完全なる勝利に安心しないこと、敵は頑强であること、陷穽は旣に設けられてゐること等を私は叫んだ。そして×××の宣言書を手でづた〳〵に引裂いて、群衆の上に投散らした。だが、かゝる警告は、大衆的意識の上には、單なる小さな爪の跡をも遺すものではなかつた。大衆が目醒めるためには、大きな事變を必要とした。

この事について私は、ペテルスブルグ・ソヴイエットの存在中の二つの出來事を憶ひ起す。その一つは、十月廿九日に、『黑百人團』によつて市中に虐殺が行はれるといふ流言蜚語が飛んだ事があつた。代表者達は工場から直接にソヴイエットの會合に集まつたが、彼等は暴力團に對抗する×××の見本をそれ〳〵携へて來た。彼等はナイフや、短刀や、棍棒や、鞭やらを振廻はして見せたが、それは寧ろ冗談半分で、凡て笑聲の裡に行はれてゐた。彼等は、敵と抗爭する決心を彼等が持つてゐるといふだけで、事は十分であるかの如く見做してゐたと窺はれた。それが生死の闘爭であることには、寧ろ彼等は氣づいてゐないかの如くであつた。然しそれを彼等は十二月になつて學んだのである。

十二月三日、ペテルスブルグ・ソヴイエットは××によつて包圍された。出入口は全部閉鎖されてしまつた。執行委員が會合してゐた二階の階段上から、私は、下の廣場に集まつてゐた數百名の代表者に向つて叫んだ——『××は絕對に無用である。但し××は一切渡すべからず！』××××××でであつた。そこで××の包圍の裡に勞働者は彼等の××を破壞し出した。彼等はそれには慣

れてゐた。×××××××と×××××とを打ちつけ合つて壞した。その間彼等は、最早や、十月の時のやうな笑ひ顏は見せなかつた。彼等は齒を喰ひしばりながら、始めて敵の强大さに目醒めたプロレタリアートとして、一層大規模な×××××の必要を痛感したのであつた。

十月ストライキの部分的勝利は、私にとつて、非常なる理論的並に政治的意義を示したものであつた。始めてツアーリズムを屈せしめたところのものは、自由主義ブルジョアジーの反對でもなければ農民の自然發生的××でもなく、またインテリゲンチャの×××でもなくして、實にそれは×××××××であつた。プロレタリアートの××的指導は、それ自らを必然的事實として顯はしたのである。永久革命の理論はその最初の試驗に成功したものと私は認めた。續いたところの反動時代もこの私の確信を動かすことが出來なかつた。又これ等の前提から私は、西歐に關する私の結論を抽き出した。ロシアの若きプロレタリアートが、かくまで强力なるものでありうるならば、先進諸國に於けるプロレタリアートの×××××は、幾層倍か强大でなくてはなるまい。

後年ルナチャルスキーは、彼特有の不徹底の書方で、私の革命的思想を次の如く記してゐる——『同志トロツキーは一九〇五年には、二つの革命（ブルヂョア革命と社會主義革命）は合致するものではないが、一つの永久的革命を形成する如き方法に於て結びついでゐると主張した。ブルヂョア政治革命を通じて、それが革命時代に入つた以上は、ロシアは、世界の他の部分と共に、社會革命が完成せられるまで、この革命時代から脫出することはないであらうと。この見解に達するに當つて同志トロツキーは、十五年ほどの時間に相違を來たしたが、兎に角大いなる洞見と先見を示し

たのである。』

十五年の私の誤算は、後年再びラデックによつて批判されてゐるが、さりとてそれが一層重要化したとは思はれない。一九〇五年の吾々のスローガンなり豫想なりは凡て、革命の敗北ではなくしてその成功の豫期の上に建てられたものである。吾々は其處に共和國を樹立し得なかつたし、土地の沒收もなかつたし、又八時間勞働制さへ確立し得なかつた。さりとて、さうした要求を掲げたことが、果して吾々の誤謬であつたか否か？　革命の失敗は、上述の如き要求ばかりでなく、凡ての望みを蔽ひ隱した。問題は、革命の日附けではなくして、その內部的勢力關係の分析、及び革命全體としての進行の豫想である。

一九〇五年の革命當時の私とレーニンとの間の關係は如何なるものであつたか？　彼の死後、公文書的歷史は修正され、そして一九〇五年に關しても、鬪爭が善惡二つの勢力の間に行はれたかの如くに定められた事實はどうであつたか？　レーニンはソヴイエットの仕事に積極的には働かなかつた。彼は一回もそこで發言しなかつた。然し彼がソヴイエットの行動を非常に注意して見まもつてゐたことは事實であり、そのボリシエヴイキ・フラクションを通じて、政策上に影響を及ぼし、又彼の機關紙を通じてソヴイエットの爲すべき仕事を說明したことは間違ひない。ソヴイエットの政策に彼が反對した點は全然なかつた。だが――記錄は證據である――ソヴイエットの決議の凡ては、恐らく二三の重要ならざるもの丶他は、私によつて草案されたものであつた。私は最初それを執行委員會にかけ、それから該委員會の名によつて、ソヴイエットの前に提出したのである。又ボ

リシエヴイキとメンシエヴイキとの共同委員會が出來た時に、その代表として執行委員會に立つた者は私であつた。この事に關して、其處には何等の衝突がなかつたのである。

最初のソヴイエット議長は、私がフキンランドから到着する以前に選擧されてゐた。彼はクラスタローフといふ若い辯護士であつたが、革命としては單なる偶然的存在で、ガポンと社會民主黨との間のつなぎの段階を意味したものだつた。彼は議長席を占めてゐたが、何等政治的指導は出來なかつたのである。彼の逮捕後は、常任委員會が組織されて、私がその議長とされた。ソヴイエットの有數な一員であつたところのスヴエルチコフは彼の回顧錄に書いてゐる――『ソヴイエットの知識的指導者はエル・デー・トロツキーであつた。議長のノサール・クリスタローフは實は屏風に過ぎなかつた。彼はたゞ一つの原則的問題をも自ら解決する能力を持たなかつた。誇大妄想的に名譽心に捉はれてゐた彼は、常にトロツキーの忠告と意見とを必要とした。その事實の故に、彼は益々トロツキーを嫌惡するに至つた。』ルナチャルスキーも彼の回顧錄中に語つてゐる――『誰かゞレーニンの前で語つたのを私は記憶してゐる。それは「クリスタローフの星は落ちた。今日、ソヴイエットの中心人物はトロツキーである。」といふのだつた。暫時レーニンの顏は曇る如くだつたが、すぐに彼は云つた――「さうか？　然しさうとしても、トロツキーはその地位を彼自身の不撓不屈の努力で獲得したのだ」と。』

二つの新聞の編輯者間の關係は最も友愛的であつた。彼等は全く論爭を中止した。ボリシエヴイキ紙『ノーヴアヤ・ジズニ』は書いてゐた――『ナチャローの第一號が發行された。吾等は鬪爭の

同志を歡迎するものである。この第一號は、同志トロツキーの論文十月ストライキを以て輝いてゐる。』若し兩者間に抗爭があつたとすれば、かうは書けなかつたであらう。爭ひは全くなかつた。そして相互に、ブルヂョアの批判に對して擁護しあつたのである。『ノーヴアヤ・ジズニ』は、レーニンの歸來後に於ても尙ほ、私の永久革命論を擁護してくれてゐた。双方の新聞とも、兩派の人たちと等しく、黨の統一を目ざして進んでゐた。ボリシエヴイキの中央委員會は、レーニンの參加を以て、過去の分裂は單に海外に亡命中の特殊狀態の結果であつたに過ぎなかつた。そして革命は分派的鬪爭からその理由を奪ひ去つたといふ一致的決議を通過した。私はそれに對して贊成の意見を『ナチャロー』紙上に發表した。マルトーフも積極的にはそれに反對しなかつた。

大衆の壓迫に餘儀なくされて、ソヴイエット內のメンシエヴイキは、最初、左翼と極力步調を一にせんと努力してゐた。變化は、反動の最初の打擊が現はれた時に見られて來た。一九〇六年二月メンシエヴイキの指導者マルトーフは、アクセリロッドに手紙で愚痴をこぼしてゐた――『既に二ケ月も私は、書き始めた論文を終ることが出來ないで困つてゐる。頭の疲勞か神經衰弱か知らないが、兎に角、私は考へをまとめることが出來なくなつてしまつた。』マルトーフは彼の病氣を何んと呼ぶのか知らなかつた。それは『メンシエヴイズム』といふ病氣であつたのだ。革命期にあつては、日和見主義は、先づ第一に、心の動搖及び『考へをまとめることの出來ない』狀態を呈する。

メンシエヴイキが公然と後悔を始めて、ソヴイエットの政策を批判してゐる間に、私はロシア新聞ばかりでなく、ドイツの新聞並に後にはローザ・ルクセンブルグが主筆であるポーランドの雜誌

を通じて、ソヴイエット政策を擁護した。一九〇五年の革命の方法と歷史とに對するこの鬪爭から、最初は『革命のロシア』と題されたが、後には『一九〇五年』と題されて諸國語に飜譯された私の著書が現れたのである。十月革命後に於ては、この著書は單にロシア內に於てのみならず、西歐諸國に於ても、共產黨の一つの公認教科書となつた。たゞレーニンの死後、私に對する組織的反對運動が開始されてから、この、私の一九〇五年に關する著述は批難の的となつたのである。最初攻擊は四五の小さな點についてなされた氣まぐれ的の批評に過ぎなかつたが、徐々に非難の聲は增して而かも公然となつて行つた。遂にはそれは、批判それ自身の缺點を蔽ひ隱さねばならぬ必要から非常に騷々しいものとなつた。かくて、一九〇五年の革命に於けるレーニンの政策とトロツキーの政策との鬪爭と言ふ傳說が、揑造されてしまつたのである。

一九〇五年の革命は、ロシアの生活、黨の生活並に私自身の生活の上に一段階を造つたものである。それは熟達への段階であつた。私のニコラエフに於ける最初の革命運動は、寧ろ盲目的に行はれた地方的活動に過ぎなかつた。この經驗は或痕跡を殘した。その後に於ける私の一生を通じて、ニコラエフに於ける如くに、普通の勞働者と密接な交りに至つたことはなかつたのである。當時私は未だ『有名』でなかつた。そして私と普通の勞働者との間に挾まる何にものも無かつた。ロシア・プロレタリアートの主要形態が、その時を以て、私の意識の上に永久的印象を與へた。それに續く幾年かを通じて、私はかくの如き型の勞働者に接することは寧ろ稀となつた。監獄に於て私は革命教育をその初步から習ひ直さなければならなかつた。監獄に於ける二年半と、シベリア流刑の二年

とが、私に革命的人生觀に對する理論的基礎を與へた。私の最初の海外生活は、政治的教育を意味した。知名のマルクス主義革命家の指導の下に、廣い歴史的視野と國際的關聯に於て事物を理解する方法を、私は學んだのだ。海外滯在の終りに近づいて、私は、ボリシエヴイキ及びメンシエヴイキの二つの主なる團體から自らを分離させた。そして一九〇五年の二月にロシアに歸つた。他の亡命者たちは十月か十一月まで歸つて來なかつた。ロシアに在る同志からは、私が學びうる何にものもなかつた。それと反對に、私こそが彼等の教師たる立場に立たなければならなかつた。暴風的時代の變動は急速に展開されてゐた。部署につくに一刻の猶豫もならなかつた。宣傳文書の原稿のインキが乾かぬうちに、それは印刷に廻はされなければならぬ始末だつた。監獄や配所で習得した理論的基礎と、亡命中に學んだ政治的方法とが、今や始めて、戰爭の實際的の役に立つに至つたのである。私は確信を持つてゐた。私は事變の內容を理解した——尠くとも理解してゐると自信してゐた。私はそれ等が勞働者の上に及ぼすであらう影響を見てゐた。そして來らんとする日の光景をも豫想した。二月から十月までは、私の仕事は主として文筆的であつた。十月になつて私は、老大なる渦の中に自ら飛込んだのであつた。それは、個人的意味に於ては、私の力の最大の試驗であつた。決斷は砲火の下に行はれなければならなかつたのだ。それ等の決斷が明白に現はれてくることを私自ら認めざるを得なかつた。私はそれ等に對して、他人が如何なる考へを持つであらうかを考慮する餘暇はなかつた。又私が相談しうる人もなかつた。凡ては大急ぎで爲されなければならなかつた。後日に至つて私は、その當時マルトーフ（メンシエヴイキ間の最大の智者）が屢々不意を打

たれて、混亂に陷つてゐたことを思ひ出しては、寧ろ不思議に驚くほどである。自己批判の時間などは無かつた。私は、教へて學ぶことを止めた譯ではなかつたが、既に私の徒弟時代は過去つたものと自覺せざるを得なかつたのである。勿論、私は一生涯學ばんと欲する慾心は、少しも減じないのであるが、その後に於ける私の修學は、生徒が學ぶのではなくして、教師が自ら學ぶ類のものであつたのだ。私が二度目に逮捕された時は二十六歳であつた。私の成人した證據はドイツチエによつて與へられた。獄中に於て彼は私を『若者』と呼ぶことを止めて、以後は私を呼ぶに全名稱を以てすることを嚴かに宣告したのである。

前にも述べた『影繪』と題する禁止本で、ルナチヤルスキーは、第一革命の指導者の演じた役割について、次のやうな評價をしてゐる——

『ペテルスブルグの勞働者間に於ける彼（トロツキー）の評判は、彼が逮捕された頃には非常なものだつたし、又法廷に於ける彼の頗る效果的な、そして勇敢な行動によつて、それは益々高まるばかりだつた。トロツキーは、一九〇五年から六年へかけての凡ての社會民主黨指導者の中で、彼の若年にも拘らず、最も準備されたるところの第一人者として、自らを現はしたと謂はなければなるまい。そして彼は、前にもいふ通り、レーニンをでさへも掣肘してゐたところの、亡命者間の狹い見解から最も解放されてゐたのである。彼は何人よりも明かに鬪爭の情勢を理解してゐた。彼は革命の裡から自らの名聲を最も多くかち得た男であつた。マルトーフも、レーニンも到底及ばなかつた。プレハーノフは、彼の半自由主義的傾向のために、却つて自らの地位を落した。然るにトロツ

キーのみは、その時以來、最前線に立つたのである。』

一九二三年に書れたこれ等の文句は、今日ルナチャルスキーがその反對のことを非常に『效果的』に又『勇敢』に書いてゐないところを見ると、益々以て意味が深いわけである。

如何なる大事業も直覺力――理論或ひは實驗を通じて發達するものではあらうが、兎に角、個人の本性に內在するところの無意識的の感覺――なしでは不可能である。如何なる學理的研究も亦日常的實驗も、情勢を感知し、全體を評價し、將來を豫想する政治的識見に代りうるものではない。この天禀の性質は急變――革命の情勢――に應じて決定的主役を勤める。一九〇五年の事變は、以上の如き革命的直覺を私に發揮せしめたものと思ふ。そしてその後の生活においてその確乎たる支持と自信を得せしめたのだ。なほ序に一言しておきたいことは、私の犯した誤謬に重大なるものがあるにしても、それ等は凡て根本的若くは戰略的のものではなくして、寧ろ組織とか政策とかの派生的問題に關してのことであつたと私は確信する。正直に觀て私は、政治的狀勢の評價や革命的豫想に於て重大なる誤算をしたとは自ら思ひ得ないのである。

ロシアの生活にとつては、一九〇五年の革命は、一九一七年の革命に對する下稽古であつた。私の個人的生活に於ても亦同樣なことが云へる。私が一九一七年の革命に絕對的確信と決意とを以て參加し得た原因は、それが單に、一九〇五年十二月三日のペテルスブルグ・ソヴイエットの××によつて妨害された革命的活動の連續に過ぎず、又その發展であるに過ぎなかつたからである。

この檢擧は吾々が所謂財政宣言を發表した翌日行はれた。この宣言はツアー政府の財政的破滅の

不可避なることを告げ、ロマノーフ家の負債は、勝利國によつて認められぬであらうことを警告したものであつた。『××××が國民の信賴を博した例はない。』――勞働者代表ソヴイエットは聲明した――『而してその××は國民によつて與へられたものでは決してない。それ故に吾々は、××××が全國民に對して公然戰を遂行する此の時に際して、かゝる負債の償却を許可せざることを決議す。』

巴里の株式取引所は、それから數ヶ月後、七十五萬フランの新借款をツアー政府になすことによつて、吾等の宣言に答へたわけである。自由主義新聞も亦反動新聞も、ツアーの財政と歐洲の銀行に對する吾々の威脅を嘲笑を以て迎へた。その後該宣言は都合よく忘れられた如くであつたが、それ自らは遂に現實となつた。過去の歷史によつて準備されたツアーリズムの財政的崩壞は、××的失敗と合致した。そして後に、革命の勝利に續いて、一九一八年二月十日の人民委員會の布告によつて、ツアーの負債は消滅したのである。該布告は今日尙ほ有效である。十月革命が凡ゆる義務を否認すると思ふことは誤まつてゐる。それは、自らの義務は十分に認める。それ自らが課したところの一九〇五年十二月二日の義務は、一九一八年二月十日に果してゐるのである。××は、ツアー政府の債權者たちに向つて、『諸君、警告は十分前に與へてありますよ。』と云ひうるのである。

この點に於ても亦、一九〇五年は一九一七年に對する一つの準備であつたのだ。

第十五章　裁判・流刑・脱走

二度目の牢獄期が始つた。それは最初のよりもずつと樂だつた。また、周圍の狀況も、八年前にくらべたら、極めて凌ぎ易かつた。

私はしばらくの間『クレステイ』監獄に居つた。それからピーター・ポール要塞に、そして最後には假留置場に居つた。吾々がシベリアへ送られる前に吾々は移動監獄に移された。

前後、私は十五ヶ月の間監獄に居つた。どこの監獄にも、それ〴〵從はねばならぬ風習があつた。しかし、その風習をくだ〳〵しく話して見たところで始らない。要するに違つてこそ居れ、どの監獄もすべて同じことだから。再び、私は科學や文學の、組織的な研究の時期に入つた。私は地代の理論とロシアに於ける社會關係の歷史を勉强した。地代に關する大著述は、まだ未完成のものではあつたが、十月革命直後に失つてしまつた。私にとつて、これは共濟組合制度に關する私の著述の損失に次ぐべき、いたましい損害であつた。ロシアの社會史に關する私の研究は『革命の結果とその豫想』といふ論文にまとまつた。この論文はその當時にあつては、永久革命の理論を實證する最も完全な記述となつてゐる。私達が假留置場へ移された後、辯護士の面會が許された。第一國會は、政治生活の刺戟をもたらした。新聞は再び大膽になつた。マルクシストの出版事業は再び活氣

を呈した。新事情は戰鬪的、政治的な著述の復活を可能にした。私は監獄で大いに書いた。辯護士がいつも折鞄に入れて私の原稿を持出してくれた。『政治に於けるピーター・ストルーヴェ』と題する私のパンフレットは此時期のものである。監獄の構內散步までが、うるさい義務に見えるほど、私は一心不亂になつて勉强した。自由主義反對の、このパンフレットは、もと〳〵、日和見主義者側からの、批判に對する駁論として、モスコウの十二月××××やペテルスブルグ・ソヴエートやそれから革命的政策一般を擁護したものである。ポリシエヴイキ機關紙はこのパンフレットを、思ひ切り友情的な態度で迎へてくれ、メンシエヴイキの機關紙は默殺した。パンフレットは、數週間內に幾萬部を賣りつくした。

私と一緒に投獄されたデイ・シュヴエルチコフは、この入獄期を『革命の黎明に』といふ書物の中に書いてゐる。彼は書いた。――

『ひどい壓迫の下に勉强してゐたエル・デイ・トロツキーは、その著述の一部を印刷へ廻した。「ロシアと革命」といふこの著述の中で、トロツキーは、ロシアに始つてゐる革命は、社會主義制度が實現されるまでは歇まない、といふ考へを始めて*はつきりと提出した……』

『彼のこの「永久革命」なる理論は餘り歡迎されなかつたが、彼は斷乎として自己の立場を保持し、その頃すでに彼は世界の情勢の裡に、ブルジョア資本家經濟崩壞の諸徵候と、××××××が比較的近いことを見拔いてゐたのである……』

*『始めて』――この言葉は正確ではない。――エル・デイ・トロツキー。

シュヴエルチコフはつゞける。

『トロツキーの監房は間もなく一種の書齋と變つた。彼はいやしくも注意する價値のあるあらゆる新刊書を供給され、その全部を讀破し、朝から夜おそくまで終日文獻上の研究に耽つてゐた。『素的だなあ。』と彼はいつも私に云つた。『私は坐つて書物を書いてゐる。逮捕されてるやうな氣はてんでしないよ。專制政治治下のロシアの情勢で、これはちよつとめづらしい問題ぢやないかね。』

氣晴しとして、私は歐洲の古典を讀んだ。監房寢床に横りながら、私は美食家が上等の酒を啜つたり、良い葉卷の芳しい煙を吸込んだりするのと同じやうな生理的歡喜にひたりながら、それらの書物に耽つた。それは私にとつて最も好ましい時であつた。私の古典研究の證跡は、警句や引用の形に於て、當時の私の政治上のすべての著書の上に明かである。私が本當にフランスの原語でフランスの小說界の『お歷々』と知合になつたのは、その時始めてゞあつた。說話術は元來フランス人の所有するところである。私はドイツ語を、殊に科學上の術語については、多分いくらかフランス語よりもよく知つてゐるのだが、フランスの小說はドイツ語よりもたやすく讀むことが出來るのである。今日にいたるまで私はフランスの小說に對する愛を保つて來た。內亂期の汽車の中でさへ、私は最新刊書を讀む暇を見出したのであつた。

いろ〳〵考へ合せてみれば、私は獄中生活に就て、不平を言へる義理もないやうである。私にとつては一つのよい學校であつた。私はピークー・ポール要塞のびつしり閉切つた監房を出るとき、多少未練な氣味があつた。そこは至極靜かであり、無事であり、又知的な仕事に從ふのには全く申

分がなかつたのである。これに反して假留置場は人間と騷音とに滿ちてゐた。その留置場に繫がれてゐた者で、死刑を宣告されたものも少なくなかつた。虛無黨員の行爲や、所謂××による『××』が全國を風靡してゐたのであつた。監獄制度は第一國會のお蔭で非常に自由であつた。監房には日中は錠をかけなかつたし、私達は打連れて散步することが出來た。幾時間もぶつ續けに蛙飛（人の背を飛越える遊戲）をして有頂天になつたものだ。死刑を宣告された者も私達と同じ樣に跳びこえたり、彼等の背をこちらへ向けたりした。私の妻は一週に二度私に會ひにやつて來た。番人は私達が手紙や原稿をやり取りするのを見逃して呉れた。それらの役人の一人である中年の男は、特に吾々に對して好意を持つてゐた。彼が求めるまゝに私は一册の私の書物と、獻題の書いてある私の寫眞とを贈つた。『私の娘はみんな大學生でな。』と彼は私を不思議さうにながめながら嬉しさうに囁いた。後年、ソヴイエットの治下で彼にめぐり逢ひ、あの飢饉時代に出來るだけのことをしてやつた。

パルヴスと老ドイツチエが一緒に監獄の庭を步いてゐた。私も時々彼等に加はつた。監獄の賄所での吾々三人が撮つた寫眞がある。根氣のよいドイツチエは吾々のために大仕掛な脫獄を計畫してゐた。パルヴスをわけなく口說き落し、それから私にも仲間に這入れとすゝめた。しかし私は目前の裁判が政治的に重要なものであることに心を惹かれたので、それをことわつた。しかし非常に多くの人々がこの計畫に加つた。彼等が陰謀をやつてゐた監獄の圖書室で看守の一人が一組の破獄道具を發見した。監獄の當局者はこの事件を有耶無耶の中に葬り去つた。祕密警察が監獄制度の變革を

遂行せんがために、そこへその道具を置いておいた疑ひがあつたからである。で、結局、ドイツチェは彼の第四回目の脱走をこの監獄ではなくしてシベリアでやることゝなつた。

黨の分派的軋轢は十二月の敗北の後いよ〳〵激しくなつた。高壓的の議會の解散はあらゆる××の問題を再び惹起した。私はこの諸問題を戰術に關する或るパンフレットの題目とした。そのパンフレットをレーニンがボリシエヴイキ出版所から出した。メンシエヴイキはすでに全戰線にわたつて退却してゐた。然しながら監獄に於ては分派的關係はまだ外の世界にみるほど、尖鋭化した段階には達してゐなかつたし、私達はセント・ペテルスブルグ・ソヴイエットのことを取扱つた共同著述を出版することが出來、メンシエヴイキの者も、やはり、執筆者となつてゐた。

勞働者代表ソヴイエットの公判はストリピンの軍法會議の初期の一九〇六年九月十九日に開かれた。裁判所の庭や附近の通路は化して××××××となつた。セント・ペテルスブルグの全警察が動員された。しかし、公判そのものは幾分自由に行はれた。反動政府は、ウキツテの『自由主義』と、××の取扱ひ方の弱さを指摘して、ウキツテをさつさと罷免してしまつた。約四百人の證人が召喚され、二百人以上の證人が出廷して證據を提出した。勞働者、製造家、祕密警察員、技師、召使、市民、新聞記者、郵便局員、警察署長、大學豫科の學生、市會議員、門番、上院議員、無賴漢、代議士、教授、兵士――かうしたすべての階級の人々が、公判の期間中、出廷人名簿に入り、裁判官、檢事對被告側の辯護人、被告――特に後者――の十字砲火の下に一行、一句づゝ勞働者ソヴイエットの行動は再現した。被告は釋明をやつた。私は××に於て××××の重要なることを說

いた。そのために主要な事實が擧つてしまつた。それから、一九〇五年の秋にユダヤ人虐殺文書を撒布するために警保局内に印刷機を据付けた上院議員のロプヒンを證人席に喚んでくれといふ。私達の要求を裁判官が拒んだ時、私達は監獄へつれ戻せと裁判所へ强要して、その公判を中止させてしまつた。辯護士、證人、傍聽人もみんな私達のあとから法廷を出てしまつた。判事と檢事だけが殘つた。私達の缺席のまま判決が申渡された。この一ヶ月續いた無類の公判の速記報告はまだ公にされない。今日にいたるまでそのありかさへ見つかつてゐないやうである。私は『一九〇五年』と題する私の著書の中で、この公判についての最も重要な事柄を述べておいた。

私の父母はこの公判に出席してゐた。兩親の思想や感情はばら〳〵に分れてしまつてゐた。シュヴイゴヴスキイの庭園に住んでゐた私のニコラエフ時代とちがつて、今度のこの私の行爲を子供の馬鹿な振舞ひとして水に流すわけにはゆかなかつた。私は新聞の主筆であり、ソヴイエットの議長であり著述家としての名聲があつた。老夫婦はすべてかうした印象を受けてゐた。母は私についてのもつと多くのお世辭の言葉を聞かうとして、辯護士たちと話したいと思つた。私が話してゐるうち、母にはその話はほとんどわからなかつたのだけれども、母はだまつて泣いてゐた。母は二十人の辯護士が私と握手するために近寄つて來た時にはもつとひどく泣いた。その前に、辯護士の一人が、私の演說のために一般の人々が昂奮してゐるからとて、一寸退廷してくれるやうにと要求した。この辯護士はエイ・ゼット・ザルドニイであり、ケレンスキイ内閣時代には司法大臣となつて、私を叛逆罪の咎で投獄した男である。しかしそれは十年後におこつたことだ。

公判の間中老人たちは私を幸福さうに眺めてゐた。母は、私が放免されるだけではなく、何かすぐれた賞讃の辭でもあたへられるだらうと信じてゐた。私は母に向つて、私がひどい勞役に服するやうにと宣告されると覺悟してゐなければいけない、と說き伏せようとつとめた。すべてかうしたことにいくらか驚き且つは當惑して、母はどうしてそんなことがあり得ようか知りたいものだと私の方から辯護士の方を向き直ほつた。

父は蒼ざめて居り、だまりこくつてゐた。幸福な氣持と心配な氣持がごつちやになつてゐた。

私達は一切の公民權を奪はれて、强制的な流刑地居住を宣告された。しかしこれは比較的寬大な處罰であつた。私達は苦役を豫期してゐた。しかし、强制的な流刑地居住は最初私が宣告をうけた行政上の流刑とは全く別物である。

强制追放は無期刑であつて、脫走を企てるごとに三年間の苦役を附加の刑罰として課せられるのである。この刑罰と共に笞で五十五回鞭打つことは數年前に廢止された。

一九〇七年一月三日私は妻に書いて送つた。『私が護送監獄に來てから約二三時間になる。私は告白する。留置場に別れるにあたつて多少心を動かさざるを得なかつた。私に勉强のあらゆる機會をあたへてくれたそのごく小さな寢室に、私は非常によく慣れてゐたのだ。護送監獄では私達はみんな一緒の監房へと投げこまれるのを知つてゐる——これ以上うるさいことがあらうか？　そしてその後では——いつもの汚物、雜音、追放の旅の馬鹿げた混亂。私達が目的地に行きつくまでにはどの位かゝるかを誰が知つてゐよう？　また、いつ歸れるかを誰が知つてゐよう。若しも第四百六

十二號の獄房に居つた時のやうに讀書したり、著述に從つたり、人を待つたりして居ることが出來たらよかつたのに。』

私達は、突然、何等の通知もなしに、こゝへつれて來られた。應接室で獄衣に着換へるやうにと命ぜられた。私達はみんな小學校兒童のやうな好奇心で着換へた。お互ひに灰色のヅボン、灰色の上衣を着、灰色の帽子をかむつてゐるのを見るのは面白いことだつた。しかしながら、これらの獄衣の背のところには第一流との評判のあるダイヤモンドは一つもついてゐない。私達は私物の肌着を着、長靴を穿くことを許された。私達は新しい着物を着、非常に昂奮した群をなして、獄房へと歸つた。』

私が、私物の長靴を履いてゐるといふことは、私にとつて極めて重大なことであつた。なぜならその一足の靴底に、私は立派な旅行免狀を隱してゐたし、その高い踵には金貨を隱してゐたから。

吾々ははるか北極圈にあるオブドルスクの村へ送られることになつてゐた。オブドルスクから鐵道線路までの距離は千五百ヴェルスタ（一ヴェルスタは我が國の約十町）であり、最寄りの電信局までは八百露里あつた。郵便物は二週間に一度やつて來た。春と秋、路の惡い時分には、六週間も八週間も、全くやつて來ない。

旅行中私達を護衞するために非常手段が講ぜられた。セント・ペテルスブルグの護衞兵はあてにならないものとされてゐた。また、實際、護衞中の一軍曹は、囚人列車の中でも私達に向つて拔劍して最近の革命詩を朗讀したのである。隣の車には祕密警察の一分隊が乘込んでゐて、列車が止ま

る毎に私達の客車を取卷いた。同時に、監獄の役人達は私達を極く鄭重に待遇した。革命と反革命とは今尙均衡を保つてゐて、どちらが勝つかは誰にもわからなかつた。最初に護衛士官は、法律の規定に從つて、私達に手錠を嵌めてはならないといふ上官の命令を、私達に見せた。

旅行中、一月の十一日に私は妻に書き送つた。

『若しも士官が思ひやりがあり、丁寧だとするならば、下級の兵士たちはそれ以上思ひやりがあり、丁寧である。彼等のほとんど全部は、吾々の裁判の記錄を讀んだ。そして彼等は非常に同情して吾々を取扱つた。兵士たちは自分たちは一たいどういふ人を引率して、どこへつれて行くのかを、最後の瞬間になるまで知らなかつた。兵卒達をモスコウからセント・ペテルスブルグへ突然移送するやうな豫防手段から考へて、彼等兵卒は、自分達は死刑を宣告された囚人をシュルッセルブルグへつれて行くのだと思ひ込んだ。

護送監獄の應接室で護衛兵等が非常に激昂しており、彼等自身なにかから罪人とでも感じてゐるかのやうに、へんに私達に愛想よくしてゐるやうなのに私は氣がついた。汽車の中で始めて私にはその理由がわかつた。彼等は、自分達の委託物がたゞ流刑に處せられたにすぎない勞働者代表であることがわかると、ひどく喜んだ。一種の上級護衛として行動してゐた祕密警察は、決して吾々の車へはその姿を現さなかつた。彼等は外で護衛をし、停車場で列車を取捲いて、外側のドーアのところへ立つた。しかし、彼等が特別に警戒してゐたものは護衛兵であつたらしい。』

道中からの吾々の手紙は護衛兵によつて、こつそり、郵送された。

鐵道で、私達はチュウメンまで送られた。そこから馬で行つた。十四人の囚人を護送するのに、大尉一人と、警察高等官一人と、警部一人の外に五十二人の兵士が居つた。一行には約五十臺の橇があつた。チュウメンからトボルスクを經て行く道はオビ河によつた。私は妻に書いた。

『毎日私達は九十露里から百露里づゝ、極北の方へと進んで來た。それはほとんど一緯度にあたる。かうしてつゞけざまな前進によつて——この際文化と云ふことができるならば——文化減退は著しく明白になつて來る。毎日私達は寒冷と野蠻との王國へと、一緯度づゝ下りて行く。』

チブスにすつかり侵かされてゐる地方を通過した後、つまり吾々の旅の第三十三日目、即ち二月の十二日に我々はベレゾヴへ到着した。こゝは嘗てピーター帝の片腕の人物であつたメンシコヴ公が流刑されてゐたところである。ベレゾヴで二日間の滯在が發表された。オブドルスクへ行着くにはまだ五百露里行かなければならない。私達は全く自由に歩き廻つた。護衛兵は私達が脫走を企てるものとは懸念しなかつた。引返へす唯一の道としては、電信線に沿つたオビ河の傍を通る道しかなかつた。逃亡者はすべて捕縛されるにきまつてゐた。ベレゾヴに住んでゐる人のうちに、ロシュコヴスキイと云ふ陸地測量技師があつた。私はこの人と脫走の問題について話した。彼は教へてくれた。ソスヴア河に沿うてウラル山脈の方へ眞直ぐ西へ、鹿によつて鑛山植民地まで行き、ボクスロヴイスキイで狹軌の鐵道に乘り、それからペルム線への連絡點であるクシュヴアへ出られるかも知れない。それからペルム、ヴイアトカ、ヴログダア、セント・ペテルスブルグ、ヘルシンフオルス……

しかしながら、ソスヴァ河沿ひには道はなかつた。ベレゾヴの彼方の土地は全く未開の地である。幾千露里の間、警察とてはなく、たゞところどころに、オスチヤアク人の小屋があるばかりで、ロシアの植民地とてはたゞの一つもなかつた。電信の影もなかつた。道は專ら鹿による旅行に限られてゐて、全道には馬は一匹もゐない。警察に追ひかけらるれ心配はないが、その代り曠野で道に迷ひ、雪の中で埋れて死んでしまふ危險があつた。しかも時は二月、吹雪の月であつた。

老革命家であり吾々囚人一行の一員であるフアイト博士が、もう數日間ベレゾヴにとゞまることが出來るやうに、どうしたら坐骨神經痛の眞似をすることが出來るかを敎へてくれた。私はうまうまとこの策略を控目にやつてのけた。御存じのやうに坐骨神經痛といふ奴は、確めることが出來ない病氣である。私は病院へ入れられた。病院の制度は私に何等の束縛も加へなかつた。『氣分がよい』時には數時間もぶつ通しに出掛ける事が出來た。醫者も歩く方が良いと奬めた。前にも云つた通り、一年のかういふ季節に、誰だつて脫走の企てがあらうとは思つてやしなかつた。

私は決心しなければならなかつた。私は眞直ぐに西の方ウラル山脈に向つて突切る道に決めた。ロシュコヴスキイは『山羊の脚』と云ふ仇名を持つた百姓の忠告を聞いた。この無愛想な賢い男は至極あつさりと脫走の計畫を立てゝ呉れた。その後、彼の役割が發見された時彼はひどく罰せられた。十月革命の後、『山羊の脚』はしばらくの間、彼が十年前に脫走を助けた男は私であることを知らなかつた。やつと一九二三年になつて彼はモスコウの私のところへやつて來た。私達二人の會合はごく親しいものであつた。彼は赤衞軍の禮裝用の正服を與へられ、劇場へ案内され、蓄音器その

他のものゝ贈物を贈られた。まもなくこの老人は極北の鄕里で死んだ。

ベレゾヴからの旅は鹿によらなければならなかつた。かう云ふ季節の旅に、相當危險を冒してくれる案内人を見つけるのは困難なことであつた。『山羊の脚』は一人のジュリアン人（北東ロシアに住むフイン族の人民）を見つけた。すべてのジュリアン人がさうであるやうに、このジュリアン人も賢くて經驗のある男であつた。

『その男は酒飲みかね？』

『ひどい飲助で、だが、奴あロシア語とジュリアン語とをうまく話しまさあ、それからかなり、毛色の變つた二つのオスティアク方言だつて話しまさあ、あの男のやうな案内人たらほかにありませんや。——そりや、拔目がねえんですからなあ——奴ときたら。』

後になつて『山羊の脚』を裏切つたのは、この拔目のない男であつた。しかし彼は首尾よく私を逃がして呉れた。*

*私の『一九〇五年』なる著書では、脫走のこの部分はわざと違つたやうに述べてある。當時にあつては眞實のことを語れば、私達の連累者の手掛りをツアーの警察にあたへることになつてゐたのである。今日でも、私は、スターリンが吾々の連累者の内一人だつて起訴しないやうにと望むものである。殊に彼等の罪狀は時效にかゝつてゐることではあらうし、私が後で說くやうにレーニン自身が私の脫走の最後の段階を助けて呉れたのであるから。トロツキー。

出發は日曜日の眞夜中と定められた。その日役人達は素人芝居をしてゐた。私は兵營に顔を出し

た。兵營は即席芝居小屋の役目をしてゐた。私が地方の警察署長に會つた時、私は彼に大へん體の工合がよいので間もなくオブドルスクへ行くことが出來ると話しておいた。これは策略であつた。しかも必要な策略であつた。

寺院の鐘が十二時を打つと、私はこつそりと『山羊の脚』の庭へ忍び込んだ。橇が待つてゐた。私はその底に長くなつて、用意の皮外套の上に横つた。『山羊の脚』は私の上に凍つた枯草を擴げ繩で縛つた。私達は出發した。凍つた枯草が溶けて、冷たい水が私の顏の上にポタリポタリと落ちた。數露里走ると、私達は立止つた。『山羊の脚』は枯草を解き、私は外へ出た。それから彼が口笛を吹いた。

數人の男が彼に答へた。――ところが、しまつた！　全くまぎれもなく醉つぱらつた聲だ。そのジュリアン人は醉つてゐた。そして彼は仲間をつれて來た。こいつは拙い出發だ。だが、のつぴきならぬ場合である。私は私の小荷物と一緒に輕い鹿橇へと移された。私は二枚の毛皮の外套を着、――一枚のには毛が內側について居り、もう一枚のには毛が外側についてゐた――それから毛皮の靴下、毛皮の長靴、二本線の入つた毛皮の帽子、そして毛皮の手袋――つまりオステイアク人の完全な冬の旅裝であつた。鞄には酒を數壜入れてゐた。それは雪の曠野に於ける最上の交換通貨であつた。

シュヴエルチコフはその回想錄に述べてゐる。

『ベレゾヴの火見櫓から尠くとも周圍一露里の間、雪の白い曠野の上に、町に出入するあらゆるも

のの動きが見えるのであつた。警察が當直の消防夫に、その夜、町から誰か逃出したのを見なかつたかどうかと尋ねるだらうと考へるのは、全く合理的なことである。かうした假定の下に、ロシュゴヴスキイは、その地方の或人と手筈をきめて屠殺した犢をトボルスク街道へ運び出した。私達が豫期した如くこの行動はうま〳〵と見付かつて、二日後トロツキイ脫走のことが發見された時には、警察はこの犢を探し求めて狂奔し、かうしてもう二日間といふものを徒らに費してしまつたのである。』

もつとも、これは、ずつとあとになつて知つたことである。

吾々はゾスヴアに沿うて進んだ。私の案內人が買つて來た鹿は、數百の鹿の群から撰り拔いたものであつた。旅の初め、酒に醉つた馭者はしば〳〵眠りに陷つた。すると鹿は立止つた。こんなことぢや二人にとつて災難がふりかゝるにきまつてゐる。しまひには、馭者は私がつゝいても返事すらしなくなつた。そこで私は彼の帽子を脫がした。彼の髮はすぐ凍つた。すると彼の醉ひはやうやく醒始めた。

吾々はどん〳〵橇をはしらせた。それは、すべて樅の木でおほはれた、動物の足跡がついてゐる、處女雪の荒野を橫切るすばらしい旅であつた。鹿は元氣よく早足を續け、舌を橫の方へ出し、チュ・チュ・チュといふ音をたてゝ、はげしい息づかひをした。道は狹かつた。鹿はお互ひにより添つて進んだ。鹿の足がもつれ合はないのが不思議だつた。飢ゑや疲れを知らない驚くべき動物！　吾々が突然出發する前の二十四時間、彼等は何にも喰べなかつたのである。そして彼等が食にあり

ついだのは更にもう二十四時後のことであつた。馭者の云ふところによると、鹿は今恰度大股に歩るき出したばかりのところだつた。別に骨折りもせず一時間八露里乃至十露里の速さで走つた。餌は見付かつた。丸太に首をつながれたまゝ、鹿は追放された。鹿は雪の下に蘚があることを嗅ぎつけた場所をめがけて、蹄でもつてほとんど自分の耳の頂上に達するほどの深い穴を掘り、腹一杯にたべた。私はかうした動物に對して、飛行家が數百フイートの高さで大洋の上を飛ぶとき、發動機に對して抱くにちがひない氣持と同じ氣持を抱いた。

三匹の鹿のうち先頭の鹿が跛になつた。私達はこれにはひどく面喰つた。その鹿を取換へねばならない。私達はあたりを見廻してオスティアクの部落を探した。部落はお互ひに幾露里も離れて、このあたりにちらばつてゐる。私の案内人はほとんど目に見えない氣配によつても、野宿地を見出すことが出來た。――彼は數露里へだゝつてゐる煙の臭ひをかぐことが出來た。鹿を取換へるのに、たつぷりもう一日かゝつた。その代り、私は幸運にも明方に一つ美しい物を見たのであつた。彼等の持つてゐる數百頭の鹿の群を犬が狩寄せて來ると同時に、三人のオスティアク人が、全速力で鹿を走らせながら、目ざした鹿を投輪でひつかけたのであつた。

私達は再び森を通り、火事で破壞された廣漠たる森林を通り抜けて、雪でおほはれた沼地の上を走りつゞけた。私達は水を得るために雪を煮立たせ、雪の上にすわつて茶を飲んだ。案内人は酒の方がよいと言つた。しかし、私はあまりやりすごさせないやうに氣をつけた。

いつも同じやうであつたけれども、道はたえず變化しており、また、鹿もそのことをよく知つて

ゐた。今度は、私達は樺の森と河との間のうち開けた野原を進んでゐる。凄い道だ。吾々の後ろの方では風が、橇の殘した狹い轍の跡を吹消してゐる。第三の鹿が正路を踏み外して雪の中へ、腹のところまで、それよりももつと深く沈みこみ必死となつて五六回跳びはねる。路へと匐上る。眞中の鹿に突きあたつて、先頭の鹿を路からつきのける。また、或場所では太陽に溫められて道は非常にわるく、そのために前の橇の革紐は二度までも切れ、また止まるたびに橇は道へ凍りついた。橇を再び動くやうにするには、非常な骨折だつた。二回の疾驅で、鹿は疲れたやうに見えた。

しかし今や太陽は沈んで路はすつかり凍てしまひ、走り易くなつた。軟かではあるが、ぼか〳〵しない――馭者の云ふやうに最も『てきぱきした』――路であつた。鹿はほとんど音をたてずに早足で走り、少しも骨折らずに橇を引いて行つた。しまひには、私達は第三の鹿を解いて、後の方へ繋がねばならなかつた。何故ならごくたやすく進むことが出來たので、鹿は跳上り、そのために橇を叩きつける心配があつたから。橇は水晶のやうに澄んだ水の上に浮んだボートのやうに、滑かに靜々と進んで行く。黄昏頃には森は益々、巨大なものに見えて來る。路は見えない。橇が動くのもほとんどわからない。怪しげな木が吾々の方へと突進して來る。皺が横を走り去る。細つそりした樺の木や、雪でおほはれた、古い切株がふつ飛んで行く。すべては神祕で滿されてゐる。チユ・チユ・チュと鹿の單調な息吹が夜の森の靜けさの中に響き渡る。

旅は一週間つゞいた。私達は七百キロメートル旅して、ウラル山脈へと近づきつゝあつた。もはや、度々橇の長い行列に會ふことゝなつた。私は技師であり、トル男爵の極地探險隊員だとかまへ

た。ウラル山脈近くで、私達はまへにこの探險隊に勤めてゐたことがあつてその隊員のことを知つてゐる一人の書記にぶつゝかつた。彼は私を質問攻めにした。幸にしてその男は全然酒が飲めないのではなかつた。私はかねて、まさかの時の用意にそなへてゐた一壜のラム酒の助けをかりて、この窮境を脱しようとつとめた。すべてが見事に運んだ。ウラル山中では或時には私は馬に乘つて旅をした。今度は、私は役人に扮し、管轄區を檢査をしてゐた稅務官と一緒に狹軌鐵道へついた。私がオスティアクの毛皮の上衣を脱いでゐたので、驛の祕密警察も私を別にとがめなかつた。

ウラルの支線に乘つてゐる私の地位はやはり安全なものではなかつた。何故ならすべての『見慣れない人』に注意をしてゐる鐵道線路では、トボルスクからの電報によつて私はすぐ捕縛されるかも知れなかつたから。私は恐る恐る進んで行つた。しかし一日たつてベルム線の氣持のよい車に乘つかると同時に、私は急に裁判事件にでも勝つたやうな氣持がしはじめた。あまり遠くない以前に祕密警察や護衛兵や地方の警察署長のおごそかな儀式に私達が迎へられた。その同じ驛々を、列車は通過して行つた。然し今や私の進路は全く違つた方向に向つて、違つた氣持で旅を續けてゐた。ほとんどガラ空きの車も、最初の數分間は非常に人込みがして、風通しが惡いやうな氣がした。それで私は前方のプラットフォームまで出掛けた。そこには風が吹いてゐた。暗かつた。突然自づと大きな叫び聲が出た——喜悅と自由の叫び聲が。

最寄の一驛で、私は妻に、連絡驛で私を待つてゐるやうにとの電報を打つた。彼女はこの電報を豫期しなかつた——尠くともそんなに早くは。それも無理からぬことだ！ ペレゾヴへ行くのに一

ケ月以上かゝつた。セント・ペテルスブルグの諸新聞紙は、私達が北進する情報を滿載してゐる。情報は今も尙郵送されてゐた。誰も私がオブドルスクへの途上にあるものと考へてゐる。だのに、私は十一日間で完全に歸つて來たのである。たしかに、セントペテルスブルグの近くで私に會はうとは全く信じられないと、妻には思はれたにちがひない。その方が却つてよかつたし、私達の會見は全く思ひがけない工合に行はれた。

そのことをエヌ・デイ・セドーヴアはかういふふうに述べてゐる。

『私が赤ん坊の息子をつれてたつた一人で滯在してゐた、セントペテルスブルグに近いフインランド人の村のテリオキイで、その電報を受取つた時には、私は喜びと興奮とのあまり我を忘れてしまつた。恰度その日、流刑の途上にあるユル・デイの長い手紙を受取つた。その手紙には旅のことを書いた外に、私がオブドルスクへと立つ時には多くの必要品と或書物とを持つてくるやうにと書いてあつた。すると、今度あの人が氣が變つて、何にか不思議な方法で引返し、どこかの汽車の交叉點で私に會ふ用意をさへしてゐるやうに見えた。だが、妙なことには電報には驛名が出てゐない。翌日私はセントペテルスブルグへ行つて鐵道の案内人に聞いて、私はどこまでの切符を買つたらよいか、その驛名を探し出さうとした。しかし私は聞合はせることを恐れた。そしてその驛の名をも知らずに、私は旅に出掛けた。私はヴイアツカまでの切符を買つてその夕方立つた。汽車は謝肉祭週間の御馳走に用ひる、食卓の美味を包んだ小包を持つて、セントペテルブルグから自分の所有地へと歸る地主で、一杯であつた。彼等の話すことゝいへば、揚煎餅、カビヤ、燻製蝶鮫やお酒や、

さうしたものについてであつた。私はさうした話には、もうほとんど我慢がしきれなかつた。私は目前に迫る會合のことで、すつかり昂奮してゐた、と同時に、ひよつとして起るかも知れない事故の心配に惱まされた。……でも、私は會へることを確信してゐた。

私は汽車がサミノ驛につく朝をほとんど待つてゐることが出來なかつた。――私は途上でその列車の名を見つけた。そしていつまでも覺えてゐた。列車が止つた。私達の列車もあの人の乘つて來る列車も。私は停車場の方へ駈出した。誰も居なかつた。私は向ふの列車へ飛込んで、客車を一つづゝ走り拔けた。しかもあの人はそこにも居なかつた。突然私はエル・デイの毛皮のコートが、車の仕切りの中にあるのに氣づいた。だからあの人はこの汽車でやつて來たのだ。しかし、どこへ行つたのだらう。私は客車の外へ飛出した。と、忽ち私を探しに停車場から飛出すエル・デイに私はぶつかつた。あの人は電線が破損してゐるのに腹を立てゝゐた。そしてすぐにその不平を言つてやるのだといつてゐた。私はやつとのことで、そんなことを言はないやうにと、あの人を引止めることが出來た。私に向けて電報を打つた後で、私ではなくて、勿論祕密警察員に會ふことをあの人は覺悟してゐた。しかし、私と一緒でなら、セントペテルスブルグでも辛抱出來るとあの人は考へて、運を天にまかせたのだ。私共は汽車の仕切りに腰を掛けて、一緒に旅をつゞけた。私はエル・デイが車の中や停車場で、大聲で笑つたり、話したりするとき、あの人の自由さや氣樂さに驚かないではゐられませんでした。私はあの人を他の人に見付からないやうに隱さうとした。何故ならあの人には脫走に對する苦役脅威が迫つてゐたから。しかしあの人は誰の目にもつくやうにして、かうし

てゐるのが一番安全だと云つて居た。』

セントペテルスブルグの驛から、吾々は砲兵學校に勤めてゐる親友の許へと眞直ぐに行つた。私は今までこの時のリトケン博士の家族のやうに、吃驚りした人を見たことがない。私はその家の大きな食堂に幽靈のやうに立つてゐた。一方家族の人はみんな息もつかずに私をみつめてゐた。私達がお互ひにキスをした後でも、彼等はまだ自分の眼を信ずることが出來ず、驚きをその顏に現してゐた。たうとう、みんなも、私であることを納得した。今でも私はその時は幸福であつたことを感ずることができる。しかし私はまだ危險を脫してはゐなかつた。このことを私達に思ひ出させたのは博士だつた。ある意味では、危險はやつたばかりのところであつた。ペレソヴの官憲が、既に私の失踪に就て打電してゐることは疑ひを容れない。セントペテルスブルグでは、私がソヴイエットで働いてゐたために、非常に澤山の人々が私を知つてゐる。それで、私は妻と一緒にフインランドへ行くことに決めた。フインランドでは、革命によつて戰ひ取つた諸權利が、セントペテルスブルグよりもはるかに長く行はれてゐたのである。

最も危險な場所はセントペテルスブルグのフインランド線終點驛であつた。汽車の出るまへに、數人の祕密警察員が、乘客を檢査するために吾々の車へと這入つて來た。妻は入口のドーアに面して坐つた。私はどんな危險が、吾々に迫つてゐるかを妻の眼によつて知ることが出來た。一瞬間私達の神經は恐ろしく緊張した。警察は無頓着に吾々をしらべて行つた。祕密警察の腕前はそんなものだつた。

レーニンとマルトーフとはずつとまへにセントペテルスブルグを去つてフインランドに住んでゐた。ストックホルムの大會で實現された二派の合同は、再び決裂しかゝつてゐた。革命の波は依然として引潮だつた。メンシエヴイキは一九〇五年の氣狂ひぢみた行動を放棄してゐた。ボリシエヴイキは何一つ放棄するどころではなく、瀟々として新しい革命の用意をしてゐた。私はレーニンとマルトーフの二人を訪問した。マルトーフは隣り村に住んでゐた。

マルトーフの室は、いつものやうに言ふに言はれぬ程散らかつてゐた。隅には新聞紙が等身の高さに積重ねてあつた。彼と話してゐるうちにマルトーフは、その積重ねの中へ時々潜つて行つては、必要な論文を持つて來た。灰でおほはれた原稿が卓の上においてあつた。決して磨いたことのない鼻眼鏡が、彼のほつそりした鼻の上へ垂下つてゐた。いつものやうにマルトーフは、立派な精細な考へをたくさんにもつてゐた。しかし、彼は何によりも一番重要な考へを持つてゐなかつた。つまり、次に何にをなすべきかを知らなかつたのだ。

レーニンの室はいつものやうに、秩序そのものであつた。レーニンは煙草をのまなかつた。必要な新聞紙には、印をつけて、手許においてあつた。就中、彼の不粋なしかし非凡な顔には、撓まず倦まず時勢を引緊めるあの表情があつた。當時、まだ革命の潮がすつかり引いてしまつたのか、それとも再び滿ちて來る前に一寸淀んでゐるのか、解らなかつたのである。しかしいづれにしても、懷疑論者と戰ひ、理論的に一九〇五年の經驗を檢討し、時流の新轉向、つまり第二革命に對して大衆を教育することは、等しく必要なことであつた。レーニンは私の獄中の著述に贊意を表したが、

私が必要な結論を書かなかつたこと、云ひかへればボリシエヴイキのことを檢討しなかつたことを云つて詰つた。この點に於て、彼の云ふところは正しい。吾々が別れる時、彼は私にヘルシングフオルスの數人の同志の宿所を教へて呉れた。それは私にとつて此上もなく貴重なものとなつた。

レーニンが私に教へて呉れたその同志は、ヘルシングフオルスに近いオグルブユといふ一寸した所で、家族と一緒に落着けるやうに、私を助けて呉れた。しばらくしてレーニンもそこへやつて來た。ヘルシングフオルスの警察署長は實行主義者(アクティヴィスト)であり、フインランドの革命的國家主義者であつた。彼はセントペテルスブルグから、萬一何にか危險な報知があつたら、豫告すると私に約束した。私は妻と、私が入獄中に生れた赤ん坊とをつれて、オグルブユに數週間滯在した。この村に蟄居して私は、『往復』と題する著書の中に旅のことを書き、その原稿料でもつて、私はストックホルム經由で外國へ行つた。妻と息子とはしばらくロシアにとゞまつた。私は國境まで同じく實行主義者である一人の若いフインランドの婦人と一緒に行つた。當時實行主義者は、私達と親密な間柄であつた。然るに一九一七年に彼等は國粋黨員となり、十月革命の强敵となつた。

スカンヂナヴイアの汽船の上で、私はやがて十年間續くべき新たな外國亡命を振出した。

□此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。

□此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。

□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。

□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	三	六	六	六	九	九	一二	一四

昭和十二年八月十日印刷
昭和十二年八月十四日發行

改造文庫 第一部 第百四十九篇

わが生涯（上）

定價五十錢

譯者 青野季吉

發行者 山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 森島金治郎
東京市芝區西應寺町六十一番地

發兌 改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番
一一一二番
一一一三番
一一一四番

（長谷部製本）

森島印刷所印刷
兩友堂

版權所有

改造文庫第一部目錄

國富論（上卷）アダムスミス著 竹内謙二譯 8
國富論（中卷）アダムスミス著 竹内謙二譯 6
國富論（下卷）アダムスミス著 竹内謙二譯 6
人口論（上卷）マルサス著 松本信夫譯 5
人口論（中卷）マルサス著 松本信夫譯 5
人口論（下ノ一）マルサス著 松本信夫譯 5
人口論（下ノ二）マルサス著 松本信夫譯 4
經濟學原理（全三冊）ミル著 荒木光太郎譯（近刊）
社會主義の發展 エンゲルス著 堺利彥譯 1
マルキシズム認識論 デイツゲン著 石川準十郎譯 1
辯證法的唯物觀 デイツゲン著 山川均譯 2
哲學の實果 デイツゲン著 山川均譯 1
神と國家 バクーニン著 本荘可宗譯 1
婦人論 ベーベル著 山川菊榮譯 6
古代社會（上卷） モルガン著 荒畑寒村譯 5
古代社會（下卷） モルガン著 荒畑寒村譯 5
エミール（上卷） ルソー著 内山賢次譯 4
エミール（下卷） ルソー著 内山賢次譯 4
國家論 オッペンハイマー著 廣島定吉譯 2
金融資本論 ヒルファディング著 林要譯 7
日本開化小史 田口卯吉著 2
日本經濟論 田口卯吉著 1
日本經濟學說の要領 經濟的帝國論 藤本誠一著 2
日本商業史 横井時冬著 4
日本工業史 横井時冬著 4
經濟學の實際知識 高橋龜吉著 2
リッケルト論文集 リッケルト著 2
文學論 ハックスレイ著 上田勤譯（近刊）
女工哀史 細井和喜藏著 4
婦人解放論 スチュアート・ミル著（近刊）
社會進化と婦人の地位 山川菊榮譯 2
近代科學と唯物論 エリオット著 山川均譯 4
農村問題 レーニン著 荒川實譯 3
勞働組合論 レーニン著 藤井米藏譯 3
幸德秋水集 幸德秋水著 2
中江兆民集 中江兆民著 2
財產起源論 レヴィンスキー著 貴島克己譯 1
組織論 レーニン著 鈴木厚譯 3
三民主義 孫中山著 金井寬三譯 3
唯一者とその所有 スティルネル著 辻潤譯 6
世事見聞錄 武陽隱士著 本庄榮治郎校訂 4
金融資本論 ヒルファディング著 林要譯 7
封建社會の研究 本庄榮治郎著 2
近世の農村問題 本庄榮治郎著 3
マルクスの歷史、社會及び國家理論（上卷） 石川・別府共譯 6
マルクスの歷史、社會及び國家理論（下卷） 鳥海義谷淵島譯 7
マルキシズム國家觀 アドラー著 山本宗譯 5
マルクス主義經濟學 河上肇著 3
哲學概說 桑木嚴翼著 3

現代哲學思潮 桑木嚴翼著 5
宗教及び信仰の起源 クノー著 玉城肇譯 3
カントの平和論 朝永三十郎著 2
近代資本主義發達史論（上） ホブソン著 住谷阪本松藤譯 4
近代資本主義發達史論（下） ホブソン著 住谷阪本松藤譯 5
カウツキー夫妻への手紙 ルクセンブルグ著 淺野正一譯 4
レーニンの唯物辯證法 デボーリン著 佐多忠隆譯 2
天才論 ロンブロオゾオ著 辻譯 5
佛蘭西革命史（上） クロポトキン著 佐藤三郎譯 5
佛蘭西革命史（下） クロポトキン著 佐藤三郎譯 5
無政府主義と社會主義 プレハノフ著 百瀨二郎譯 2
財產進化論 ラフワルグ著 荒畑寒村譯 2
帝國主義論 レーニン著 岡田宗司譯 3
帝國主義論 ホブソン著 石濱新二譯 5
勞働價値說の擁護 ヒルファディング著 堀本三吉譯 2
經濟地理概論 ブレス・リーグ編 菊川忠雄譯 3
帝國主義發達史論 ブレス・リーグ編 内田佐久郎譯 3
ブレブス經濟學 ブレブス・リーグ編 田所輝明譯 3
心理學概論 ブレス・リーグ編 小宮義孝譯 3
社會意識學概論 ボグダーノフ著 林房雄譯 4
經濟科學概論 ボグダーノフ著 林・木村共譯 5
歐洲文學發達史 ブリーチエ著 外村史郎譯 6
我等の對立 ブレハーノフ著 竹尾弐譯 2
英國勞働運動史 ブレス・リーグ編 稲岡三郎譯 3
マルキシズム方法論 アドラー著 福田次郎譯 4
倫理と唯物史觀 カウツキー著 堀利彥譯 2
社會進化と生物進化 荒畑寒村譯 2
原始財產 ラヴレー著 長野敬一郎譯 6
建築と繪畫 ラスキン著 内田佐久郎譯 5
藝術とは何ぞや トルストイ著 木村毅譯 3
プロレタリア藝術論 コーガン教授著 昇曙夢譯 3
藝術哲學 植田壽藏著（近刊）
マルクス＝エンゲルス傳 リヤザノフ著 堀利彥譯（近刊）
近代の戀愛觀 厨川白村著 3
象牙の塔を出て、苦悶の象徵 厨川白村著 4
十字街頭を往く 厨川白村著 3
近代文學十講 厨川白村著 5
英詩選釋 厨川白村著 4
ヘーゲル精神哲學概要（上） フイシエル著 田村實譯 6
ヘーゲル精神哲學概要（下） フイシエル著 田村實譯 6
ドイツ史 ヌーリング著 奥原佑譯 5
宗教科學鬪爭史 ドレーパー著 荒畑勝三譯 6
中產階級史 ルイス・コリー著 宮田保郎譯 4
社會主義への道 ブハーリン著 大橋積譯 2
社會フアシズム論 ラピンスキー著 田中勝太郎譯 3
阿片溺愛者の告白 クインシイ著 辻潤譯 2
第一インタナショナル史（第一部） ステークロフ著 内垣藤三譯 6
第一インタナショナル史（第二部） ステークロフ著 内垣藤三譯 4

經濟學概史　佐谷俊治著　5
基礎學の理念　ミリウチン著　3
ソヴイエートロシアの農業政策　田中精太郎譯　5
レーニンの基本主義　スターリン著　磯野謙孝譯　3
エルフ綱領解說　カウツキー著　三輪壽壯譯　3
マルクス經濟學大綱　ボルハルト著　田中九一譯　2
キリスト教の本質　フォイエルバハ著　桑田悟郎譯　5
唯物論史入門　プレハーノフ著　藤井米藏譯　5
日本美術の知識（上卷）　中村亮平著　5
日本美術の知識（下卷）　中村亮平著　6
泰西美術の知識　中村亮平著　6
民族移動史　ハッドン著　小山榮三譯　2
東洋美術の知識（上卷）　中村亮平著　6
東洋美術の知識（下卷）　中村亮平著　5
三民主義續篇　孫中山著　金井寛三譯　4
婚姻と離婚　ウエスターマルク著　宵山道夫譯　3
何をなすべきか　レーニン著　山内房吉譯　4
人生論　トルストイ著　柳田泉譯　4

文藝評論集　小林秀雄著　3
ドストエーフスキイ論　ジイド著　秋田滋譯　5
民主社會史（一）　メーリング著　小堀甚二譯（刊近）
民主社會史（二）　メーリング著　塚本三吉譯（刊近）
民主社會史（三）　メーリング著　塚本三吉譯（刊近）
民主社會史（四）　メーリング著　塚本三吉譯　7
普佛戰爭史　エンゲルス著　荒畑勝三譯　6
混沌　佐藤信淵著　伊豆公夫校註　3
同秘錄
マルコポーロ旅行記　マルコポーロ著　深瀨正雄譯　7
財政概論　ブレヴス・リーグ編　菊川忠雄譯　4
日本社會史　本庄榮治郎著　4
マルクス藝術論研究（一）　シルレル著　上田進譯　3
エンゲルス
マルクス藝術論研究（二）　シルレル著　上田進譯（刊近）
エンゲルス
法律哲學綱要（上）　ヘーゲル著　田村實譯（刊近）
法律哲學綱要（下）　ヘーゲル著　田村實譯（刊近）
キリスト教の起源（上）　カウツキー著　栗原佑譯（刊近）
キリスト教の起源（下）　カウツキー著　栗原佑譯（刊近）

人類學（第一部）　タイラー著　高山洋吉譯（刊近）
人類學（第二部）　タイラー著　高山洋吉譯（刊近）
階級社會の藝術　メレハーノフ著　藏原惟人譯　4
文學論　ローレンス著　機田正信譯（刊近）
華山文集　藤森成吉著（刊近）
非時代的考察　ニーチエ著　阿部・河上共譯（刊近）
藝術論文集（一）　ニーチエ著　井汲越次譯（刊近）
藝術論文集（二）　ニーチエ著　野上晨譯（刊近）
書簡集　ニーチエ著　芳賀檀譯（刊近）
バルザック論　エス著　平岡昇譯（刊近）
ロシア文學史（上）　クロポトキン著　伊藤整譯（刊近）
ロシア文學史（下）　クロポトキン著　伊藤整譯（刊近）
キエルケゴール論　シエストフ著　中井晞二譯（刊近）

（以下續刊）

改造文庫第二部目錄

古事記　澁澤久孝校訂（刊近）
萬葉集（上卷）　折口信夫校訂（刊近）
萬葉集（下卷）　折口信夫校訂（刊近）
古今集　吉澤義則校註（刊近）
新古今和歌集　吉澤義則校註　5
新編源氏物語（上卷）　折口信夫校註（刊近）
新編源氏物語（下卷）　折口信夫校註（刊近）
枕草紙　山岸德平校訂（刊近）
平家物語（上卷）　吉澤義則校訂　4
平家物語（下卷）　吉澤義則校訂　5
雨月物語　山口剛校訂　2
山家集　齋藤茂吉校註（刊近）
俳諧七部集　萩原蘇月校訂　3
蕪村七部集　萩原蘇月校訂　3
伊勢物語　久松潛一校訂　2
神皇正統記　宮地直一校註　3
奥の細道　萩原蘇月校訂　3
芭蕉翁文集　萩原蘇月校訂　3
曾根崎心中・心中天の網島・女殺油地獄　黑木勘藏校註　3
冥途飛脚　五十嵐力校註（刊近）
國姓爺合戰　五十嵐力校註（刊近）
大經師昔暦　橘口慶子代評註　2
井筒　橘口慶子代評註　2
重井　橘口慶子代評註　2
西鶴織宙（上）　橘口慶子代評註（刊近）
西鶴織宙（下）　橘口慶子代評註（刊近）
金槐和歌集　半田良平校註（刊近）
大鏡　吉澤義則校註　5
徒然草　吉澤義則校註　3
萬葉漫筆　佐佐木信綱著　6
油地獄　磯藤緑雨著（刊近）
北村透谷選集　島崎藤村編　1
樋口一葉選集（一）　樋口一葉著　1
平凡　二葉亭四迷著　1
子規俳話　正岡子規著　3
子規歌論歌話　正岡子規著　3
坊つちやん　夏目漱石著　2
草枕　夏目漱石著　2
それから　夏目漱石著　3
一握の砂　石川啄木著　2
悲しき玩具　石川啄木著　2
我等の一團と彼等は天才である　石川啄木著　1
山陰土產その他　島崎藤村著　2
民謠集　北原白秋著　2
西鶴織宙　作曲白秋　2
獄中記　ワイルド著　神近市子譯　2
厭世家の誕生日　佐藤春夫著　1
輪廻　橫光利一著　1
勞働者の居ない船　窪山嘉樹著　1
海に生くる人々　窪山嘉樹著　2
小公子　バーネット著　若松賤子譯　2
ホワイト・ファング　ロンドン著　堺利彥譯　3
はやり唄　小杉天外著　3
朝の螢　齋藤茂吉著　2
十年　島木赤彥著　2

自選歌集 川のほとり 古泉千樫著 2
自選歌集 松の芽 中村憲吉著 2
自選歌集 海やまのあひだ 釋迢空著 4
自選歌集 立春 木下利玄著 2
自選歌集 花樫 北原白秋著 3
自選歌集 人間往來 與謝野晶子著 2
自選歌集 槻の木 窪田空穂著 2
自選歌集 野原の郭公 若山牧水著 2
自選歌集 原生林 前田夕暮著 3
自選歌集 空を仰ぐ 土岐善麿著 2
作曲白秋 童謡集 北原白秋著 2
作曲白秋 國民歌謡集 北原白秋著 2
作曲白秋 舞踊詞集 北原白秋著 2
背徳者 アンドレ・ジッド著 石川淳譯 2
チェホフ書簡集 内山賢次譯 5
鶯の卵 土岐善麿著 3
信綱文集 佐々木信綱著 2
信綱歌集 佐々木信綱著 (近刊)
信綱歌話 佐々木信綱著 (近刊)
愚庵歌集 齋藤茂吉編 (近刊)
芭蕉遺語集 萩原井泉水校訂 3
茶一七番日記(上卷) 萩原井泉水校訂 4
茶一七番日記(下卷) 萩原井泉水校訂 (近刊)
おらが春 萩原井泉水校訂 3
蟻の生活 メーテルリンク作 岡信一郎譯 3
新花摘(篠村鑑文集) 萩原井泉水校訂 2
愛すればこそ 谷崎潤一郎著 3
愛なき人々 谷崎潤一郎著 3
痴人の愛 谷崎潤一郎著 4
海へ 島崎藤村著 5
屋上の土 古泉千樫著 5
寡婦マルタ オルゼシュコ著 清見陸郎譯 3
句集虚子 高浜虚子著 6
井泉水句集 萩原井泉水著 5
サニン アツイバーセフ著 武林無想庵譯 6
一青年の告白 ラヴィンスキー著 辻潤譯 3
一週間 リベディンスキー著 池谷信三郎譯 2
室生犀星詩集 室生犀星著 5
千家元麿詩集 千家元麿著 3
横瀬夜雨詩集 横瀬夜雨著 5
修禪寺物語 岡本綺堂著 3
少年の悲哀 岡本綺堂著 2
運命論者 國木田獨歩著 2
愛慾 武者小路實篤著 2
作者別萬葉全集 土岐善麿編著 6
作者別萬葉以後 土岐善麿編著 6
自傳 片山廣著 3
日本橋 泉鏡花著 5
佛蘭西家庭童話集(第一卷) ボーモン夫人著 長松英一譯 3
佛蘭西家庭童話集(第二卷) ドルノア夫人著 長松英一譯 5
佛蘭西家庭童話集(第三卷) ペロー著 長松英一譯 3
佛蘭西家庭童話集(第四卷) 長松英一譯 (近刊)
死の如く強し モパッサン著 中村星湖譯 5
巴里の憂鬱 ボードレール著 三好達治譯 2
死の舞踏 ストリンドベリー著 山本有三譯 2
野性の呼聲 ロンドン著 花岡俊定譯 3
奈落の人々 ロンドン著 和氣俊次郎譯 3
爭鬪 ゴルスウォーシイ著 和氣俊次郎譯 2
無名作家他廿の日記(短篇小說篇三篇 現代物一) 葡池寛著 5
出世(他廿短篇小說篇七篇 現代物二) 葡池寛著 4
國醫の彼方に(他廿短篇小說篇七篇 時代物) 葡池寛著 5
瞳の發生(他廿短篇小說篇六篇 傳ダ遺) 葡池寛著 4
父歸る(他十戯曲篇六篇 現代物) 葡池寛著 5
藏十郎の戯曲篇(他廿戯曲篇三篇 時代物) 葡池寛著 5
眞珠夫人 葡池寛著 6
慈悲心鳥 葡池寛著 4
新珠 葡池寛著 5
火華 葡池寛著 4
受難華 葡池寛著 5
赤い白鳥 葡池寛著 3
明眸禍 葡池寛著 5
新女性鑑 葡池寛著 3
陸の人魚 葡池寛著 4
第二の接吻 葡池寛著 3
東京行進曲 葡池寛著 3
結婚二重奏 葡池寛著 3
不壞の白珠 葡池寛著 3
二つの魂・餘計者 プリボイ著 平井譯 2
勝利と敗北 シエストフ著 中山省三郎譯 3
肉體の惡魔 ラディゲ著 土井・小牧譯 3
この人を見よ ニーチエ著 小栗孝則譯 4
父と娘(他四篇) 武者小路實篤著 4
わしも知らない(他十三篇) 武者小路實篤著 4
人生雜感(感想集) 武者小路實篤著 4
イブセン全集一 河野・赤田・小宮譯 3
イブセン全集二 大山・長谷部譯 5
イブセン全集三 中村・仲木譯 5
イブセン全集四 (近刊)
イブセン全集五 大山・大關・中村譯 5
イブセン全集六、七、八、九、十 (近刊)
ボルシエヴィキの手記 ピアトニツキー著 三矢・岡譯 4
聖書物語(舊約の卷) ルーン著 綿貫・近市子譯 3
聖書物語(新約の卷) ルーン著 綿貫・近市子譯 3
洋服簞笥 トーマス・マン著 六笠・武生譯 2
今戸心中 廣津柳浪著 3
嬰兒殺し 山本有三著 3
芭蕉・夜船・草の詩 吉田絃二郎著 3
ドレフユース事件 大佛次郎著 3
新人國記 アラン・フランス著 木村荘一譯 4
シラー詩集 小栗孝則譯 (近刊)
どっこいおいらは生きてゐる! トラー著 藤木蓮譯 2
獄窓から 和田久太郎著 5

人波　アルツイバシエフ著　久一郎譯　3
結婚の悲劇　アルツイバシエフ著　久一郎譯　5
苦難の路（上）　アー・トルストイ著　久一郎譯　4
苦難の路（下）　アー・トルストイ著　久一郎譯　4
芭蕉書簡集　萩原蘿月著　3
草雙紙選　尾崎久彌編　5
矢島柳堂　志賀直哉著　2
焚火　志賀直哉著　2
老人　志賀直哉著　2
網走まで　志賀直哉著　2
速夫の妹　志賀直哉著　2
好人物の夫婦　志賀直哉著　2
雪の日　志賀直哉著　2
暗夜行路（前）　志賀直哉著　3
短歌集　石川啄木著　4
詩集　石川啄木著　5
小說集（上）　石川啄木著　6
小說集（下）　石川啄木著　5
評論感想集（上）　石川啄木著　4
評論感想集（下）　石川啄木著　4
書簡集（上）　石川啄木著　5
書簡集（下）　附年譜　石川啄木著　4
チロルの谷間（他三篇）　ローレンス著　織田正信譯　4
國歌八論　土岐善麿編　3
三人　島崎藤村著　3
出發　島崎藤村著　4
新選秀歌百首　齋藤茂吉著　3
性に眼覺める頃　室生犀星著　4
多情佛心（前篇）　里見弴著　3
多情佛心（後篇）　里見弴著　3
苦の世界　宇野浩二著　3
山戀ひ　宇野浩二著　4
天保赤門黨　土師清二著　5
血染のパイプ　甲賀三郎著　4
平妖傳（上卷）　佐藤春夫著　4
平妖傳（下卷）　佐藤春夫著　3
田園の憂鬱　都會の憂鬱　佐藤春夫著　4
自選短篇集　林房雄著　7
斬るな劍　他九篇　白井喬二著　5
大暴風雨時代　前田河廣一郎著　5
淺草紅團　川端康成著　5
女性讃（他四篇）　片岡鐵兵著　5
喧嘩駕籠　長谷川伸著　5
角兵衛物語　長谷川伸著　5
唐人お吉　十一谷義三郎著　2
時の敗者　唐人お吉　十一谷義三郎著　4
笑ふ男・笑ふ女　十一谷義三郎著　5
或る女（上卷）　有島武郎著　4
或る女（下卷）　有島武郎著　3
星座・生れ出る惱　有島武郎著　4
有島武郎戲曲集　有島武郎著　4

有島武郎書簡集　有島武郎著　5
有島武郎日記集　有島武郎著　4
社會詩集　生田春月譯　ハイネ著　5
戀愛詩集　生田春月譯　ハイネ著　5
放浪（記）　放浪（記）　林芙美子著　（絕版）
續　林　芙美子著　（絕版）
彌太郎笠　子母澤寬著　4
神變麝香猫（上卷）　吉川英治著　4
神變麝香猫（下卷）　吉川英治著　3
女給　廣津和郎著　5
伊太利物語　ゴーリキー著　平井肇譯　5
闇の力・生ける屍　トルストイ著　昇曙夢譯　4
蟹工船・工場細胞　小林多喜二著　4
不在地主・オルグ　小林多喜二著　4
宣言・クララの出家　有島武郎著　3
迷路　有島武郎著　3
カインの末裔・潮騷　有島武郎著　2
お末の死・かんかん虫　有島武郎著　2
旅する心　有島武郎著　2
小さき者へ・石にひしがれた雜草　有島武郎著　2
惜愛　有島武郎著　2
短篇集　有島武郎著　2
感想集　有島武郎著　2
俳諧續七部集　宇田久校註　4
其角七部集　宇田久校註　4
牧水歌集（一）　若山牧水著　4
牧水紀行文集　若山牧水著　4
明治大正詩史概觀　北原白秋著　4
惡魔　長詩　レルモントフ著　藏原惟人譯　3
ロシア短篇集（五月の夜）　藏原惟人譯　3
貝殼追放（上卷）　水上瀧太郎著　7
貝殼追放（下卷）　水上瀧太郎著　7
歌集鏡葉　窪田空穗著　4
すはらしい合金　キルション著　杉本良吉譯　5
風の街　モウパッサン著　中村星湖譯　4
我等の心　中村星湖譯　4
牧水歌集（二）　若山牧水著　4
牧水歌集（三）　若山牧水著　4
好色一代男　神谷鶴伴校註　5
チェーホフ傑作集　チェーホフ著　昇曙夢譯　4
人類文化史物語上　ヴァン・ルーン著　神近市子譯　5
人類文化史物語下　ヴァン・ルーン著　神近市子譯　5
青牛集　古泉千樫著　5
葛西善藏小說集一　葛西善藏著　3
葛西善藏小說集二　葛西善藏著　4
葛西善藏小說集三　葛西善藏著　4
葛西善藏小說集四　葛西善藏著　4
葛西善藏小說集五　葛西善藏著　3
葛西善藏小說集六　葛西善藏著　3
葛西善藏感想集　葛西善藏著　5
賴朝・爲朝　幸田露伴著　3
幽秘記　幸田露伴著　6
青年（上卷）　林房雄著　4

青年（下卷）林房雄著 4
樋口一葉選集(三)樋口一葉著 5
シュロツフエンクライスト著シユタイン家の人々 溜野修譯 6
ヘルマン戰爭 溜野クライスト著修譯 5
野蠻人達・敵・子供達 八住利雄譯ゴーリキイ著 6
どん底(他一篇) 昇曙夢譯ゴーリキイ著 4
私の大學・醫人・初戀 藤原惟人譯ゴーリキイ著 6
回想 外村史郎譯ゴーリキイ著 5
隨筆集 上脇進譯ゴーリキイ著 4
折たく柴の記 伊藤正公夫註新井白石著 6
ホムブルクの公子 溜野クライスト著修譯 4
ドイツ・冬物語 小堀甚二譯ハイネ著 4
チエルカツシュ(他七篇) 中村白葉譯ゴーリキイ著 6
潛水艇乘組員 中垣虎兒郎譯ブリボイ著 3
妾の半生涯 羅由英子著 4

父と子 昇曙夢譯ツルゲーネフ著 6
色ざんげ(他十篇) 秋田滋譯モウパツサン著 3
モウパツサン選集(二) 秋田滋譯モウパツサン著 3
死せる魂(上) 下永庸一譯ゴーゴリ著(近刊) 5
死せる魂(下) 下永庸一譯ゴーゴリ著(近刊) 6
日記の中から 湯浅芳子譯ゴーリキイ著 4
蕩兒歸る(他二篇) 齋山修三譯ジイド著 2
戀をしてみて(他二篇) 齋山修三譯ジイド著 2
ブツデンブロオク家の人々(一) 吉良良吉譯トオマス・マン著 4
ブツデンブロオク家の人々(二) 吉良良吉譯トオマス・マン著(近刊) 6
ブツデンブロオク家の人々(三) 吉良良吉譯トオマス・マン著(近刊) 6
ブツデンブロオク家の人々(四) 吉良良吉譯トオトス・マン著(近刊) 6
小鳥を友として 水村茂譯ハドソン著 5
靜かなドン(一ノ二) 上田進譯ショーロフ著 4
靜かなドン(一ノ三) 上田進譯ショーロフ著(近刊) 6
征服者 小松清譯マルロオ著(近刊) 6
新編シラー詩抄 小栗孝則譯 8
私は愛す 湯浅芳子譯アウデエンコ著(近刊) 6
瀧口入道 高山樗牛著 2
萬葉集略解(一) 森本健吉校訂加藤千蔭著(近刊) 6
萬葉集略解(二) 森本健吉校訂加藤千蔭著(近刊) 6
萬葉集略解(三) 森本健吉校訂加藤千蔭著(近刊) 6
萬葉集略解(四) 森本健吉校訂加藤千蔭著(近刊) 6
萬葉集略解(五) 森本健吉校訂加藤千蔭著(近刊) 6

（以下續刊）

紙本